

眼、幢に懸けたりしが、吳王の果を見んとて、三年まで枯れずして見開きてありしが、吳王面縛せられ、彼の一雙の眼の前を渡りけるを見て、自ら動きはたらきて笑ふ氣色見えけり。しうしやうの程ぞ恐ろしき。吳王彼に面を合せんこと、流石恥しくや思ひけん、袖を顔におし當て、頭を傾けて通り給ふぞいたはしき。數萬の兵これを見て、唇を返さぬけなかりけり。さて彼の伍子胥が眼は吳王の果をみおくりて、霜の日に解くるが如く、時の間に消えて失せにけるぞ奇特なる。すなはち吳王夫差をば典獄の官に下されて、會稽山の麓にて、遂に刀を刎れ奉る。あはれなりし例とぞ傳へける。されば古より今に至るまで、俗のことわざに、會稽の恥を雪むとは、この事を言ふなるべし。さて越王は吳國を取るのみならず、隣國まで從へ、霸者の盟主となりしかば、その功を賞じて、范蠡をば萬戶侯に封ぜんとし給ひしかども、范蠡曾て祿を受けず、大名の下には久しく居るべからず、功成り名遂げて身退くは天の道なりとて、遂に名を變へ、陶朱公といはれて、五湖といふ所に身をかくし、世を遁れて釣をして白頭翁となりて、後には行方知らずと申しつたへけり。或る人の曰く、越王は會稽の恥を雪ぎ、運命を開き世に榮ふるなり、今の時致は恥を雪ぐといへども一命を失ふ、たとへば少し違ふやうなれども、名を清め譽を世に残す理にや、この人々の可矢執つての勢、打物取つてのふるまひ、

吳越の戦には優れるものかなと感ずる人多かりけり。聞く人ことわりとぞ申しける。

七八 鶯と蛙の歌の事

さても花に啼くうぐひす、水に棲むかはづさへ、歌をば詠むものと言ひけるは、人皇八代の帝孝元天皇の御時、大和國葛城山の麓孝元寺といふ所に、一人の僧ありけるが、またもなき弟子を先立て、深くなげき居たり。次の年の春、かの寺の軒端の梅の梢に鳴く鶯の聲を聞けば、初陽毎朝來、不相還本栖と鳴きける、文字にうつせば歌なり。

初春のあした毎には來れどもあはてぞ還るもとのすみかに

と鶯のまさしく詠みたる歌ぞかし。また蛙の歌よみけるとは、むかし良貞住吉に忘草を植ゑ、歸りて後、又程ふりてのち住吉にゆきむすびし女を尋ねけるに、かの女には逢はずして、あくがれ立ちたりしをりふし、蛙その前を這うて通りしあとを見ければ、三十一文字の歌なり。

住吉の濱のみるめも忘れればかりそめ人にまたとばれけり

これまた蛙のまさしく詠みし歌なり。

七九 十郎大磯へ行きて立聞の事

さても十郎祐成は、三浦より會我へかへりけるが、さだめなき浮世の習、つくぐと案ずるに、明日富士野にうち出でて、歸らんことは不定なり、この二三年情をかけて淺からぬ虎に暇乞はんとて、宿河原松井田と申す所より、大磯にこそ行きにけれ。折節鎌倉殿召しに従ひ、近國の大名小名うち連れうち連れとほりけり。十郎虎が宿所に立ち寄りて在りけるが、心をかへて思ひけるは、國々の侍多く通るなりふしなれば、流を立つる遊者また我ならぬ人に情もやと、心許なく思はれて、暫く駒を控へて内の體をぞ聞きぬたる。折節虎が住家には、友の遊君あまた並居てものがたりしける中に、虎が聲と覺しくて、只今上る人々は何處の國の誰人ぞ、聞き給はずや、先陣は横山藤馬丞とぞ申しける。虎聞きて、實や孔子の言葉に、耳の樂しむ時には慎むべし、心の驕る時には、恚にすべからざれとは申せども、あはれ實に、この殿原の馬・鞍・鎧・腹巻を妾にくれよかしの女房たちは聞きて、あはれ願物、何の御用にやといふ。祐成にまぬらせ、思ふことをばかり言ひて涙を浮べけり。友の遊君聞きて、不思議やな、思ふことは何なるらんと怪しみながら、問ふべきにあらず、敵討ちて後にこそ、

この事よとは知られけり。されば此の人もかかれてより、知りけるよとは申し合ひけり。祐成物越に聞きて、如何でかこれ程情ふかきものに、立聞したりと思はれては、後の怨も残るべし、後暗くも思ひなば來ぬこそと思ひつゝ、知らざる體にもてなし、駒の口を暫く控へ、何となく廣縁に下り、鞭にて簾をうち揚げ内に入りぬ。虎もやがて出で、何時よりむつまじく語り寄り、あかね世の中の夢か現かと思ひぬたりける處に、思の外なる事こそ出來たれ。

八〇 和田義盛さかもりの事

さるほどに、和田義盛一門百八十騎うちつれて、下野へ通りけるが、子供に向ひ言ひけるは、都のことは限あり、あなかにては黄瀬川の龜鶴、手越の少將、大磯の虎とて海道一の遊君ぞかし、一獻すすめて通らばや、しかるべく候ふとて、かの長の方へ使をたて、かくとぞ言はせけるに、長なめならず喜びて、遠侍の塵とらせ、義盛これへと請じけり。虎におとらぬ女房ども三十餘人出で立たせ、座敷へこそは出しけれ。朝比奈三郎義秀・古郡左衛門胤氏をはじめとして、八十餘人居ながれて、すでに酒宴ぞ始りける。されども、虎は座敷へ出でざりけり。義盛こゝろえず思ひて、この君達もさ

ることなれども、虎御前の見参のためなり、などや見え給はぬ、義盛悪しくや参りて候ふかと言ひければ、母聞きて、この程煩はしくてといひながら、座敷を立ち虎がかたへ行き、などや遅くいで給ふぞ、疾くくと言ひおきて、母は座敷へ出て、たゞいま虎は参り候ふといひければ、義盛盃控へ、今やと待てども見えざりけり。なかく始より、こゝち例ならずと、言ひなげよかるべきを、唯今といふにより、義盛、色を損じ、御心に背くことあらば、罷り立ちてかされて参るべしといふ。母聞きてあしざまにやと思ひ、また座敷を立ち、なにとて出でたまはぬぞや、時世にしたがふ習、思はぬ人に馴るゝもさのみこそ候へ、怨しの御振舞やとてたしむ。虎はまた十郎が心をかれて、衣引きかづき打ち臥しぬ。母はこの心を見かれて、いかにや昔のふんぢよがことを知り給はずや、さやうの事だに有るぞかし。なほも出でまじくば、六字の名號も御照覽候へ、生々世々不興するといひ捨て、座敷へこそは出でにけれ。

八一 ふんぢよが事

抑ふんぢよと申す由來をくはしく尋ぬるに、むかし大國流砂の水上に、ふんぢよといへる女あり。

天下にきこゆる長者なり。金銀切玉のみならず、七珍萬寶、よもの藏に餘りあり。しかれども、いかなる罪の報にや、一人の子なし。悲しみて祈れども叶はず。あるとき思はざるに懐妊す。悦の思をなすに、苦めることいふばかりなし。されども、子の出で來ねべきことの嬉しさに、物の數とも思はざりけり。日數つもる程に産の紐を解く。見れば人にはあらで、卵を五百生みたり。これはいかに、一つなりとも不思議なるぞかし、五百まで生ることたゞことにあらず、縁なき子をしひて祈るによつて、天の憎を蒙るとおぼえたり。睨りなば如何なるものにて親をも損じ、人をも害すべきやらん、そのうへ胎卵濕化のうち、卵生罪ふかすと既かれたり、置くべからずとて箱に入れて、りうさの涙にながし棄てけり。不思議なる例なり。途の川のすゑにれうかんといふ所に、きよはくといふひんたう無縁の老人あり。且暮この河の魚族をすなどり。身命を助りけるが、をりふし釣するところへこの箱流れよりたり、取り上げ開きみれば卵なり。何者の子やらんと思ひ、家に取りて歸り、妻に斯くと語る。女これを見て、恐ろしやいかなるものにか睨りなん、主も様ありてこそ棄てつらん、いそぎ元の川に入れよといふ。男の曰く、たゞ置き候へ、斯様なるものには不思議もこそあれ、たとひ僻事ありとも吾等は齡程も有るべきなられば、彼が様を見よとて、物につしみ暖にして置きたりければ、程もな

く美しき男子に解りぬ。吾れ古より子の無きことを歎きおもふに、然るべき瑞相、天のあはれみにやと悦びて、また見れば、解りく五百人にぞ解りそろひける。一つを棄て、一つを養はんこと怨めしく黙止し難くて、取り集め養ひけるに、一つも恙なく成長しけるぞ不思議なる。まことに夫婦二人の時だにも、渡世かなひがたく乏しかりけり。まして此の者どもを育てけるほどに、朝夕の生路に倍びければ、此處や彼處に徘徊し、命をたすからんとする程に、心ならず猛悪になり、おもはずも慾心に住す、瞋恚をむれとして驕慢にあまりければ、外道にも近づきけり。ある時彼等いひけるは、我等一人ならず饑餓におよべり、さればとて徒に身を棄つべきにあらず、この川上にふんぢよとて長者あり、財寶藏に置きあまる、いざや行きてうち破り寶を取りぬべしと言ひければ、一人が進みいでいふやう、さることなれども、それ程いみじき果報者を我等いやしき貧力にて、寶を奪はんこと思ひも寄らず、かへつて身の仇となりぬべし、案じ給へといふ。今一人進みて言ふやう、さらば外道どもを語らひ、彼等が神通の力を借りて破つてみん、しかるべしとて、飛天外道といふ者のもとへ言ひ遣りたりければ、素より鬪争修羅をこのむ者なれば、同類を催しうつ立ちける。裝束には流轉生死の鐵直垂に、惡業煩惱の籠手をさし、貪慾の脇立に、因果撥無の脛當に、愚癡暗昧のつなねき穿き、極大邪見

の膝甲に、誹謗三寶の樹金物をぞ打つたりける。三界無安の白星の兜に、六趣輪廻の煩當、瞋恚憤怒の刀をさし、放逸無慚の太刀を佩き、殺生偷盜の大弓に、破戒無明の弦をかけ、苦患極重の箆には、諸法愛著の矢敷をさし、四天王の馬のふとく逞しきに、四苦八苦の鞍置きてぞ乗つたりける。異類異形の下外道共、思ひくゝの裝束に、いろくゝの旗さし、敵を知らずぞ集りける。城中にはしづまり返りて音もせず。されども用心きびしくて、容易く入るべき様はなし。時を移してゆらへたり。かのふんぢよと申すは、同じく福者と言ひながら、三寶をあがめ仁義をみださぬ賢人なり、いかでか諸天も捨て給ふべきならねば、ふんぢよを渴仰したまひけり。かくては如何あるべきとて、死生しらざる外道ども、なめき叫んでみだれ入る。その時惡魔を降伏の四天十二天影向なりて、四角四方をまほり給ふ。四天は素より甲冑をよるひ、弓箭はなさぬ勇士なれば、面もふらずさへ給ふ。火天猛火をばなし、風天風を吹かせ、おのゝ城を守り給ふ。中にも水天は弓矢を守らんと誓ひたまふなれば、數の眷族を引き連れ、妙觀察智の旗さし、ことに進みて見え給ふ。その日の御裝束には、九品正覺の直垂に、相好莊嚴の籠手を指し、上求菩提の小具足に、下化衆生の脛當、しくりやうくわんのつなぬきばき、大悲大衆の煩當し、無趣方便の赤糸のけをひかせ、紫磨黃金の樹金物をこそ打つたりけれ。

萬徳圓滿の月眞甲にうち、畢竟空、四空の四方白の兜を猪首に著、五劫思惟の嚴物造の太刀を佩き、首楞嚴定の刀をさし、火舎三昧の月弓、寶相般若のつるをかけ、智徳無量の矢かずをさし、隨類化現を羽にまじへ、筈高に負ひなし給ふ。もとより手馴れし大蛇後よりはひかゝり、左右の肩に手をおき、兜の上に頭をもたせ、兩眼のひかり明らかにして、時々電四方に散り、紫の下の色あざやかにして、かり／＼火焔を吹き出す勢天にあまる、今の世に兜の龍頭を打つこと此時よりも始りける。おのおの珠丸に腰を懸け宣ひけるは、大修羅王が職のこはきも、佛力には敵はず、況していはん、彼等が勇、物のかずにて數ならず、蟻の塔ともおぼえたり、城中靜まれとぞ下知したまふ。茲に城の中より武者一人す、み出で申しけるは、唯今寄せ來る兵は、何處の國のいかなる者ぞ、また如何なる宿意あるぞ、くはしく名乗れと言ひければ、五百餘人の兵聞きて、彼等には親もなし、氏系圖もなし、むまゝるゝ所を知られば、なんぞ誰と名のるべし、朝夕おもふこととは、寶の欲しきばかりなり。いそぎ藏をひらき、財寶を與へ給へ、吾等思ふほど取りて歸らんといふ。こゝろえぬ言葉かな、人により分に隨ひ、氏も名字もあるものを、猛惡の身不思議なり、くはしく申せといひければ、問うては何にし給ふべき、さりながら此の川上より流れ來たる五百人の卵の流人なり、いはれなければ人知らず、

急ぎ寶を施して歸すべしとぞ申しける。流れきたる兵といふを、ふん女つくぐと聞きて怪しく思ひ、櫓の下にあゆみ出でて、五百人の嚴ばら近く寄りたまへ、尋ねべき事ありと言ひければ、一人塀の際に寄りたり。抑流れ來たと仰せられつる言葉について申すぞとよ、姿はなに／＼流れけるぞ。寶をば出さずむづかしとは言ひながら、我等が昔はいかなるものか生みたりけん、五百の卵にて水上よりながれけるを、取り上げて育てけるが、斯くなりぬといふ。さればこそと思ひ、其の卵は何に入れてるぞ。玉の宝箱に入れ、上には銘を書きしなり。銘をば何と書きたるぞ。はうしやうろうの箱と書ける。さては疑ふところなし、是はそなたのししやうなり。こなたの證據には、もし此の卵つゝがなく成長あらば訪れ來よ、ふん女と書きて判を捺し、箱の底に入れたりしが、剎那も肌を放さじと、頸に懸け持ちたりとて、懐よりも取り出す。さては疑ふ所なし、汝等は自ら子どもなりとて、門戸を開きて出でければ、尾花のごとく支へたる、鋒劍をも捨てにけり。母も子どもの懐しさに、劍の刃もわすれつゝ、彼等が中へはしり入りて見廻せば、兵も兜を脱ぎ、弓矢を横へ、おの／＼大地に跪く。何時しか母は懐しく思の涙に袖しぼる。なみぬたる兵も同じ心になりけり。彼も是もそかといふ情の袖も香しく、あはれみあはれむ装は、見るに涙もすゝみけり。實にや恩愛の中程悲しき事あらじ。ま

ことや夜叉羅刹を従へて、猛くいさめる武士も、母一人の言葉に皆靡くぞ哀なる。斯くて城中に誘ひ入れ、親子の睦れんころなり。

八二 辨財天の事

彼のふん女と申し人、後には大辨財天と現れ給ふとかや。五百人の人々は五百童子となり、その一はいんやく預りたまふ神と現れ、はうしやうろうの箱をも、そのなかに持たせ給ふ。一切衆生の願をことごとく汲みて、安樂世界に迎へんとちかひたまふ。斯様にたけき弓取も、母には従ふならひぞかし。

八三 朝比奈虎が局へ迎にゆきし事

さても母は虎を制しかね、なにとて母には従はざるやとぞ言ひける。虎はなほも涙に咽び、流を立つる身ほど悲しきことはなし、夫の心をおもひ知れば、母の命にそむき、また母に従へば、時の綺羅に愛づるに似たり。とにもかくにも我が思、みだれ初めける黒髪、飽かぬ情の悲しさよ、いかなる

罪の報にや、女の身とは生れけん、さればにや五障三従と脱きたまひけるぞやとて、さめくと泣きぬたり。十郎此のありさまを見て、何かは苦しかるべき、一旦こそあれ、座敷に出て給へかし、母の命に背きなば、冥の照覽も恐ろしと申しければ、虎は是にも従はず、たゞ泣くより外の事はなし。我盛これをば知らずして、何とて虎は遅きやらんとて、一座の興をうしなひけり。母も待ち兼ねけるにや、曾我十郎殿ましますが、さてや出でかれ候ふらん。和田はこれ聞きて、こゝろえぬ十郎が振舞かな、我こそ出でて對面せざらめ、流の遊君をふさぐべきか、まことに健事なり、四郎左衛門朝比奈はなきか、御迎に參れといふ。四百餘人の殿ばらも、はや事いできぬと色めきけり。祐成が在所近ければ、義盛が言葉手に取るやうにぞ聞えける。不思議やな、おもはぬ最期のいできたるぞや、身に思の有れば、千金萬玉よりも惜しき命なり、されども遁れぬところは力なし、徒なる死をして、五郎に怨みられんことこそ、想ひやられて悲しけれ、さりながら、斯様の所は神も佛も許し給へと言ふまゝに、烏帽子おし直し、直垂の露むすんで肩にかけ、伊東重代の赤銅造の太刀を二三寸抜きかけ、片膝おしたて、一方の扉をひらき、ことごとくしや三浦の者ども何十人もあれ、一番に入らん朝比奈が諸膝難ぎふせ、つゞかん奴ばら物の數にやあるべき、伊東の手並を見せん、遅しとこそは待ちかけたり。

虎もこのありさまを見て、實にや冥途より來るなる、獄卒の迫つ立つる途だにも、主君師匠の命には
 かけるぞかし、況してや夫婦恩愛の契あさからずとは、古今までも傳へ聞くなるものを、後の世まで
 も離れじと、思ひ切つて守刀、衣の襟に取り含み、三浦の人々いかに勇み亂れ入るとも、なにとなく
 立ち廻り、よき隙に義盛を一刀さし、如何にもならんと唯ひとすぢに思ひ定め、祐成ちかく寄り、今
 やと待つぞ優しき。時移りにければ、和田いよく腹を立て、いかに朝比奈はなきか、御迎にまわれ、
 無骨の訴訟も苦しかるまじとぞ怒りける。義秀聞きかね、座敷を立ち、虎が迎に行きけるが、つくづ
 く案ずるやう、十郎といふも、伊東の嫡々たり、心も亦たてきつたり、はじめより出さず斯様になり
 てはよも出さじ、我またあしく怒りて出さんも恥辱なり、所詮難なきやうにうち向ひて、賤さばやと
 思ひければ、静にあゆみ入りけるが、この殿ばらの兄弟は、身こそ貧なりとも、心は貧にあらばこそ、
 疎忽に入つて細頸打ち落され悪しかりなんと思ひ、扇笏に取りなほし、かしこまつて、これに曾我十
 郎殿の御入のよし、父にて候ふ者承り、御迎のために義秀をまぬらせられて候ふ、なにかは苦しく
 候ふべき、御出ありて親にてさうらふものに、御對面や候ふべき、それにまたそれがし一期の所望の
 さうらふ、御前の事ゆかしきことに、義盛思はれ候ふが、御座を存じて義秀申しとめて候ふ、しか

るべくば諸共に御出ありて、父が所望をもかなへ、義秀が面目ほどこすやうに御計ひ候へ、一向頼み
 たてまつり候ふ、さりながら御心に違ひ候は、まかり歸り候ふべしと、障子越に言ひければ、十郎
 聞きて、頼むといふに和らぎて、左右にやおよぶ朝比奈殿、如何でか異議に及ぶべき、立ち給へや御
 前、祐成も出でんとて、烏帽子の筒おしたて、直垂の衣紋ひきつくるひ、虎を先に立て、おのく
 三人出でたりけり。さてこそ並居たりける人々も、生きたる心地はしたりけり。まことに義秀のふる
 まひ優なるものかな、座敷に事も起らず、虎も出でて、十郎も心を破らで事過ぎにけり。是やせうろ
 んに、國の將にそきすることは奸臣にあり、家の將にさかんに貴うする事は忠臣によつてなりといへ
 り。かやうの事をや申すべき。朝比奈なかりせば、よしなきこと出で來、十郎も討たれ、和田にも人
 おほく亡びて失せなん、實に深淵に臨んで、薄氷を履むがごとく、危ふかりしことどもなり。

八四 虎が盃十郎にさしぬる事

義盛は虎を見たまひて嬉しげにして宜ひけるは、借も十郎殿の内になしくけるかや、他所がまし
 く心を隔て給ふものかな、御入を知りさうらは、始より申すべかりつるものを、これへくと請せ

らる。十郎笏とり直し、さんざうらふ、御目に懸るべきを、異體の無骨に候へば、罷り出てさるよし色代して、左手の盤になほりけり。虎も座敷に定まれば、盃前にぞ置きたりける。義盛虎をつくぐ見て、聞きしは物の敷ならず、斯かる者もありけるよ、十郎が心をかねて出てさるさへ優しく覺ゆるにや、それくといふ。なにとなく盃取り上げ、其の盃和田飲みて祐成にさす。その盃義秀飲みて面に下し、おもひざし思ひどり、その後は亂舞になる。こゝにまた始めたる土器盃虎が前にぞ置きたりける。取り上げけるを今一度と強ひられて、受けて持ちけるが、義盛これを見て、如何に御前、その盃何方へも思し召さんかたへ思ひざし給へ、是ぞ誠の心ならんとありければ、七分に受けたる盃に、千々に心をつかひけり。和田にさしたらんは時の賞玩異議なし、されども祐成の心のうち耻し、流を立つる身なればとて、むつびし人をうち置きながら、座敷に出づるは本意ならず、ましてや此の盃義盛にさしなば、さらに愛でたりと思ひ給はんも口惜し、祐成にさすならば、座敷に事おこりなん、斯くあるべしと知るならば、初より出てもせて、内にて如何にもなるべきを、再び物おもふ悲しさよ、よし／＼これも前世の事、思はざることあらば、和田の前下りにさし給ふ刀こそ、妾がものよ、支ゆる體にもてなし奪ひ取り、一刀刺し、とにもかくにもと思ひ定めて、義盛一目、祐成一目、心をつか

ひ案じけり。和田は我にならではと思ふところに、さはなくて、許させ給へ、さりとは思の方をと打ち笑ひ、十郎にこそさよれけれ。一座の人々目を見合せ、これは如何にと見るところに、祐成盃とりに上げて、某賜らんこそ狐藉に似たり、是をば御前といふ。義盛聞いて、志の横取無骨なり、いかでかさるべき、はやくと色代なり。さのみ辭すべきにあらず、十郎盃取りあげ三度酌む。義盛居丈高になり、年程物憂き事はなし、義盛が齡二十だにも若くば、御前には背かれじ、假令一旦嫌はるとも、斯様の思ひざしなば、他所へは渡さじものを、南無阿彌陀佛と高聲なりければ、殊の外にががしくぞ見えにける。九十三騎の人々も、義秀の方を見やりて、事やいできなんと色めきたる體、さしあらはれたり。十郎もとより願がぬ男にて、何程の事かあるべき、事出て來なば何十人もあれ、義盛と引つ組んで、勝負をせんずるまでと思ひ切り、嘲笑ひてぞ居たりける。

八五 五郎大磯へ行きし事

爰に五郎時致は會我に居たりけるが、父のために法華經誦みて、本尊に向ひ念誦しけるが、しきりに胸騒しけり。心得ぬ今の胸騒や、いかさま祐成の大磯へ越し給ひぬるが、東國の武士ども、富士野

へ打ち出づる折節なり、流の遊君ゆゑ事仕出し給ふにやと、心許なく思ひければ、帳臺にはしり入り、緋緘の腹巻取つてひつ懸け、伊東重代の四尺六寸の赤銅作りの太刀、十文字に結び下げ、鞍置くべき暇なければ、櫛馬に打ち乗つて、二十餘町のその程を、只一馬場に驅けつけ、門外を見渡せば、長者の門の邊には、鞍おき馬一二百疋引き立てたり。遠侍には物の具の音しきりにして、唯今事いできぬとぞ見えたりける。入るべき所なくして、門の外を廻り、日比祐成にゆき連れて通りし細道を廻り、虎が居所にこそ著きにけれ。さて十郎殿は如何にと問へば、和田殿と益を論じて、唯今事出で來ぬと申す。さればこそと思ひ、透垣を跳れ越え、兄の居たりける後の障子を隔て立ちたりけり。時致これにありと知られんために、斧にて障子越に、袴の著際を刺しければ、十郎誰ぞと問ふ。五郎小聲になりて、時致これにありといふ。十郎聞きて、千萬騎の兵を後に持ちたるよりも、頼もしくぞ思ひける。義盛の聲として、上もなく振舞ふものかなと聞えける。祐成の御事ぞとこゝろえて、何事もあらば、障子一重踏み破りて飛び出で、一の太刀にて義盛、二の太刀にて朝比奈、その外の奴ばら何十人もあれかし、物の數にてあらばこそと思ひきり、四尺六寸の太刀、杖につきて立つ。忍び兼ねたるありさまは、たうばち毘沙門の悪魔の降伏し給ふかとぞおぼえける。夕日脚のことなれば、太刀影の障子

に透きて見えければ、朝比奈これを見て推量し、まことや彼等兄弟は、兄が座敷にある時は、弟が後に立ち添ひ、弟が座敷にある時は、兄が後にあるものを、いかさま五郎は後にありと覺えたり。さしたる事もなきに、大事ひきいだして、何の益かあらん、又さりとは親しき仲ぞかし、何となき體にもてなし、座敷を立たばやと思ひければ、紅に月出したる扇を開き、なにとやらん御座敷静りたり、論へや殿原、はやせや舞はんとして、既に座敷を立ちければ、面々にこそ囁しけれ。義秀拍子を打ち立てさせ、君が代はちよにやちよを細石のとしぼり上げて、殿となりて苔のむすまでと、短く舞うてなきめけり。

八六 朝比奈と五郎力くらべの事

斯くて朝比奈三郎、舞も過ぎぬれば、五郎が立ちたる前の障子を引き開け見れば、案に違はず、時致は四天王をつくり損じたる様にて、踏みしかりてぞ立ちたりける。朝比奈あやまたず、狂言にとりなして、客人ましますぞや、此方へ入らせ給へとて、草摺二三閒むづと取りて引きけれども、少しもはたらかず、磐石なりとし、義秀が手を懸けなば、動かぬことあるべきかと思ひ、力にまかせ、えい

やくと引きけれども、五郎は物とも思はねば、引くともなく、引かるゝともなく、嘲笑ひてぞ立つたりける。大力に引かれて、横縫草摺こらへずして、一度に切れて、朝比奈は後へどうと倒れけり。五郎はすこしも働かで、仁王立にぞ立つたりける。さてこそ五郎時致はみぎはまさりの大力と、他所の人まで知りにけり。實やこの者の父河津三郎は、東八ヶ國に開ゆる股野五郎に、片手をはなちて角瓶三番勝ちてこそ、大力のおぼえは取りたりしぞかし、その子なるをや、力競はかなふまじ、賤さんものをとうち笑ひ、これへくと請ずれば、あまりの辭退は無禮なり、異體は御免候へと言ひく座敷に出でけるが、持ちたる太刀と草摺にて、未座なる人々の頸のまはり側顔を打ち毆り、さし越えく行き過ぎて、朝比奈が下なる疊になほりける。座敷に餘りて見えたりけり。朝比奈いそぎ座敷を立ちて、義盛の前にありける盃を、五郎の前にぞ置きたりける。時致盃取り上げて、酌に立つたる朝比奈に色代して、御盃の前後は進參の無禮御免あれ、御盃は賜り候ふとて、三度までこそ乾したりけれ。その盃思ひ取り申さんとて、元の座敷に直りけり。五郎も杓に手をかけ、近くもまゐらぬ御酌に、時致立たんとゆるぎ立つ。四郎左衛門座を立つて、某これに候ふとて、銚子に取りつけば、五郎もしばし色代す。義盛これを見給ひて、客人の御酌然るべからず、それくとありければ、常氏酌にぞ立つ

たりける。朝比奈盃取り上げ三度乾す、其の盃を虎飲みて義盛にさす。その時五郎扇笏にとり直し、今暫くも候ふべけれども、曾我にさし當る川の事御座候ふ、後日におとづれ申さんとて、兄諸共に立ちければ、虎も同じく立ちにけり。一座も不興至極にして、和田は鎌倉へ通りければ、この人々はうち連れて、曾我へとてこそ歸りけれ。

八七 曾我にて虎が名残惜みし事

賊にこの殿原のことは、これや名鳥晏天に翼をならべ遊ぶと雖も、沼澤に下りてきうそこの憂に遭ひ、大魚深淵の底に尾をふれども、陸にあがる思ありと見えたり。十郎も身に思のある者ぞかし、よしなき女の許にて、思はずの難に遭はんとしけるぞ、危ふかりし次第なり。斯くて祐成は虎を具して曾我に歸り、常に住みける所に隠しおき、何時よりも細々とうち語りしは、此のたび御狩の御供申し、思はずのおこしの矢にも中り、朽ちはつる埋木ともなるならば、身こそ貧に生れめ、鬚なるちりの見苦しきよと、人の言はんも口惜し、鬚削りてたび候へと言ひければ、虎は何としも思はで、數の櫛を取り散らし、しばらく鬚をぞ梳りける。十郎は女の膝に臥しながら、虎が顔をつくくと見て、祐成

を睦じと見んも、これぞ限なるべきと思へば、流るゝ涙を見て、例ならぬ御涙心許なきよ、何なるらんと問ひければ、今に始めぬこととは言ひながら、憂き世の中の定なきよ、このほどの萬あぢきなく、何事も心細くおぼゆれば、あだに契り置きしおなじ世の名の、立つほども如何にやと思へば、心に浮ぶ涙のこぼるるぞ、げにや頼まぬ身の習、かこつ命も露の間もいまはしくこそ思はるれ。實にもさやうに思ひ給はゞ、この度の御狩思し召し止り給へかし、君に知らるゝ宮仕のひまなきわざにも候はず、止り給へと言ひければ、思ひ立つ御供なり、何事かはといひながら、かほど深く思ふ仲、思ひ知らせず出でなば、情の色も絶えぬべし、せめて夢ほどこの事を知らせばやとは思へども、女は甲斐なきものなれば、飽かぬ別の悲しさに、止めんために母にもや語りひろめん、此の度は思ひ定めたるものゆゑ、かなはぬ事を母聞きて、思の種ともなりぬべし、または五郎も怨みなん、思ひ切りたる「大事、女にさぞといはんこと悪しかるべしと思ひ切り、なにとしもなく戯れけり。忍ぶとすれどその色の怪しく思ひ奉り、聲東なしと問ひければ、ふかき思の切なるに、東の明も思ひ合はする事なくて果てぬものならば、後の怨も深かるべし、よし思ひ出に一端を、言ひてや心を安むると、身のありさまを思ふには、憂きがすまひの詮なくて、世には住まじのその故を、いかにといひて知らすべき、されば

にや祖父入道の謀叛によつて斬られまゐらせし孫なれば、君にも召し使はれ、御恩蒙ることもし。まして先祖の本領は、年月餘所に見なす上、馬の一疋もけなだらかに飼はず、また父のためとて經卷の一部も書かず、あるとしもなき身の仕儀、人に見ゆるも恥しく、面ならぶる便もなし。さればこのたび御狩より歸りなば、出家を遂げ、墨の衣に染めかへて、頭陀乞食して靈佛懸社にまゐり、父の後世をも弔ひ、我が身をも助らんと思ひ候ふなり、世にありとも夢幻の如く、法身を残すべきにあらず、花山の法皇だにも、萬乗の位を去りて、山林に交り給ふぞかし、ましてや貧道無縁の祐成が、何に命も惜しかるべき、今度の御供を最期に定め、再び歸らじと思へば、飽かぬ別の道捨てがたくと申しければ、虎聞きもあへず十郎が膝にかゝり、暫しは物も言はざりけり。やゝありて、怨めしや問はずば知らせじと思し召すかや、まこと妻は大磯の遊君、あさましき者の子なれば、誠の道をも思し召さじなれども、女の身の果敢なき、身に代へてもこそ思ひ奉れ、見えそめしよりなどやらん、思の色深草よ、忍の袖の摺衣、忘れたてまつる便もなし、御志は知られども、御豫言のたがふをば、偽にまたなるらんと、心をつくし待たれしに、さやうに思ひ立ち給はゞ、妾も同じく剃削りおろし、墨の衣に身をやつし、一つ庵にあらばこそ、外に庵室引き結び、衣を濯ぎてまゐらせん、香を供へ給はゞ

花を摘み、薪を拾ひ給は、開伽の水を掬ひ、一つ蓮の縁をも願はん、その陸をいなど宣は、山々寺々を修行して、よそながら見奉らん、それも憚り思し召さば、聞き給へ、身を投げ一日片時も存へじとて涙にむせび申しけり。まことに十郎が膝のうへも虎が涙に浮くばかり、袖も絞りを兼ねたりける。十郎はつくづくと案ずるに、これほど思ひ入りたる志露ほども知らせずして、心づよく隠し透げぬるものならば、長き怨となりぬべし、もし立ち返らぬ習あらば、思ひ出して念佛をも申すべし、さればとて、人に漏すなといはん事を空にやすべき、そのうへ日數なければ知らせばやと思ひ、この事母にだにも知らせ奉らで、今まで過ぎしかども、御身の志切にして、知らせ奉るぞ、洩したまふべからず、眞の道心にもあらず、出家また遁世にてもなし、年比祈成が身に思ありとは知り給ひぬらん、その本意を遂げんと思へば、此の度出で、後、再び歸るまじければ、相見んことも今宵ばかりなり、さてしも何となく申し契りて、時の間と思へども、三年になりぬ、いつ思ひ出もなく果てんことこそ無念なれ、御志のほどこそ有りがたく思ひ奉れ、面々ごときの人、祈成風情のまどしく頼む所なきに、何によりてか露の情もあるべきに、三年の間の顔の、變らぬ色は常磐山、おのれ鳴きてや時鳥、憂き世の夢か朝顔の、果敢なくならん身の程を、恥ぢず忘れぬ情の袖、前世の事と言ひながら、過ぎ

にし事の恥しきよ、奉公の身なられば、御恩の時ともいはれず、くわいせんの身なられば、りのあらん折ともいはれず、思出のなきことを思ひ出し給はん事よとて、さめくくと泣きにけり。虎も此の言葉聞き、また打ち伏して泣くより外の事ぞなき。稍ありて起きなほり、そもこれは何と成りゆく事どもぞや、これほどの大事果敢なき女の身なりとも、争でか人に洩すべき、一人まします母にだにも聞かせたてまつらず、振り棄て、心強く思ひ立ち給はんこと、かずならぬ妾申すとも、止り給ふべきか、何につけても、飽かぬ別の道こそ悲しみても餘あり、斯様の大事心おかず知らせ給ふこそ、返すべくも嬉しけれ、さてこの年月の御馴染、いつの世かは忘るべき、思ふにかなはぬ事なれども、御物具の見苦しきを見まぬらす折節は、人々しき身なりせば、などや便にもなり奉らざらんと、しづ心をつくし明し暮しつるに、世を捨て、何處ともなくならんと思はるゝをこそ、身の置處なかりしに、思ひも寄らぬ永き別路とならん悲しきよとて、聲も惜しまず泣き居たり。十郎もせん方なくして、あまりな歎き給ひそ、人もこそ聞き候へ、名残は誰も同じ心ぞと慰めつゝ、これを形見にとて、祈成に添ふと思し召せとて、鬚の髪を切りて取らせぬ。虎は涙もろともに受け取り、肌守にふかく收め、物をも言はず伏し沈みぬ。おなじ枕にうち傾き、涙に咽ぶばかりなり。日も既に暮れければ、

今宵ばかりの名残ぞと、思ひやるこそ悲しけれ。千夜を一夜に重ねても、明けざれかしと思はるゝ、比さへ五月の短夜の、有明なれば宵の間の、待たるゝ程もなげればや、出づると見ればそのまゝに、傾く空も怨めしく、八壁といふも雞の、夜やしりふると明けやすく、夢見る程もまどろまで、東にたなびく横雲の、東雲しらむ憂枕、まだ陸言の盡きなくに、後朝になる曉の、涙に床も浮きぬべし。たがひの名残心のうち、さこそと思ひ知られたり。なほしも虎はうち臥して、消え入るやうに見えしかば、十郎彼を勇めんとて、暇申して祐成は、後生にて参り逢はんとて驚かせば、起きなほりたるばかりにて、ものいふまでばかりけり。今をかぎりの別なり、後の世までの形見とて、十郎著たりける目結の小袖に、虎が紅梅の小袖に著換へて、心のあらば移香よ、暫し残りて愛き別、慰むほども面影の、著換へし衣に留れかし、たがひの名残つきせずと、また諸共に打ち伏しぬ。幾萬世を重ねても、名残盡くべきにあらず、祐成も途まで送り奉るべし、日こそ傾き候へとて、茸毛なる馬に貝鞍置かせ、道三郎門のほとりに控へたり。この馬鞍返し給ふべからず、此の三年通ひしに、馬はかはれども鞍はかはらず、鞍はかはれども馬はかはらず、けふを最期のわかれば、とゞめ置きて永き形見とも思ひ給ふべし、但し馬は生あるものにて更ることあり、鞍をば失はて持ち給へと、言ひく馬にぞ乗せたりける。

たりける。

八八 山彦山にての事

祐成も送るべしとて、馬に鞍置かせ打ち乗りて、中村通にゆくべし、大道は馬鞍も見苦し、虎を祐成が思ふとは皆人知られたり。供の者ども、かひなくしからずとて、打ち連れてこそ送りけれ。曾我と中村の境なる、山彦山の峠まで送りきて、十郎こゝに駒を控へ、今少しもおくりたくは候へども、必ず今朝より出でんと定めしかば、定めて五郎も来たらん、名残は盡くべきにあらず、この世にて相見ん事も今ばかりぞと思へば、遣る方なくして涙に咽ふばかりなり。遠近のたづきも知らぬ山中に、道もさやかに見えわかず、彼の松浦佐用姫が領布振る姿は石になる、それは昔の事ぞかし、今の別の悲しさに、駒近々とうち寄せ、手に手を取り組み、涙にむせぶばかりなり。やゝありて、祐成が心の申おしはかり給へ、これにて年を送るべきにあらず、唯ひとすぢに淨土の縁を結ばん、來世をふかく頼むぞと心強くも思ひ切り、控ふる袖を引き別けて、泣々立ち別れけり。げにやかんくの床の上に、はるかに契を千年の鶴に結び、ちんじやの筵のうへには、とほく階を萬劫の龜に歸して契りしか

ども、遁れぬ別の途は力およばず、互に後を返り見、坂中にやすらひて控へたり。幽に見えし姿も見えずなり行けば、そなたの空のみ返り見る、足曳の山の彼方の戀しさは、いづれも同じ心にて、現ともなき涙の袖、夢のごとくに打ち別れにけり。思の餘に、虎が馬の口控へたる道三郎に泣々言ひけるは、祐成を見奉らんも、今ばかりの名残なり、何事も細々と言ひたかりつるを、涙にくれていひも盡さず、取りわけ暇乞ひ給へるに、返事せざりし心許なければ、今一度呼び返し奉りてたび候へ、物一言申さんと言ひければ、道三郎、唯世の常の出家遁世にてもなしとて、さしても騒がざりけるが、斜ならざる互の歎を見て哀に思ひ、いそぎ走り歸り、遙に行きたりける十郎を呼び返し、もとの峠にうちあがり、駒をひかへて何事ぞと問ひければ、虎は涙に目もくれて、思ひ設けしことのはの、何時しか今は失せ果て、鞍の前輪にうちかかり、消え入るやうに見えしかば、十郎わきて言ふべき言葉もなくて、たゞ泣くばかりにてぞありける。稍ありて虎は息の下にていひけるは、何時となくさぞと契らぬ夕暮も、駒の足並響の音のする時は、若しやと思ふ折々の、その人となく過ぎゆけば、その夜はむなしく床に臥し、鳥諸共に泣きあかす、枕の上の塵の海、思を深くたゞへつゝ、夕の鐘のひびきには、暮るゝ便を待ちかたて、乾されぬ袖のその儘に、はかなかりける契かな、三年の夢は程もなく、

別るゝ現になりにけり。さて何時の世にめぐり逢ひ、かゝる思のまともやと、聲も惜しまず泣きわたる。祐成身の上をつくゞ思ふに、罪の深きぞ知られたる。幼くして父におくれ、本領だに他所に見なし、母一人の養育にて身命をのぶると雖も、ある甲斐もなし、この三年御身にだにも相馴れて、飽かぬ別の悲しさは、なげきの中のなげきなり、五徳の無常は春の花、婆娑は假の宿なり、秋の紅葉の風散りて、草葉にすがる露の身、後生弔ひてたびたまへとて、東西へ打ち別れけり。

八九 比叡山のはじまりの事

さて我が朝比叡山の始を聞くに、天地既に別ち、國いまだ定らざる時は、人壽二萬歳を保ちける。迦葉尊者は四天に出世し給ふ。大聖釋尊はその教義を受け、都卒天に住し給ふ。我れ八相成道の後、遺教流布の地いづれの處にか有るべきといふに、此の南閻浮洲をあまねく飛行して御覽じけるに、あんなく茫々たる大海の上に、一切衆生、四通佛性如來、常住無有變異、此の如く立つ波の聲あり。この波といまらん處、一つの國となりて、わが佛法を弘め、通達すべき靈地たるべしとて、遙の十萬里の滄海を凌ぎて行くに、葦の葉一つ浮びたる所に、この波流れ止りぬ。今の比叡山の麓、大宮権現の

おはします波止土濃はしどのこれなり。さればにや波止土濃なみどなりと誓けり。斯く御覽じおきて、釋尊しやくそん天に上り給ふ。されば葦原あしはらの中つ國くにと申しならはせるは、此の一葉ひとこの葦あしのゆゑとかや。日本我が朝あさは、葦の葉を漂へうするとぞ申しならはせるとぞ聞えし。その後人壽にんじゆ百歳の時、悉達しつた太子たいしと生じて八十年の春の頃、頭北面西づほくめんせいの時、跋提河ぼつたいがの波と消え給ふ。されども佛は常住じやうちゆうにして不滅ふめつなりしかば、無縁むえん法界ほふかいの妙諦めうたいをあらはし給ふなれば、葦の葉の島となりし中つ國ちゆうくにを御覽じける時、鸕鷀うし草葺くさむき不合ふあひ尊そんの御代みよなれば、佛法ほふぽふの妙事めうじを人知らず。茲こゝにさいなみや滋賀しがの浦うらのほとりに釣つりをする老翁らうおつあり。釋尊しやくそん彼に向ひ、翁おんもしこの處こゝの主ぬしたらば、この地ちを吾われにえさせよ、佛法ほふぽふ結界けつかいの地ちとなすべしと宣へば、翁答へて申さく、吾れ人壽にんじゆ六萬歳の始はじめより、此の處こゝの主ぬしとして、この湖みづうみの七度ななどまで葦原あしはらになりしをも、まさに見たりし翁なり、さればこの地ち結界けつかいとなるならば、釣つりする所ところなかるべしと深く惜しみ申せば、釋尊しやくそん力ちからなくして、今は寂光土じやくくわうどに歸かへらんとし給ふ時に、東方とうほうより淨瑠璃じやうるり世界せかいの藥師やくし如來にょらい忽然いつぜんと出て給ひて、善哉ぜんざい々々々々はやはや佛法ほふぽふを弘ひろめたまへ、吾れ人壽にんじゆ八萬歳の始はじめより、このところの主ぬしなれども、老翁らうおつ未だ我われを知らず、なんぞこの山やまを惜しみ申すべき、はや佛法ほふぽふを弘ひろめ給へ、吾もこの山の守護しゆごとして、共に五々百歳ごごひゃくさいまで佛法ほふぽふをひろむべしとて、二佛にぶつ東西とうせいに去りたまふ。その時の老翁らうおつは今の白鬚しやくすけの大明神たいめいじんにてましくける。

東方とうほうよりの如來にょらいは中堂ちゆうだうの藥師やくしにてぞましくける。釋迦しやくか藥師やくしの東西とうせいに歸り給ひき。今の十郎じゆじやうと虎こがゆき別わかるゝにはたがひぬる心こゝろなるをや。蝸牛くわぢゆうの角つるの上うへ何事なにごとをか争あふ、石火せきわの光ひかりのうちに、この身を寄せつらん、なごりの道みち盡つくべからず、後世ごせにはまわり逢あはんと言いふうちにも、道三郎だうさいじやうが心こゝろも恥はしとて、思おもひきりてぞ別わかれける。虎こは時ときに手綱たづなひかへ、祐成すけなりの後姿のちすがたの隠かくるゝまで見送りける。さてしもあらねば、泣なく泣なく大磯おほいそにぞ歸りける。母ははの許もとに入りしかば、友ともの遊君いうくんども廣縁ひろえんに出いでて、思おもひ掛けざる今の御入おんいりかな、何時いつとなき山路やまぢの寂さびしさ、推量おしはかりりてなどはぶれけれども、虎こは馬うまより下くだるゝと同じく、衣えひきかづき打ち臥ふしぬ。遊君いうくんども集ありて、何とてこれほど御歎おんなげき候まうふやらん、十郎殿じゆじやうだんに捨てられおはしますかと、襟えり々に慰なぐさめけれども、斯いかくといふべき事ことなられば、唯ただうち臥ふし泣なき居ゐたり。人々ひとびと討うたれての後にこそ、かくとは申し聞かせけれ。道三郎だうさいじやう申しけるは、殿だんも今朝けさより御出みであるべきにて候ふ、急いそぎ御暇みそまをまうさんといふ。虎こは彼かれを近く寄より寄よせて、三年みとしがほど馴なれにし汝なにさへ、別わかれなん事もやあらんと思へばとて、袖そでを顔かほにおしあて、さめぐと泣なきければ、道三郎だうさいじやう返事へんじにも及およばず涙なみだを流ながしけり。昔むかしが今いまに至いたるまで、主従しゆじゆうの縁えん縁えんからぬ事ことぞとよ、かまへて思おもひ忘わするな、二世にせまでも朽くちせぬものぞといへば、道三郎だうさいじやう暇そまをひて出いでてにけり。志こゝろは二世にせまでもつきせじとこそ覺おぼえけれ。

九〇 ぶつしやうこくの雨の事

されば縁により佛果を得る事をおもへば、昔ぶつしやうこくに血の雨降りて國土紅なり。帝大きに驚かせ給ひて、博士を召して御尋ありければ、うらかたをひき申しけるは、今宵不思議の子を生む者あり、尋ねいだして遠き島に捨てらるべしと申しければ、合衛城のうちに、その夜子生みしもの千人なり。其の中より選び出して見るに、口より焰吹き出す子を生みたる者あり、即ちこれをにんまうとぞ名づけし。これ不思議の者として、官人に仰せ付けて島に捨てけり。然るにこのにんまうは、やうやう成人するほどに、たけき鬼の姿になりけり。此の島に来る者を洩さず取りて喰ふ。また國に罪ある者をこの島に流せば、これをも取りてくらふ。七萬二千人までぞ喰ひけり。その罪盡し難し。佛これを感み給ひて、阿難尊者を使ひたてまつてり、善知識たち引導し給ひけるとかや。にんまうは阿難を七度見奉りし結縁に、七度天上に生じて佛果を得たりとなり。斯様の縁を思ふには、彼等が後世もなどや一つ蓮に生ぜざらん、たのもしくぞ覺えし。さて十郎が心の猛きこと、四方にも聞えしかども、さしあたりたる恩愛の道には迷ふ習なり。實に夏の蟲の飛びて火に入り、秋の鹿の笛に心を亂し、

身を徒になすこと、高きも卑しきも力およばぬは此の道なり。入つの苦の中にも、愛別離苦と書かれたり。内典外典にも深くいましめたまふとなり。

九一 嵯峨の釋迦作り奉りし事

さて五郎待遠なる折節來りて、この者を送りて今まで時を移しぬ、いかに遅しと不思議に思ひ給ひけん（釋迦）と仰せける。五郎承つて、昔もさる事のさうらふ、釋尊母の報恩のために忉利天に上りたまふ。帝釋聞き給ひて、毗首羯磨といふ天人を下し給ふ。優填王よろこびて梅檀にて如來を作り奉り、いづれを寫したる姿とも見えすぞ作りける。優填王悦のあまりに、毗首羯磨を止められければ、吾はこれ善法の胎宮なり、留るべからずとて、遂に天に上りぬ。其の像を玄奘三藏盗み取りてこの國に渡し、おほくの衆生を濟度し給ふ、今の嵯峨の釋迦これなり。ましてや人間として、いかでか恩愛を思はざるべき。十郎聞きて大きに違ふ心かな、優填王は利益方便の戀なれば、愚癡凡夫輪廻の軌著なり、一つたあらしと笑ひて、おのゝ富士野の出立をぞいそぎける。

九二 千草の花見し事

それ迷のまへの是非は、是非ともに非なり。夢のうちの有無は、有無ともに無なり。されば我等が身のありさま、在ればあるが間なり。夢の憂き世に、なにをか現と定むべき。されば刹那の樂花にも、心なぶる理をおもへば、無爲の快樂におなじ。いざや最期の眺して、しばし思をなぐさまんとて、兄弟ともに庭におりて、植ゑ置きし千草のさかえたるを、見るにもなごりぞ惜しかりける。心のあらば草も木も、如何てかあはれを知らざるべきと、彼方此方にやすらひけり。これによそへて古き歌を見るに、

ふるさとの花のものいふ世なりせばいかに昔のことを問はまし

今更おもひ出でられて、情をのこし哀をかけずといふ事なし。五郎聞きて、草木心なしとは申すべからず、釋迦如來涅槃に入らせたまひし時は、心なき植木の枝葉に至たるまでも、なげきの色を現しけり、我等が別をなしみ候ふやらん、いかでか知りさうらふべきとて、草をわけしれば、卯の花のつぼみたるが、一房落ちたりけり。十郎これを取りあげて、いかに見たまへ五郎殿、老少不定のならひ、

今に始めぬ事なれども、老いたる母はとゞまり、若き我等が先立ちまうさんこと、これに等しきものを、ひらきたるは留り、つぼみたるは散りたるや、名にし負ふ忘草ならば、餘波をおもひてや散りつらん、それはむかし住吉に、諸神影向なりける事あり。御歸をとゞめ奉らんとて、この花を植ゑて忘草と名づけ給ひけるなり。歌にも、

もみぢては花咲く色をわすれ草ひとあきながらふたまちの頃

その忘草は、紫苑とこそ聞きてさうらへとて、なほ波に分け入りければ、深見草のさかりと咲きたるを見て、卯の花はつぼみてだにも散るに、此の花の思ふ事なげに盛なるや、いかに咲くとも二十日草、さかりも日敷のあるなれば、花の命もかぎりあり、あはれ身にしる心哉と、涙ぐみければ、五郎聞きて、此の草のことは、花ひらき落ちて、千日おなじく、一生の人証すがごとしと見えたり。これは樂府のことばなり。また歌にも、

名ばかりは咲かても色のふかみ草花咲くならばいかで見えまし

とくちずさみければ、十郎聞きて、この歌はいまだ咲かざる時も、色深き草とこそ詠みたれ、盛の花には心やたがふべからんと戯れけるにも、あはれを殘さぬ言の葉はなかりけり。無慙なりし志どもな

り。さても我等が思ひ立つこと、母に露程も知らせたてまつるべきか、はからひ候へと言ひければ、時致聞いて、思ひもよらぬ御事なり、これほど思ひ定めざるきは知らず、今はいかでか事變じ候ふべき、そのうへ人の子が、謀叛おこして出でさふらはんに、その親聞きて、いそぎ死にても思はせよとて、喜ぶ母や候ふべき、某はたゞ御形見をたまはつて、最期まで身に添へ、こなたよりもまた参らせて、まかり出でんとこそ存じ候へ。十郎聞きて、まことに此の儀しかるべし、さらばそのついでに、御分が勘當をも申しゆるして見んとて、母の方へぞ出でたりける。

九三 小袖乞の事

十郎御前にかしこまり、風笏にとり申しけるは、奉公を致し御恩蒙るべき身にては候はねども、末代のものがたりに、富士野の御狩の御供に思ひ立ちてさうらふ、恐れ入りたる申し事にて候へども、御小袖一つ貸したまはり候へと申しければ、母聞きて、君臣をつかふに禮をもつてし、臣君につかふるに忠をもつてすと、論語の中に候ふぞや、何の忠によつてか御感もあるべき、御恩なくば無益なり、あはれ此のたびの御供思ひ止り給へかし、それを如何にといふに、伊東殿の父、奥野のかりばより病

づきて歸り、幾程なくて死にたまひぬ、御分の父河津殿、狩場にて討たれ給ひぬ、斯ることどもを思ひつゞくるに、狩場ほど憂きところなし、しかも謀叛の者のすゑ、上にも御許なきぞかし、又馬鞍見苦しくて物を見れば、却つて人に見らるゝものを、思ひとまりて、親しき人々の方にてなぐさみ給へ、かやうに申せば小袖惜しむに似たり、善くはなけれども、教柄おもしろければとて、秋の野に、草盡繼うたる練貫の小袖一つ、取り出して賜ひにけり。十郎畏つて、障子のうちにて著替へ、我が小袖をばうち置きて出でぬ。亡き後の形見にとぞ思ひ置きたりける。五郎は不興の身にて、兄が方にむなしく泣き居たり。よくく物を案ずるに、母の不興を許されずして、死なん事こそ無念なれ、推參して見ばや、生きたるほどこそ仰せらるゝとも、死してのち悔み給はんこと疑なし、思ひ切り申して見んとて、母の方へは出でたれども、退に内へは入りえず、廣縁にかしこまり、障子を隔て、そも誰が御子にて候はん、時致にも召替の御小袖一つ賜りて、狩場の晴に著さうらはん。母聞きて、誰や、來りて小袖一つといふべき子こそ持たれ、十郎はたゞいま取りて出でぬ、京の小次郎は奉公のものなり、二宮の女房は、又斯様にいふべからず、禪師法師とて乳のうちより捨てし子は、叔父養育して越後にあり、また箱王とて悪者の有りしは、勘當してゆくへ知らず、是は只、武藏・相模の若殿原

の貧なる妾をわらはんとて、斯く宜ふとおぼえたり、しかも留守居のてい見苦し、早や門の外へ出で候へと、ことの外にぞ宜ひける。時致思ひ切りたる事なれば、その箱玉が参りてさうらふ。それは誰がゆるし置きたるぞ、女親とていやしみ候ふか、さやうには候ふまじ、とてもかやうに侮らるゝ身、七代まで不興するぞ、對面思ひも寄らずとぞいはれける。五郎は許さるゝことはかなはずして、結句後の世までと、ふかく勘當せられて、前後を失ひ、思にばうじ果てゝぞぬたりける。稍ありて小聲になりて申しけるは、斯様の身にまかりなりて、かされて申し上ぐべき事、上までは恐にて候へば、女房達心ある人あらば聞し召せ、人の親のならひ、盗する子にはくからで、縛つくる者をうらむるは、常のおやの習にて候ふぞや。母聞きて、さやうならん者を和殿が母にして、妾がやうなる者をば親とな思ひそとよ、人の言葉をおもくせず、言葉返すはよき子かとよ。おんことばを重くして、御返事を申さじとてこそ、御前の人々には申しさうらへ。左様に申すは、かへりしにては無きか、一念の眞意には、具底劫の善根をたき、刹那のなんがいに、無量億劫の苦報を招く、聞けば愈腹ぞ立つ、その座敷立ちてとのたまふ。恐れながら普門品をばあそばし候はずや。如何なる觀音の誓にも、掟をそむく者をゆるし候へとは脱きたまはぬぞとよ。

九四 しやうめつ婆羅門の事

おそれながら、事ながく候へども聞し召され候へ、昔天然に、しやうめつ婆羅門といふ人あり。もの命を千日に千殺して、悪王にむまれんといふ願をおこし、はや九百九十九日に、九百九十九人の生物を殺し、今千日に満ずる日、四山にのぼりて見れどもなし。曲江にくだり船に乗り、海中に出て、比翼の龜を一つ捕りて害せんとす。母これを悲しみて、濱にいでて見れば、波風高くして、雲霞電おびたゞしき其の中に、婆羅門龜を害せんとす。母これを見て、その龜はなせ、汝が父の命日ぞ。婆羅門聞きて、忌日ならば沙門をこそ供養せめといひて、おさへて殺さんとす。龜涙をながして、我れ八十年後、かふたちこく大慈大悲に畢生安樂國とぞ泣きける。母これを聞き、汝龜のことば聞き知りや、知らずと答ふ。龜は罪ふかきものにて、萬劫の罪障を經つくし成佛すべきに、今劍にしたがはど、また多劫を經かへすことの悲しさよとなり、願はくは其の龜を放して、みづからを殺し候へといふ。まことに龜の命にかはり給ふべきにやと言ひもはてず、龜を海上に投げ入れ、即ち劍を抜きて母にむかふ時、天神地神もこれを捨て給へば、大地さけわれて奈落に沈む。母を殺さんとする子の命

を悲しみて、心ならずにも走りむかひて、婆羅門がもとゞりを取り給へば、即ち頭髮抜けて母の手に
 とまり、その身は無限にしづみけり。されども龜を放せし功力によつて佛果を得、法花經の普門品に、
 婆羅門神と説かれたり。かやうの子をだにも、親はあはれむ習にて候ふものを。母聞きて、や殿それ
 も、母がいふことを聞きて、龜をはなちてこそ成佛はしたまへ、汝なにとて妾がをしへを聞かざるぞ。
 わるき子を思ふこそ、まことの親の御慈悲にては候へ、又母の憐のふかきには、事ながく候へども、
 或る國の王一人の太子の無きことを歎き、天にいのりし感應にや、后懷妊したまふ。國王のよるこび
 斜ならず。されども三年まで生れたまはず。公卿詮議ありて、博士を召してたづね給ふ。勘文に曰く、
 御位は轉輪聖王たるべし、但し御産はたひらかなるまじと申す。后聞き給ひて、賢王の太子、いかで
 かむなしくすべき、自らが腹を裂きやぶりて王子を恙なく、取り出すべしと宣ふ。大王おほきに御歎
 あつて許したまはず。后さらば干死にせんとて、食事をとめ給ひしかば、力なく、大臣に仰せつけ
 て、御腹を裂かれにけり。其のなかばに后仰せられけるは、太子の誕生いかにと問はせ給ふ。御恙な
 しとまうせば、喜びたまふ色見えて、うち笑みたるまゝ、御年十九にてはかなくなりたまひぬ。さて
 この太子、御位に即きたまひしが、母の御志を悲しみ、御菩提のため三年胎内にて苦しめたまつり

し日數千日にあてし、千間に御堂を建て給ひけり。今のしかん寺これなり。日本には西の寺なり。さ
 ればにや后すなはち成佛し給ふときに、こんれんだいなをかたぶけ來迎し給ふ。その紫紺になぞらへて、
 藤を多く植ゑられたり。さてこそ藤の名所には入りたりけれ。母親の慈悲はかやうに候ひしなり。母
 聞きて、老いたる自ら、あはぬ教のむづかしくて、腹をも裂きて死にうせよとな、汝も母と見ず、妾
 も子とも思はぬぞとて、障子あらゝかにたて給ふ。時致は此の度許し給はずしては、永劫を經るとも
 かなふまじければ、五郎うちふてい。

九五 斑足王の事

仁王經の文をば御覽じさうらはずや、むかし天竺に、帝一人ましますに、太子おはしき。名をば斑
 足王と申す。外道等他の教訓につきて、一千人の王の首を取り、塚の神に祭り、その位を奪ひ、大王
 にならんとて、數萬の力士を集めて、東西南北、遠國近國の王城に、押し寄せく搦め捕り、既に九
 百九十九人の王をとり、今一人足らで如何はせんといふ。或る外道教へて曰く、これより北へ一萬里
 行きて王あり、名をばふみやう王といふ、是をとりて一千人に足すべしといふ。やがて力士を差し遣

し、彼の王をとりぬ。今は千人に満ちぬれば、一度に首を斬らんとす。技にふみやう王合掌して曰く、願はくは我に一日の暇をえさせよ、故郷に歸り三寶を請じ頂戴し、沙門を供養して、園路のたよりにせんといふ。易き間のこととて、一日の暇をとらす。その時王宮に歸り、百人の僧を請じて、過去七佛の法より、般若波羅蜜を講讀せしかば、その第一の僧、ふみやう王のために偈を説く。こうせうしうこつ、けんこんとうねん、しゆみこかい、といけやうと述べたまふ。ふみやう王この文を聞きて、四六十二因縁を得たり。法華むくうを悟る。さればにや斑足王、諸法皆空の道理を聽聞して、たちまちに悪心を翻して、取り籠むる千人の王に曰く、面々の科にあらず、我れ外道に勧められ、悪心をおこす、不思議のいたりなり、今は助け奉るべし、いそぎ本國に歸り、般若を修行して、佛道をなしたまへ、即ち道心おこして、無上ほうにんを得たりと見えたり。是もふみやう王を許してこそ、俱に佛果を得給ひしなり。母聞きて、その如く佛果を請じて、多くの人を助くべき、汝などや法師になりて妾をば救はぬぞ、まことや重きに從つて、道違ければ、休むこと地を選まずして仕へよとこそ、古き言葉にも見えたれ、何とて妾がいふことを聞かざるぞ。五郎も思ひきりたる事なれば、おなほり畏つて、たり御慈悲には御許し候へとのみぞ申し居たりける。十郎は我が所にて、五郎を待てども見えざりけ

り。餘りにおそければ、又母の方へ行き見て見たれば、五郎内までは入り得ず、廣縁に泣きしをれて居たり。あまりに無慚におぼえて、障子を引き明け畏つて、五郎が理をつくくくと聞き居たり。やゝありて、某兄弟あまた候へども、身の貧なるによつて、處々の住居つかまつる、只あの者一人こそ連れ添ひては候へ、祐成を不便に思し召され候はゞ、御慈悲をもつて御救し候へかし、御子とても御身に添ふもの、我等二人ならでは候はぬぞかし。母聞きて、心にあふ時は、吳越もらんでいたり、合はざるときは、骨肉も敵たうたり、智者の敵とはなるとも、愚者の伴とはなるべからず、位の高からぬをば歎かざれ、智慧の深からぬをば歎くべしとは、漢書の辭ならずや。十郎承りて、それはさる事にては候へども、觀經の文を見るに、諸佛念衆生、衆生不念佛、父母常念子、子不念父母と説かれて候ふ、この文を釋すれば、佛は衆生を思し召さるれども、衆生佛を思ひ奉らぬとこそ見えて候へ、親として子を思はぬは無きものをや。母聞きて、汝等は親のよきをまうし集むるかや、いて又自ら子の孝行なることをいひて聞かせん、孟宗は雪の中に筆を得、王祥は氷の上に魚を得、くわけんは眼を抜き、かんしやうは耳を焼き、ちそくは足をきる、せんめんは舌を抜き、くわそくははをほどし、くわうふめいは身をあたゝめ、なしき子を殺す、これ皆孝行のためならずや、扁鵲もしんやくをしゃうせざる病

をば治せず、けんしやう王も善言の聞かざる君をばもちぬすとこそまうせ、人の詞を聴かざる者、な
 の用にかたつべき、そのうへ不孝の者をば、おなじ道をも行くべからず、急ぎ出でよとぞいひける。
 祐成重ねてまうしけるは、一旦の御心をそむき法師にならざるは、不孝には似てさうらへども、父母
 の志の深きことは法師によるべからず、僧俗のかたちにもよらず、時致箱根に候ひし時、法華經一部
 讀みおぼえ、父の御爲に、はや二百六十部讀誦す、毎日六萬遍の念佛怠らずして、父に回向まうすと
 承り候へば、大地をいたゞき給ふ堅牢地神も、地の重き事はさうらふまじ、不孝の者の踏む跡、骨髓
 に徹りて悲しみたまふなり、ひとつは彼の御跡をもとぶらひ、ひとつは御慈悲をもつて祐成に御宥し
 候へかし、父に幼少よりおくれ、親しき者は、身貧にさうらへば目も懸けず、母ならずして誰か憐み
 たまふべきに、かやうに御心強くましますれば、立ち寄る陰もなきまゝに、乞食とならむこと不便にお
 ぼえ候ふぞや、あはれげに今を限と申すならば、いかゞ安かるべきに、まうすべき事ならねば、忍の
 涙に目もくれて、しばしはものをも言はざりけり。なほも宥すとのたまはれば、十郎怒りて見ばやと
 思ひて、持ちたる扇さつと開き、おほきに目を見いだし、とてもかくても生甲斐なき冠者、ありても
 なにか益あらん、御前に召し出し、細首打ち落して見參に入れんと、大聲を出して座敷を立つ。女房

達驚き、いかにやとて取りつく袖にひかれて、板敷荒く踏みならし怒りければ、母も驚きすがりつき、
 ものに狂ふかや殿、身貧にして思ふこと叶はればとて、現在の弟の首を斬る事やある、それほどまで
 は思はぬぞ、しばしや殿とて取りつきたまふ。事こそよけれと思ひければ、助けさうらはん御宥し候
 へといふ。母、さらば宥す留り候へとのたまへば、その時十郎怒を留めて、聲をやはらかにし座敷に
 なほり、畏り居たりけり。されども忍の涙のすゝみければ、とかく物をばいはざりけり。五郎も恨の
 涙をひきかへて、うれしきの忍の涙しきりにして、前後を更にわきまへず。たゞ慎しんでぞ居たりけ
 る。

九六 母の勘當ゆるさるゝ事

やゝありて十郎座敷を立ち、おんゆるしあるぞ時致、こなたへ參りさうらへ。五郎は、しなるゝ袖
 に忍びかれ、しばしは出でこそかねたりけれ。暫ありて時致、袖うち拂ひ顔おしのごひ出でければ、
 十郎も嬉しくあはれにて、うち傾き居たり。兄弟共に物をも言はず、只さめんと泣き居たり。母は
 此のありさまを見て、げにや親子のなかほど哀なることなし、年老い身貧にして、人数ならぬ妾が飼

ひとつを重くして、泣きしなる、無慚さよ、一かたはなる子をだにも、親は悲しむ習ぞかし、いかでか憎かるべき、たゞ善かれと思ふゆゑなりと言ひもわかつて、母も涙をながしけり。その後兄弟の者ども畏り居たるを、母つくづくとまぼり、いつしかの心地して、汝みづからを恨にや思ひけん、十郎がある處を見るに、五郎ありといふ時は心やすし、無しと聞けば心もとなくて、妾も立ちて見るぞとよ、この三年が程うち添はで、怨めしくくやしく思はれて、つくづくと見るに、直垂の衣紋、袴のききは、烏帽子のさしきに至るまで、父の思ひいでられ、昔に袖ぞしなれける。さても五郎は箱根にても聞きつらん、十郎は如何にして經文をば知りけるぞや。祐成承り、馬瘠せては毛長く、嘶ふるに力なし、人貧にして智みじかく、言葉いやし、何によつてかたふとくも候ふべき。女房達聞きて、勸學院の雀とかや巾しければ、母うち笑みて、それ／＼酒飲ませよとありければ、種々の肴盃取り添へて、二人の前にぞ置きたりける。母取り寄せ飲み給ひて、その盃を十郎飲む。其の盃を五郎三度ほして置きければ、其の盃母取り上げて、三年不興の事、只今宥したる印に、この盃思ひどりにせん、但し親と師匠に盃さすは、必ず肴の添ふなるぞ、當時鎌倉にては、秋父の六郎が今様、梶原源太が横笛と聞く、されども他人なれば、見もし聞きもせらればこそ、和殿箱根に在りしとき、舞の上手と聞きしなり、

忘れずば舞ひ候へかし。十郎腰より横笛取り出し、平調に音とり、いかに／＼廻しと責めければ、しげし辭退におよびけるを、十郎はやし立て、待ちければ、五郎扇開らき、かうこそ誦ひて舞うたりけれ。

君が世は千代にひとたびぬる塵の白雲かゝる山となるまで

とおしかへし／＼、三遍踏みてぞ舞うたりける。そのまゝ調子をふみかへて、

わかれのことさら悲しきは親のわかれと子の歎

夫婦のおもひと兄弟といづれをわきて思ふべき

袖にあまれる忍音をかへしてとどむる關もがな

と二遍せめにぞ踏みたりける。母は昔を思ひ出づれば、彼等はさてもうき命ちかきかぎりの涙の露、思はぬよそめにとりなして、袖のかへしにまぎらかし、暫し舞うてぞ入りたりける。斯くて酒も過ぎければ、十郎畏つて、今度御狩にまかりいで、兄弟が中に如何なる高名をもつかまつり、おもはずの御恩にも預り候はし、卒塔婆の一本をも心やすきさみ、父聖靈にそなへ奉らばやと存じ候ふ。母聞きて、などやらんこの度の御狩の御供、心もとなくおぼゆるぞや、よきほどにも候はし、思ひ留りた

まへかし、さりながら衣裳いしやうののぞみもあれば、小袖こそでかしむに似たり、それく女房達にようだちのたまへば、白き唐綾からあやに、鶴つるの丸まるところく縫ぬひたる、小袖ひとつ取り出し、十郎にも取らせぬぞ、失はずして返し候へ、十郎は常に小袖を借りてかへさず、これは會我殿わがとら見知りたる小袖なり、二たびとも見えずば、また例の子供こどもに取らせたりと思はれんも恥かし、小袖をしたためて置くべし、かまへて疾く歸りたまへとありければ、承り候ふとて、練貫ねりぬきの著損せきぞんじたるに脱ぎかへ、見苦しく候へども、人たび候へとてぞ置きにける。小袖の欲しきにはあらねども、たがひの形見かたみのかへ衣え、袖そでなつかしく打ち置きけり。さても兄弟は座敷ざしきを立ちければ、母見おくりのたまひけるは、過ぎにしころ十郎小袖を借り二たびとも見せず、如何なる遊びものにも取らせぬるよと思ひしに、さはなくして、弟の五郎に著せけるかや、又近き頭大口直垂おほくちたなれ仕立て、取らせしを、これも二度とも見せざりしが、道三郎みちざうにきせたりと思へば、これをも弟に著せけるぞや、まことに兄弟をば、野の末山の奥おくにも持つべかりけるものをや、父には幼くしておくれ、一人ある母には不興ふきようせられ、貧なれば親おやしきにも疎とくなり、あるかなきかの世になし者、誰たれやの人かあはれむべきとて、涙をはらくと流したまひければ、その座ざにありし女房達にようだち、ともに袖をぞ濡らしける。さて兄弟の人々は、我方わがた様に歸り、小袖を中に置き、うれし

くも推参すゐさんしつるものかな、只今宵いまよされずしては、多生劫たじやくごを經るともかなふまじ、生きてふたび歸るべきやうに、小袖返せと仰せられつるこそおろかなれ、何しに返せとは言ひつらん、神ならぬ身の悲しさよと、後悔こうくわいしたまはんこと、今のやうに覺えたりとて、打ち傾かたきてぞ泣きぬたる。我等われら世にありて、心のままに親の孝養けうやうをもいたさば、これほどまで思はぬ事もありぬべし、此の三年こそ不興ふきようの身にては候へ、それさへ戀こゝろしくおもひ牽りし折は、或る時は物ものごしにも見たてまつりて慰なぐさみしに、たゞいま御宿おのりしをかうぶり、一日だにもなくして出でんことこそ悲かなしけれ、死に給へる父を思ひて、孝養けうやうせんとすれば、生き給へる母に物を思はせてまつる、されば我等われら程親おやに縁ゆかりなき者はなし、後の世まで盡つきせぬものは、ただ手跡しゆせきに過ぎたるかたみはなし、今や我等われら一筆ひととでづつ忘形見わすれがたみをのこさんとて、墨すみすりながしかくばかり、

今日けふいでてめぐり逢はずば小車こくるまのこのわのうちになしと知れ君
 祐成すけなり生年二十二、後の世のかたみとぞ書きける。

ちいぶ山やまおろす嵐あらしの烈はげしさにえだ散りはては、如何にせん
 五郎ごろう致生年廿歳、親は一世の契せきとはまうせども、からなず淨土じやうどにてはまゐり逢ふべしとこそ書きた

りけれ。おのくはこに入れて、我等討たれぬと聞きたまはば、このところに轉び入りて、伏ししづみ給ふべし、いざやこしらへせんとて、疊敷なほし、めんらうの塵うち拂ひ、まづ見給ふやうにとて、さしいりの障子の障子にぞ置きたりけり。むなしき人をば常の所よりは出さず、われら死人に同じとて、厩のあきまより出でたりけり。最後の文にこそ斯様のことまで書きにけれ。斯くて出でけるが、いざや今一たび母を見奉らんとて、暇乞にぞ出でたりける。母宜ひけるは、かまへて人と誣したまふな、世にある人は貧なる者をば、をこがましく思ひ侮るべし、さやうなりとも咎むべからず、三浦土肥の人々は、さやうにはあらじ、その人々に交り睦びたまへ、心のはやるまゝに、人のあひつけたる鹿を射たまふべからず、公方の御許もなきに、弓矢持たずとも出でたまふべし、謀叛の者のすゑとて、咎めらるゝこともや有らん、如何にも事過したまふな、年頃憎まれずしてやうせられたる會我殿に、大事かけて恨かけ給ふなど、こまなくとぞ教へける。五郎は聞きても色に出さず、十郎は斯様のをしへも今をかぎりと思ひ、心の色も現れて涙ぐみければ、いそぎ座敷を立ちにけり。五郎もなごりに涙をおさへかれ、他所目にもてなし立ちけるが、妻戸のしきぬに蹴つまづき、うつぶしにこそ倒れけれ。されども人目に漏らさじとて、色ある小鳥の、東より西の梢傳ひしを目につけ、思はずの不覺なりと

てうち笑ひける。母これを見たまひて、今日の道思ひとどまり候へ、門出あしとありければ、五郎立ちかへり、馬に乗る者は墜ち道行く者は倒る、皆人ごとのならひぞかし、さればとて留り候はんには、道行く者も候はじと、うち連れてこそ出でにけれ。五郎はなほ母のなごりを慕ひつゝ、今一たびと思ひけん、扇の見苦しく候ふとて歸りにければ、母これをば夢にも知らずして、をりふし扇こそなけれどもとてたびにけり。時致これも形見のかずとおもひ、母の賜りけるよと思へば、扇さへ懐かしくて、ひらきて見れば、霞に雁をぞ書きたりける。折にふれなば夏山の、しげる梢の松の風、五月雨雲のはれまより、遠里小野の里つゞき、われ等が道の行末も、あらはるべきに、さはあらで、その色違ふもことわりなり。憂き身の上と案ずれば、古き歌を思ひつゞけて、

おなじくは空にかすみおなじくは空にかすみの關もりて關もりて雲路の雁をしばしとどめん雲路の雁をしばしとどめん

これは偽世の卿の詠みし歌ぞかし。我等限のみちをなげども、誰ありてとどむる者もなきに、扇心のあるやらん、しばしといふことのはのありけるかな。さても十郎が供には道三郎なり。五郎が供には鬼王たにわらうそのほか四五人召し具して、打ち出でける有様、母は女房達ひきつれ、廣縁に立ち出で見送り、さまなくにぞのたまひける。直垂のきやう、行際ゆかばたのひきあはせ、馬ののりすがた、手綱の取り様、十

郎は父に似たれども、器量きりやうははるかの劣せつりなり。五郎は烏帽子あしほしのさしき、矢の負おひやう、弓のもちやうに至るまで、穩おたかなるてい、父にはすこし似たれども、これも逢あひかたの山寺やまでらにて育そだちたれども、色黒くげすしく見ゆる。十郎は里に住みしかども、色白く尋常じんじやうなり。我が子と思ふ故ゆゑにや、何れも清きよげなる者共かな、如何なる大將軍たいしやうじんといふとも恥はしからじ、あはれ世にあらば誰たれにか劣るべき、同じくは彼等かれらを、父諸共に見るならば、如何に嬉うれしくありなんと、さめんとこそ泣なきたまふ。女房達にようだちを見ても、ものへの御門出ごもんいでに、御涙ごなみいまはしとまうしければ、誠に彼等かれらが登のぼるいでたち、すゞるなる事ども思おもひ連れられて、袖のみ昔にぬれ候ふぞや、げに千秋萬歳せんしゅうばんざいと、さかふべき子供の門出かどいでなり、うれしくも言いひ出したまふものかな、このたび御狩みかりより歸かへりなば、上の御免ごめんかうぶり、本領ほんりやうことごとく安堵あんぶして、思おものまゝなるかへるさを待つべきとこそ、いそぎ中にぞ入り給ふ。後に思おもひあはすれば、これぞ最後さいごのわかれなりと、今こそ思おもひ知られけれ。あはれなりし次第しだいなり。

九七 李將軍が事

さても鎌倉殿は、相澤あひざはが原はらに御座ござのよし聞えしかば、この人々も胸むねに鞭むちを添そへて急いそぎける。道にて

十郎いひけるは、名殘なごり惜おしかりつる故郷こきやうも、ひとすぢに思おもひきりぬれば、心のひきかへて先へのみ急いそがれ候ふぞや。時致ときぢ聞きて、さん候ふ、思ふほどは現うつら、過あやぐれば夢ゆめにて候ふ、心のまゝに本意ほんいを遂とげ、浮世うきよを夢になし果て、はやく淨土じやうどに生なれつゝ、戀こしき父、なごり惜おしかりつる母、かくまうす我等われらまで、ひとつはちすの縁えんとならんとて、ひつかけくうつて行く。稍やありて十郎申しけるは、我等われらがありさまを物にたとふれば、命命めいめい鳥とりに似たり。それを如何いかにといふに、大唐たいたうしくう山さんに雪ゆきふかうして、春秋はるあきをわかざる山あり、その山に頭かしらは二つ胴どう一つある鳥あり。彼の山には青き草なければ、食くふべきいのなし。さればその左の頭、たましく餌食めしめを求め服ふくせんとすれば、右の頭ちうにて、取り奪うばうて食くふ。或る時、思おもひけるは、所詮しよせん毒どくの蟲むしを求め、右の頭を退治たいぢせんとおもひ、毒の蟲むしを求め、いつものごとく服ふくせんとす。かの頭また奪うばうて食くふ。されば胴どう一つにてありぬれば、身もいかでたまるべき、つひに空からしくなる。其の鳥も明暮あきくれに、右は左をとらん、左は右をとらんとせしぞかし、我等われらも敵かたの手にかゝらん、敵かたをや手にかげんと、思おもふ愛あいき身のながらへて、いつまでもものを思おもはまし、此の度はさりとともまうしければ、五郎聞きて、よわき御臂ごひでをおほせ候ふものかな、何によりてか空からしく敵かたの手にかゝり候ふべき、本意ほんいをとげて後は知り候はず、それは兎も角もさうらひなん、事ながくは候へ

ども、むかし大國に李將軍とて、猛く勇める武勇の達者あり。一人の子のなきこと天に祈る憐みにや、妻女懐妊す。將軍喜ぶところに、女房いふやう、生きたる虎の肝こそねがひなれ。將軍易きこととて、多くの兵を引き連れ、野邊にいで、虎を狩りけるに、かへつて將軍虎に喰はれて亡せにき。乗りたりけるうんしやうれうといふ馬、鞍の上むなくして歸りぬ。女房怪しみて、將軍虎に喰はれるやと問へば、れう涙をながし膝ををり泣けどもかなはず。我が胎内の子は、父を害する敵なり、うまれ落ちなば、捨てんと目敷を待つところに、月目に關守無ければ、程なく生れぬ。見れば男子なり。いつしか捨つべき事を忘れ、取り上げ、名をかうりよくと付けてもてなしけり。名將軍の子なれば、胎内より、父虎に喰はれけるを安からずおもひ、敵とるべき事をぞ思ひける。光陰矢の如し、かうりよくはや七歳にぞなりにける。ある時、父軍代の刀をさし、角のつきたる弓に、神通の鎗矢を取り添へ、厩に下り、父乗りて死にける、うんしやうれうに向つて曰く、汝馬の中の將軍なり、しかるに、父の敵に志ぶかし、父の取られける野邊に、吾を具足せよといふに、馬黄なる涙をながして膝を折り、高聲にいばえけり。かうりよく大いに悦びて、かうれうに乗り、馬に任せて行くほどに、千里の野邊に川で、七日七夜ぞ尋ねける。八日の夜半におよびて、或る谷間に、獸多くあつまり居たる其の中に、

隊長一丈餘なる虎の、兩眼は日月かならべたる様にて、紅の舌を振りて臥しければ、肝魂を失ふべきに、さる將軍の子なりければ、これこそ父の敵よと、矢取つてさし番ひ、よつびいて放つ。あやまたず虎の左の眼に射立てたり。少し弱ると見えければ、かうりよく馬より飛んで下り、腰の刀を抜き、虎を斬らんと見ければ、虎にては無くして、年經たる石の、苔むしたるにてぞありける。斯様の志にて、遂に敵を討つ。今の世の石竹といふ草、かうりよくが射ける矢なりとぞ、まうし傳へたる。されば弓取の子は、七歳になれば、親のかたきを討つとは、このこゝろなり。志により、石にも矢の立ち候ふぞや、歌にも此のこゝろを詠みけるにや、

虎と見て射る矢の石にたつものをなどわが戀のとほらざるべき

十郎聞きて、や殿、歌物語こゝろえず、祐成いかなる鬼神なりとも、廻さじとこそおもふぞとよ、など我が敵討たであるべきと語れかし、げにや折による歌ものがたり、悪しくまうすと覺ゆるなり、歌はともあれかくもあれ、此の度は敵討たんこと易かるべし、老少不定の習なれば、我等が空しくなり、敵にさきだたば、惡靈ともなりて、取るべきものをやと戯れつゝ、馬に鞭を打ちてぞ急ぎける。

九八 三井寺の智興大師の事

十郎は、足柄を越えて行かんといふ。五郎は、箱根を越えんといふ。いはれあり。この三四年別當の呼びたまへども、男になりける面目なきに、見參に入らず、ついでに打ち寄りて、御目にかゝるべし、最期の暇をも申さんとて参りたりと思し召さば、聖經の一卷も、陀羅尼の一遍なりとも、弔ひたまふべき詳知識なり、そのうへ、師の恩を重くすれば、法にあづかるためしあり。近き頃の、ことにや。園城寺に智興大師とて、めでたき上人わたらせ給ひけり。驗密有驗の高僧と聞えけれども、いまだ肉身を離れたまはざりける故に、重病に冒されて、苦痛惱亂わきまへがたし。すなはち晴明をよびて占はせけるに、定業かぎりにて助りたまふべからず、ただし多き御弟子のうち、報恩を重くし命を輕くして、師の御命に代るべき人ましまさば、まつりかへんと申す。上人は苦痛のまゝに、誰とはのたまはれども、御目を上げて、御弟子を見廻したまふ。並び居たまふ御弟子、二百餘人あれども、我れ代らんと仰せらるゝ方一人も無し。目をたがひに見合せ、赤面したまふ色あらはれにけり。うたてかりし御事なり。こゝに證空阿闍梨とまうして、十八に成り給ふが、末座より進み出で、我れ報恩の

あはれみ盡しがたし、なにとして報じたてまつるべき、我等が命なりとも、かはり奉る身なりせば、悦の上の悦、何事かこれに如かんや、はやくとて、墨染の袖をかき合せたまひて、晴明がまへに跪きたまふ。上人きこしめし、惱める御毗に御涙をうかべさせ給ひて、御顔を振り上げ、本尊の御方を御覽じけるは、證の命を御借しみありて、御身は如何にもとおぼしめさるゝ御容顔あらはれたり。これまた御慈悲の御志とぞ見えける。證空かされて申されけるは、深く思ひさだめて候ふ、變ずべきにも候はず、其の上上人の苦惱を見たてまつるに、刹那のひまも惜しくこそ候へ、御心に任すべきにあらず、いそぎ法會を行ひ、祀を急がれ候へ、但し八旬にあまる母をもちて候ふ、今ひとたび今生のすがたを見え候ひてかへり参るべし、暫し待ちたまふべしとて、暇請うてぞ出でたまふ。證空阿闍梨を、あはれと言はぬ者はなし。その後母の許に行き、此の事委しく語りたまふ。母聞きも果てず、證空の袖に取り付き、思ひも寄らず、師匠の御恩ばかりにて、母があはれみをば捨てたまふべきか、御身を残し、自ら先立ちてこそ順次なるべけれ、思ひもよらぬためしとて、證空の膝にたふれかゝり、涙に咽ぶばかりなり。證空は母の心をともしづめて、よく聞くし召せ、師匠の御恩徳には、何をか譬へてまうすべき、はかなきおほせとも覺えて候へ。はかなき母が生みおきてこそ、たふとき師匠の

恩徳をもちかうぶり給へ、母の恩大海よりも深しとは、誰やの人か言ひそめける、親は一世師は三世、浅きあはれみなり、知らせ給ふらん、何とて情はましまさぬぞ。今日の命を知らぬ身の、恥をば誰かかくすべき、かなふまじとて取りつきたり。聞き給はずや、淨飯大王の御子悉多太子は、一人おはします父大王を振り捨て、阿羅々仙人に宮仕したまひしぞかし。それは生きての御別、これは死すべきわかれなり、たとへにもなるべからず。御詞の重きとて、只今かくれたまふ師匠をや、殺したてまつるべき。實にみづからものならずば、暇を乞ひても何かせん、七生まで不興するぞと言はれつゝ、うち轉じたまひけり。斯くて虚空進退、いに谷り、師匠の恩徳を報じ奉らんとすれば、母の不興永劫にも通れがたし、身のおきどころ無かりければ、母の御前にひざまづき不興の仰かなしみでも餘あり、奈落の實いつをか期せん、此の世は假の宿なり、未來こそまことの住所にて候へ、師匠の命に代り奉らば、御迎にもまゐるべし、さあらば一つ蓮の縁にも、などかはならで候ふべき、おぼしめしきり候へとて、名残の袂をひきわくる。母はなほ慕ひかれ、さらばみづからをも連れて、ひとつはちすの縁になし給へや、捨てられて、老の身の何となすべきと、ただ悲しみたまふ。阿闍梨は母をなだめかれ、かやうならんと思ひなば、中々申し出すまじかりつるものを、又は母に暇申さずとも、思ひ定む

べかりつることを、心弱くて斯様に愛き目を見ることよ、惜しみたまふも道理なり、只一人ある子なり、月とも星とも我をならでは頼み給はぬ御事なり、一日片時も見奉らぬだに心もとなくて、暇なき行法の間にさへ、心ならず思ひ見奉つる事なし、まみゆること遅きときは、杖にすがり來り給ひて、跪き背後に立ち、夏は扇をつかひ、冬は暖むる様に認めたまふ。これ然るべからずと申せども、幾程もなき自らが、心に任せてくれよと仰せられければ、上人も憐みありて、心に任せよと御慈悲あるによつて、片時も離れたまふ事なし、我れまた御憐のもだし難さに、ひまを計ひ見奉らんと通ひしぞかし、げにも今更別れ奉りなば、さこそ悲しくましまさめと思へば、涙もせきあへず。誠に自ら亡せなば、やがても絶え入りたまふべき志なれば、立つも立たれず、居るも居られず、只惘然として泣くばかりなり。なほしも母は、ひかへたる袂を放さず寄りかゝり、泣き沈みたまひければ、袖ひきわきがたくて、掌を合せ、自らがまうす道理、よく聞く聞しめし候へ、惜しみ思しめさるゝ御事、御事には存じ候はず、さりながら、かねてもまうし如く、この世は夢幻と住みなし給へ、佛とまうす事は他になし、我がなす胸のうちに、明らかなる月輪の曇らぬを悟とまうし、埋るゝを迷とまうし候ふ、されば佛は、衆生に、善惡へだてなきよし、説き置かせおはしますものを、さあらば親となり子となり、

師となり弟子となる、これ皆一心の願により、三箇大事ことごとく阿字の一字にこそ、をさまりて候へと怒りければ、母ひかへたる袖を少しゆるしけるところに、棄恩入無爲信實報恩謝の道理を、つぶさに説きければ、母涙をおさへて、さらばとて許しけり。證空はうれしくて、いそぎ坊に歸りけり。まことに孝行のほど、天衆地類もあはれみをなし給ふべきにや。

九九 泣不動の事

晴明遅しと、待ちし事なれば、七尺に床をかき、五色の幣を立て並べ、きんせんさんぐ敷の供具、菓子を盛りたて、證空を中にすゑて、晴明禮拜恭敬して、珠數さらりとおしもみ、上は梵大帝釋、四大天王、下は堅牢地神八大龍王まで勸請して、既に祭文におよびければ、牛玉のわたると見えて、いろくのさんせん幣帛、或は空に舞ひ上りて舞ひ遊び、或は壇上ををどり廻る、繪像の大聖不動明王は、利劍を振りたまひければ、其の時晴明座を立つて、珠數をもつて證空のかうべを撫で、平等大慧一乗妙典と言ひければ、すなはち上人の苦惱さめて、證空に移りけり。やがて五體より汗を流し、五臓を破り、骨髓を碎くこといふに及ばず。これを見る人、晴明が奇特のたふとさ、證空の志のあり

がたさに、上下袖を絞るばかりなり。さて證空の頭より煙立つて、苦痛しのび難かりしかば、としごろ頼み奉る、繪像の不動明王を睨みたまつり、我がふたつ無き命師命に奉ず、召し取らしめ屍を壇上にといめんと、正念に住して、安養淨刹にむかへとりたまへ、ちがしんしや即身成佛、あやまちたまふなと、一心の願をなしければ、明王あはれとやおぼしけん、繪像の御眼より、くれなぬの御涙をばらくと流させ給ひて、汝貴くも報恩を重くして、一人の親を振りすて、師命に代るこゝろさしほうしても餘あり、我れまた如何でか汝が命に代らざるべき、きやうじやを助くる大聖明王の誓、地藏菩薩に限らず、受くる所の苦痛を見よと、新に靈驗願ければ、明王の御頂より、猛火ふすほり出て、五體より汗を流し給ふ。貴しとも忝しとも、ことばにもいひがたし。即ち證空が苦惱とどまり、智興大師も助かり、證空も盟にあづかりたまふこと、ありがたかりし例なり。されば三井寺に泣不動とて、寺の寶の其一なり。ながさせたまひし御涙紅にして、御胸まで流れかゝりて、今にありとぞ承る。まことに師匠の恩斯様にこそありがたきものなれ。

一〇〇 鞠子川の事

箱根を忍びいで候ひし時は、權現にも御暇をも申さず、況して師匠にかくとも申さざりし事、今に其の恐残りて覺え候ふとまうしければ、十郎もさこそとて、箱根にぞかゝりける。鞠子川を渡りけるが、手綱かいくり申しけるは、和殿三つ祐成五つの年より、二十餘の今まで、此の川を一月に四五度づつも渡りつらん、いかなる日なれば、今渡り果てんことの悲しさよ、などやらん、いつよりも、この川の水濁りて候ふ、心もとなしといひければ、五郎申すやう、昔人の冥途に趣く時は、物の色變り候ふとな、我等が行くべき道、曾我を出づるは、娑婆を別るゝにて候ふ、此の川は三津の川、ゆさかの時は死出の山、鎌倉殿は閻魔王、御前祇候の侍どもは、獄卒阿防羅刹、左衛門の尉は善知識、箱根の別當は、六道能化の地藏菩薩と念じたてまつる、此の川の水、色變ると見えて候へとて、駒打ち入れけるが、稍ありて十郎、

さみだれに淺瀬も知らぬ鞠子川波にあらそふわがなみだかな

五郎聞きて、歌の心あしくや思ひけん、むかばきつづみ打ちならして、斯くぞ詠じける。

渡るよりふかくぞたのむ鞠子川親のかたきに逢ふ瀬とおもへば

かやうにおもひつられて、とほるところは、阿彌陀の院じゆかさま寺湯本の宿をうち過ぎ、ゆさかの

峠に駒をひかへ、弓杖つきてまうしけるは、人生れて三ヶ國にて、果つるとは理なり、我等生るゝ處は伊豆の國、育つところは相模國、最期どころは駿河國、富士の裾野の露と消えなん不思議さよ。五郎聞きて、その最期所が大事にて候ふぞ、心得たまへといさむれば、仰せにやおよぶと宣へども、さすが故郷のなごりや惜しかりけん、我が故郷の方をはるゝと眺むれば、只雲のみかゝり、何處をそことも知られども、烟すこし見えたるは、若し曾我にてや候ふらん。道三郎これをかへりみて、烟は曾我にて候はず、それより南の黒き森に、雲のかゝりて候ふこそは、曾我にて候へとまうしければ、ふるき事どもの思ひ出されて、十郎、

曾我はやしかすみなかけそ今朝ばかり今をかぎりの途と思へば

と打ち眺め涙ぐみければ、五郎この有様を見て、此の人に同心しては、はかなくしきことあらじ、諫めばやと思ひければ、怒り聲になりて、殿こそは、大磯・小磯・曾我・故郷をも眺めたまへ、時致においては、思ふ事こそいそがしく候へとて、駒ひき退け駈け出し、二町ばかり駈け通りぬ。十郎興さめて思ひながら、駒駈け出し追ひつきけり。五郎ひき下り、口説きけるは、人界に生をうくる者誰かは最後のなごり惜しからで候ふべき、鬼主道三郎が心をも御恥ぢ候へかし、彼等をば曾我へ歸し

候ふべし、もし此の事かなひて候はゞ、申すにやおよぶ、仕損ずるものならば、此の人々が、此處にては歌をよみ、彼處にては詩を詠じて、しもたてぬ事など嘲られんも口惜し、如何ばかりとか思し召し候ふとまうしければ、道理とや思はれけん、その後は歌をもよまず、横目をもせず、うちける程に、おほくづれにこそつきにけれ。

一〇一 二宮の太郎に逢ひし事

隙ゆく道を見わたせば、馬乗五六騎出てきたる。誰なるらんと十郎見るに、二宮殿とおぼえたり。いでや此の事いつばし語らんといふ。五郎聞きて、あまりの事なれば返事もせず。やゝありて申しけるは、いかでかやうの大事、婿には知らせ候ふべき、異姓他人にては候はずや、如何なる人か、世になき我等が、死にと行くとかたらはんに、同意する者やさうらふべき、ただ對面ばかりにて御通り候へ。十郎聞きて、御分の心を見んとてこそと相談し、あひ近くなりければ、此の人々馬よりおり、弓取りなほし色代す。人々はいづくへ行き給ふぞや。鎌倉殿富士の御狩と承り、狩くらの體見まゐらせ、末代の物語と思ひたちてまかり出て候ふとまうす。義實聞きて、あはれ人々の無用の見物かな、

馬鞍見苦しくての見物しかるべからず、これより歸りたまへ、某も御供と仰せられつるを、見苦しさに、風のこゝろと梶原が方へまうして遣し候ふ、面々も只これより歸り給ひて、二宮に逗留し、笠懸など射て遊びたまへと申しければ、十郎、畏り存じさうらへども、斯様のことは、重ねてありがたき見物と存じ、既に思ひ立ちて候ふ、馬弱くば、山をば牽かせさうらふべし、歸りにはまゐり、暫くも逗留仕り候ふべし、殿の肴御用意さうらへと申しければ、この上は御歸りをこそ待ちまうすべしとて、馬引寄せ打ち乗り、東西へうち別れけり。たゞ世の常と思へども、これぞ最後の別れなり。さて我等討死の後、形見ども、曾我より二宮へも送りなん、其の時にこそ、男子なりせばひとみちにならで有るべきに、女の身の悲しさは、其の事こそ叶はずとも、せめて道よりなど最後の傳言だになかりつるぞと、怨みたまはん事さぞあらんと、思へば包むその涙、先立ちぬるこそ悲しけれ。

一〇二 矢立の杉の事

とても捨つべきいのちども、遅速はおなじ事ながら、さりぬべき便宜もこそあらめ、一時も急げやとて、駒をはやめて打つほどに、矢立の杉にぞ著きにける。この杉とまうすは、元は湯本の杉といひ

けるを、一年九州に阿蘇の平權守とて、虎狼の逆臣あり、九國を打ち従へて、ちやうずる事四年なり
 軍すること五十餘度なり。度毎に勝てり、其時の齡七十二歳なり。剩へ天下をなやまし奉らんとて、
 國を備す聞えありければ、六孫王の御時、其の討手のために、關東の兵を召されのぼりしに、此の杉
 のもとに下りぬて祈りけるは、九州に下り權守をうち従へ、なんなく都に歸りのぼり、名を後代に揚
 ぐべくば、一の矢受け取りたまへとて、各射けるに一人も射損ぜず。さて筑紫に下り合戦するに、難
 なくうち勝つてかへり上りぬ。その時よりして矢立の杉とまうしけり。門出めでたき杉とて、上下旅
 人、心あるもなきも、此の木にうは矢をまぬらせぬはなし。いはんや我等思ふことありて行くものぞ
 かし、如何てかうは矢をまぬらせざらんとて、十郎一の枝にとどむ。十郎二の枝にぞ射立てける。何
 となく射けれども、十郎はよひに討たれ、五郎はあしたに斬られにけり。この杉の瑞相あらはれて、
 一二の枝のへだて不思議なりける次第とは、今こそ思ひあはせけれ。さても兄弟は、駒を早めてうつ
 程に、箱根の御山にぞ着きにける。

一〇三 箱根にて暇乞の事

そも箱根山とまうすは、關東第一の靈山なり。後には高山峨々と連りて、眞如の月影を宿す。
 前には精進の湖漫々として、波煩悩の垢をすゞげば、無終の罪障も消滅すとおぼえたり。本地文殊師
 利菩薩、衆生を化度したまへば、有爲の都と名づけたり。されば一度縁を結ぶ者は、長く惡所に墮さ
 じと誓ひたまふこと、頼もしくぞ覺えける。この人々け御前にまゐり、奇妙頂禮、願はくは今生にて
 は、思ふ敵を討たせ、後生にては、ともに淨土に迎へ取りたまへ、時致十一より此の御山にまゐり、
 今に至るまで毎日三卷づゝ、普門品忘らず讀み奉るも只このためなり、憐みたまへと念誦して、別當
 の坊へ行きにけり。

一〇四 同じく別當に逢ふ事

行實やがて出て逢ひ給ひて、古今の物語したまふ。男になりたまへばとて、昔になりかはりて思ふ
 べきにあらず、御身こそよそがましくし給へ、面々の心中はじめより委しく知りて候ふぞ、あはれに
 のみこそ思ひ奉れ、如何てか怨み申すべき、人に頼まるゝこと、在家出家によらず、愚僧も年だに若
 く候はば、などかはたよりにならざるべきとて、鬘染の袖を顔におし當て、さめぐくと泣き給へば、

十郎承り、御意畏り入り候へども、さらに野心のさうらはず、時致もその後やがて罷り上り、男になりて候ふおこたりをも、申すべきにて候ひしを、母に不興せられてさうらひぬ、また恐をなし奉るゆゑ、今に遅なはり候ふ。別當聞き給ひ、祈禱はたのもしく思ひ給へ、千騎萬騎の方人と思し召せとて、酒とり出し、三三九度勤めたまひけり。

一〇五 太刀刀の由來の事

何をもつてか、方々の門出祝はんとて、鞘巻一腰取り出し、十郎にひかれけり。此の刀とまうすは、水會義仲の三代相傳とて、三つの寶あり。第一にりうわうづくりの刀、第二にくもおどしといふ太刀、第三に此の刀なり。名をばみぢんといふ。通らぬものなかりければなり。されば此の三つの寶を秘藏して持たれたり。御子清水の御曹司、鎌倉殿の婿になり給ひて、國の大將軍たまはつて、海道を攻め上りたまひ候ふ由、きこえければ、彼の寶を祈のためとて此の御山へ參らせらる。寶殿のことは、一向別當のはからひたるに依つて、是を御邊にたてまつる、高名したまへとてひかれけり。五郎には、兵庫鎖の太刀を一振取り出しひかれけり。この太刀と申すは、むかし頼光の御時、大國より、武悪大

夫といふ英耶を召し、三ヶ月に作らせ、一ヶ月に磨かせ二尺八寸に打ち出す。秘藏並ぶものなくして持たれける。或る時二つの太刀を枕上に立てられし時、俄に雨風吹きて、此の太刀を吹き動しければ、はかぜに傍なりける草紙、三帖のかみかず、七十枚斬れたりけり。頼光、てうかと名づけてもたれたり。それより、河内守頼信の許へ譲られぬ。それにての不思議には、此の太刀を抜かれければ、四方五たんぎりの蟲も翼も切れおちにければ、むしばみとぞ附けられける。それより頼義のもとへ譲られたり、それにての不思議には、をりく御所中震動して、人死し失することたびくなり。或る時頼義、此の太刀を枕に立てられしに、例のごとく雷電はげしく、御所中騒し。この太刀おのれと抜け出て、大地一丈が底に入り、斯る悪事仕る大蛇の尾頭、九尋ありけるを、四つにこそは切りたりけれ。その後よりぞ御所中の狼藉もとまりける。怪しみて跡を尋ねて見給へば、斯る不思議をしたりければ、毒蛇と名づけて持たれたり。それよりして八幡殿へ譲られける。それにての不思議には、其の頃宇治の橋姫の、あれて人を取りけり。或る夕暮に八幡殿、宇治へまゐられけるに、人のまうすに違はず、川の水浪しきりにして、十八九ばかりなる美女一人橋の上に上りて、八幡殿を馬よりいだき下し、川の中へ入れんとす。かの太刀おのれと抜け出て橋姫の左手の腕を斬り落す。ちからおよばず川へ

飛び入りぬ。夫より狼藉も止りけり。しかれば此の太刀を姫斬となづけて持たれたり。夫より六條の判官爲義のもとへ譲られたり。それにての奇特には、此の太刀に六寸ばかり勝りたる太刀を添へて置かれたるに、夜に入りぬれば斬りあひけるを、判官この山聞きたまひて、豫れてよりやうあるものとて、五夜までこそ立ち添へておかれけれ。五夜のあひだ隙なく戦ひて、六夜と申すに、我が寸に勝りたるを、安からずや思ひけん、餘る六寸を斬り落す。されば友斬と名づけてもたれたり。源氏重代にも傳ふべかりしを、保元の合戦に、爲義斬られ給ひ、嫡子左馬守義朝の手へわたりけるに、佛法守護の佛とて、鞍馬の毘沙門に籠めたまふ。されども過ぎにし合戦に、父を斬りたまひしかば、多門も受けずやおぼしけん、合戦に打ち負け、東國さして落ち給ふ。尾張の國智多の郡、野間の内海といふ所にて、相傳の家人、鎌田兵衛正清が舅、長田の四郎忠致に討たれたまひて後、傳ふべき人なかりしに、義朝の末の子、九郎判官殿未だ牛若殿にて、鞍馬の東光坊のもとに、學文しておはしけるが、いかにしてか聞き給ひけん、折々毘沙門に詣り、歸命頂禮願くは、父義朝の太刀、此の御山に籠められて候ふ、父の形見に一目見せしめたまへと、祈念まうされければ、多門あはれと思し召しけん、此の太刀を下したまふと夢想をかうぶり、よろこびの思ひをなし、急ぎまゐりて見奉りたまへば、御戸開

けて此の太刀あり。盗み出して深く隠しおきて、十三になり給ひける年、相傳の郎等奥州の秀衡を頼み、商人に伴ひくだりたまひけるに、美濃の國垂氷の宿にて、商人の寶を取らんとて、夜討の多く入りたりしかども、起き合ふ者もなかりしに、牛若殿一人起きあひ、屈強のつばもの十二人斬り止め、八人に手を負せて、多くの強盜追つ返へす。高名したる太刀なりとて、奥州まで秘藏せられけるに、十九の年兵衛の佐殿謀叛起したまふと聞し召し、鎌倉に登り見参に入り、幾程なくして、西國の大將軍にて發向せられけるに、今度の合戦に打ち勝たせたまへとて、此の御山へまゐらせ給ひて候ふ。自然に僻事し出し候ひて、上より御尋ねあらば、法師が御邊にたてまつりて、狼藉なりと御不審あらん時は、京に上り、四條の町にて買ひとりたる由まうさるべし、御分男になり給へば、今は見参に入れたくはなけれども、志を思ひやられてあはれなるぞとよ、祈禱はたのもしく思ひ給へ、この法師が息のかよはんほどは、明王を貴め奉らん、何の疑かあるべきと宜ひけり。時致うけたまはつて、仰泰なけれども、さらに野心の儀は候はず、御不審の條尤もにて候へども、恐れ奉つてまゐらぬなり、狩場より歸りには登るべく候ふ、又は思し召し合する事も候ひなんとて罷り立ち、さらぬ體にはもてなせども、今を誤りなれば、忍びの涙へ流しけり。別當も縁まで立ち出で給ひて、遙々見送りつゝ、名

残をしくぞ思はれける。兄弟の人々は、駒に鞭を打ち、急がれけるほどに、三島近くぞなりにける。

一〇六 三島にて笠懸射し事

十郎道にてまうしけるは、只今別當の御詞、ひとへに御託宣とおぼえたり。其のうへ我等に權現より劍一つづたまはり候ふ上は、今度敵を討たんこと疑ひあるべからずと悦びて、三島の大明神の御前にこそ著きにけれ。この人々墨紙をはさみ、七番づゝの笠懸を射て、法樂したてまつり、敵の心そのままにぞ祈られける。實に思ふ事かなはずば、我等敵の手に懸りて、足柄を東へ二度歸し給ふべからず、南無三島の大明神とぞ念じける。皆人は、神や佛に詣りては、あるひは壽命長遠と祈り、諸病悉除とこそ祈るに、此の人々のあけくれは、父のためにいのちを召せとのみまうしけるこそ無難なれ。かやうの事までも、最後の文にくはしく書きて、富士野より曾我へ返しける。母見たまひて、五つや三つよりおもひ立ちけるとも知られけり。

一〇七 浮島ヶ原の事

さても御察は、浮島が原に御座のよしうけたまはり、曾我兄弟も急ぎ追つ付きたてまつりぬ。浮島が原を通りけるに、かの原の昔は海にてありけるに、大國より愛鷹山といふ山、富士と丈競せんとして、きたりけるを、權現蹴崩したまひければ、其の山海に浮きて、今の浮島が原になりけり。一方は海漫々として雲行客の跡をうづみ、一方はよこをり伏せる小夜の中山より、宇津の山邊につゞき、東路わけてはるかなり。或る人東國に下りけるが、この原にて、滄波路遠くして雲千里と云ふ、詩の上の句を作り、下の句をよせかれたりけるをりふし、十六歳になりける娘を連れたりけるが、詩をば作り得ずして、

みちとほく雲井はるけき山中にまたともきかぬ鳥の聲かな

と詠みたりければ、父聞きて、先の下の句を繼ぎけり。はくぶ山深うして、鳥一聲といふ詩も、今更思ひ知られたり。其の夜は君浮島が原に御泊りあり。この人々も便宜善くばと、伺ひけれども、用心隙なかりければ、力なし。其の夜もそこにて窺へども、北條殿の警固にて隙もなし。

一〇八 富士の狩場への事

これらは相澤の御所にましましてけるが、梶原源太左衛門を召して仰せ下されけるは、きのふの狩場より勢子少くはかなふまじ、其の山相觸れよ。承つて人々に觸れ、射手を描へけり。先づ武藏の國には、畠山の庄司次郎重忠・三浦の和左衛門義盛・三浦介義澄、下總の國には千葉の介、甲斐の國には、古郡左衛門兼忠・武田の太郎信義、下野の國には、宇都宮の彌三郎友綱・横山の藤馬の丞・相摸の國には、松田・河村の人々を先として、以上三百餘人なり。若侍には、畠山の六郎重保・梶原源太左衛門景季・朝比奈三郎義秀。同じくひこ太郎・御所の太郎・森の五郎・林の四郎・小山の三郎・笠井の六郎・板垣の彌次郎・本間の彦七・澁谷の小五郎・愛甲の三郎を始めとして四百五十餘人なり。總じて弓持ち馬に乗る侍、三百萬騎もあるらんと見えし。其の後勢子を山へ入れけるに、東は愛鷹の峯をさかひ、西は富士川を際として、引き廻されけり。勢子は雲霞のごとし。嶺に登り谷に下り、野干を平野に追ひ下し、おもひく射留めけり。御寮の其の日の御装束には、羅綺の重衣のふぢまつ、風折したる立烏帽子に、狩衣は柳色、大紋の指貫に、熊の皮の行膝、しばうちながに召し、連銭・盗毛なる馬の五尺にあまりたるに、白鞍置かせ、厚紙の鞆かけてぞ召されける。御劍の役は江戸の太郎、御笠の役は豊島の新五郎、沓の役は小山の五郎、御敷皮は金子の十郎なり。其の外一人當千の武

士、六七百人御馬の廻りと見えたりし。其の中に、殊に勝れて見えたりしは、五郎丸なり。崩黄威の朋丸に、一尺八寸の太刀指し、四尺八寸の太刀を佩き、黒金の棒の三人して持ちけるを、もと輕げにつきて、御馬の前にぞ立ちたりける。御陣の左右には、和田島山いづれも鷹をぞ据ゑさせける。馬うち靜かにして、また並ぶ人なくぞ見えし。その外數千騎の出立、花を織り月を招くよそほひ、廣き富士野も所なくぞ見えし。かくて山より鹿ども多く追ひ下し、思ひく留めて、御寮の御見參にぞ入れにける。畠山の六郎重保、左手右手に相付けて、鹿二頭留む。宇都宮五郎、一條板垣五郎、武田小山の人々も、五頭こそ留めけれ。その狩場の物数はこの人々とぞ聞えし。こゝに笠井の六郎清重目の寮がたに至るまで、鹿一頭も留めずして、勢子に瀧るし鹿もやと、しげみく目に掛けて廻りける。をりふし右手のしげみより、鹿一頭出で来る。願ふところと見渡せば、矢頭に少し延びたり。鎧に鞭を打ち添へて、下りさまにぞ落しける。既に二三段切り違へて、弓打ち上げて引かんとする所に、思はぬ岩石に、馬を乗り掛けて、四つ足一つに立てかれて、わなききてこそ立ちたりけれ。下すべきやうもなく、進退こゝに谷れり。上下萬民これを見て、唯あれはくとぞまうしける。今は馬人もるともに、微塵になるとぞ見えたりける。清重手綱をしづかに取り、とねりなしを結びおき、かゞみの鞭

をうち添へて、二つ一つの捨手綱、むくんに落ちかゝり、放せば後に下り立つたり。馬は手綱を捨てられて、眞砂につれて落ちて行く。主がつかきたる弓の本岩角にえり立て、暫し堪へて立ち直る。諸人目をこそすまされ。乗りたりおりたり、掘ふたりや堪へたりと、しばしは鳴も静まらず。君も御感のあまりにや、常陸の國小栗の庄三千七百町下されけり。時の面目日の高名、何事かこれに如かんと、感ぜぬ人こそなかりけれ。

一〇九 源太と重保が鹿論の事

かゝる所に、上の繁みより、鹿二頭いてきたり、梶原源太ひかへたる、左手を通りてぞくだりける。景季幸ひにやと喜びて、鹿矢を打ち番ひ、よつびき放つ。追つ様すぢかひに首をかけ、ついとぞ射貫きたる。されども鹿は物ともせず、思ふ茂みに飛び下る。二の矢を取つてつがひ、鞭うち下すところに、不思議に馬を乗り懸けて、足並みたるゝところに、おり立つて、馬引つ立つるその隙に、畠山の六郎重保、馳せ並べてよつびいて放つ、源太が矢目をほざりまでぞ射ける。源太にはしたゝかに射られぬ。鹿はすこしもはたらかず、二つの矢にてぞ留まりける。重保馬打ち寄せて見るところに、源太

も駈け寄せて、その鹿は景季とどめて候ふぞ。重保聞いて、心得ぬ事を宣ふもの哉、鹿は重保が矢一つにて留めたる鹿を、誰人か主あるべき。源太弓取り直し冷笑ひてまうすやう、狩場の法定まれり、一の矢二の矢次第あり、矢目は二つもあらばこそ、一二の論も有るべけれ、景季もまさしく射つるものなとて、見れば實にも矢目は一つならでは無かりけり。さりながら御前で、取らるゝものならば、時の恥辱に思ひければ、源太大きに怒りをなし、勢子のやつばらは無きか、寄りて此の鹿を取れ。重保も駒打ち寄せ、雑人は無きか、重保が留めたる鹿のかはたて。源太さる者なりければ、少しもひるむ気色はなし。臆したるやつばらかな、景季が留めたる鹿のかはたてかきて取れ。重保さらぬ體にて駒駈け廻し、雑色共は、など鹿をば取らぬぞと、はや事實なる詰論なり。源太は手綱かいくり駒うち寄せて小聲にいふやう、懸路にまよふ隠し文、やる者こそ主さうらふよ。重保聞いて、優しくのたまふ譬かな、思ひの色の數夜まで、むなく返すには、返し得たるぞ主となる。源太打ち笑ひ、吉野龍田の花紅葉、さそふ嵐は主ならずや。重保聞きて、言はれずや、誘ふ嵐もそのまゝに、つひに連れても行かばこそと宣ふ。龍田の河の河波に、散りて流るゝ花の雪、紅葉の錦渡りなば、中や絶えなんさりながら、流れてとまる所こそ、誠の主と思はるれ。げに故ありて聞えたり、波にも連れて行かばこ

そ、かゝるぬぜきの主なるべき。ぬぜきも留めはてばこそ、流れてとまる湊こそ、誠の主とは覺えけれ。源太此のことばを打ち捨て、ふけゆく月の傾くをも、ながむる者こそ主となれ。重保聞きて高らかにうち笑ひ、世界を照す日月を、主とのたまふ過分なり。過分は人によるものを、御分一人に歸すかと。重保たまらぬ男子にて、ひとりに歸すか歸せざるか、手並のほどを見せんとて、既に矢をこそ抜き出す。源太も白まぬ者なれば、案の内よといふまゝに、既に中指抜き出す。梶原が耶蘇は、いふに及ばず、時の綺羅並ぶ者なかりしかば、知るも知らぬも押し並べて、梶原方へぞ馳せ寄りける。三浦の人々もこれを見て、源太に意趣ある上は、秩父方へは疎遠なり、見放すまじとて馳せ寄りける。以下の人々兒玉の人々は、梶原方へぞ與力する。みま本間の人々は、秩父方へぞ寄せ来る。駿河の國の人々は、梶原方へぞ寄りにける。伊豆の國の人々は、北條殿を先として、秩父方へぞ馳せ寄りける。安房と上總の武士は、二つに割れて寄りにける。常陸下總の人々は、秩父方へぞあつまりける。八ヶ國のみにあらず、日本國中に名を知らるゝほどの侍、魚鱗に重なり、鶴翼に連りて、ひたひしめきにひしめきけり。畠山殿は、始めより知りたまひしが、いかゞ思はれけん、知らぬ由にてぞましましける。頼朝これを御覽じて、あれ／＼盛盛静め候へと、仰せ下されければ、和田殿、兩陣の間へ馬馳け

入れ、上意にてさうらふぞ、鹿論のこと、互にその理あり、所除鹿をば上へ召され候ふ、兩人御前へまぬられよとの、御説にて候ふと、大音聲にて言ひ、其の後勢子を召し、彼の鹿を昇かせ、六郎と源太と引き連れ、御前さして参られけり。さてこそ兩陣は破れにけれ、危ふかりし事どもなり。さればにや、君の御恵あまれく、御憐み深くして、事静まりぬ。方々も安穩なるにて、昔をおもふに。

一一〇 燕の國早魃の事

大國の燕の國、早魃すること三ヶ年なり。しかれば草木こと／＼枯れ尖せ、人民多く亡びける。へは、鳥獸にいたるまで、生き残るべしとは見えざりけり。國王大きに歎きたまひて、大法秘法、殘さず行ひ、雨を祈られけれども、驗なし。大王思ひのあまりに、諸天に恨み奉りて曰く、我れ生れてよりこのかた、禁戒を犯さず、事をみだりに行ふとも思はずさうらふに、かくの如く早魃して、人のしやうめいすくなし、若し我が身に過るところあらば、戒めたまへかしと歎きまうさるれども、その驗なし。今は身命を民のために捨てんには如かじとて、廣き野邊に出で、葦をおほく集めて、高さ二十丈に積み上げさす。公卿大臣、奇異の思をなすところに、國王臨幸なりて、其の葦の上のほりた

まひて、火をつけよと綸言なりければ、臣下おほきに辭してつくる者なし。其の時大王宜ふ、若し過りて、政治みだりなることあらば、焼けぬべし、焼くるほどの身ならば、命生きても益なし、若しまた過らざれば、天これを守るべしとて、大きに逆鱗ありければ、綸言背きがたくして、四方より火をつけければ、猛火山の如くに燃え上りて、炎空に滿てり。大王も烟に咽び、前後辨へがたし。すでに御衣に火のつきければ、目をふさぎ掌を合せて、正念に住して、火坑變成池と念じたまひければ、天これを憐みて、大雨にはかに降り下りて、山の如くなりつる猛火を消し、國王も助かり給ひ、人民も命を繼ぎ、五穀成就しけるとなり。されば論語に曰く、過りて改むるに憚る事勿れ、過りて改めざるは、賢かへりて愚なりと見えたり。此の文の名を圓珠といへり。まどかなる玉の、盤を走るとよそへてなり。君御言葉の重き一つにて、多勢の靜まりけるにて知られけり。會我の人々は、あはれ事の出で來れかし、加擔入する風情にて、狙ひ寄つて、一刀刺さむとばかり思ひけり。かくて日も暮方になりしかば、今日をかぎり、傾く日影を惜しみけり。

一一一 新田が猪に乗る事

茲に伊豆の國の住人、新田の四郎忠常、いまだ鹿に逢はずして、落ち來る鹿を相待つところに、幾年経るとも知らざる猪が、ふしぐさかく十六つきたるが、主を知らぬ鹿矢ども、四つ五つ立つたりしが、大きに猛つて駈け廻る。たとへば、楊山が術、きよりくりうが神變も、およぶべしとは見えざりけり。近づく者をかければ、落ち合ふ者も無くして、いたづらに中を明けてぞ通しける。忠常これを幸ひと、駈け寄せけり。御前近うなりければ、よしや新田よしや忠常とぞ仰せ下されける。入るこそ多き中に、かやうの御徒家ること、生前の面目、何事かこれに如かんと存する間、鐵とうをまるめたる猪なりとも、餘さじものと思ひければ、大の鹿矢を抜き出し、只一矢にと引いて放つところに、矢よりも先に飛び來たり、乗りたる馬を主共に、宙にすくうて投げ上げ、落ちば駈けんとする所に、かなはじと思ひけん、耳も手綱も打ち捨て、向う様にぞ乗り移る。されども倒にこそ乗つたりけれ。猪は乗られて腹を立て、馬を彼處へ駈け倒し、雲と霞に分け入つて、虚空をとんで廻りしは、周の秘王、釋尊の教法を聞かんとて、八匹の駒に鞭を上げ、萬里の道利那に飛び著きしも、これにはいかで勝るべき。新田は、習ひし手綱のやう、腰もきれよと挟み付け、尾筒か手綱に取り、樂天が傳へし三頭玉郎が秘せし手綱、是なりけりと堪へけれども、せんかたなくぞ見えたりける。猪はいよ／＼

猛りをかき、木のもと登のした、巖岩石を嫌はずして、宙に飛んで廻りしかば、烏帽子・竹笠・沓・
 行際、一度に切れて落ちにけり。大童になりて、只落ちじと計ぞこらへける。大きに猛き猪も、數多
 手は負ひぬ、新田が威にや押されけん、御前ぢかき枯杭に、爪突きよわるところに、あやまたず腰の
 刀を抜き、胸中に突き立て、肋骨二三枚掻き切りければ、猪は四足を四五寸土に踏み入れて、立ちず
 くみにこそなりにけれ。新田は急ぎ飛び下りて、かずの止を刺す。上下の狩人これを見て、前代未聞
 の振舞かな、面白くも止めたり、乗りも乗つたり、堪へも堪へたりと、感ぜぬ人こそ無かりけれ。君
 も此の山御覽じて、狩場のうちの高名はこれに如かじと御感あり。富士の下方にて、五百餘町を給り
 けり。勢餘りてぞ見えし。されども此の猪は、富士の裾、隠居の里とまうす處の、山の神にてぞまし
 ましける。凡夫の身の悲しさは、夢にもこれを知らずして、留めにける御咎にや、やがて其の夜、會
 我十郎に打ち合ひ、あまたの手負ひ危かりし命、いくほどなくて、田村の判官が謀叛同意の山隠言せ
 られて、討たるべかりしを、重保につき申し開き、御目に懸らんとて參じける折節、召しの御馬放れ
 たりしが、御庭せばしと馳せ廻る。日本一の荒馬なれば、おひまはす人々是を見て、よしや新田、取
 れや忠常、繩を懸けよ、過すなと、こゑんくに呼ばよりて、庭上騒動す。新田が郎黨門外に集りて、

我等が主、只今搦め取らるゝぞや、主の討たるゝを見捨て、何處迄か遁るべきとて、思ひ切つたる
 武士共、二三十人抜き連れて、御前さして斬つて入る、新田が進の極なり。御所方の人々是を見て、
 新田が謀叛誠なり、餘すな方々として、非番當番の面々出て合ひて、火出づる程こそたかひけれ。御
 所方の人々數多討たれしかば、新田が陳ぼうのがれずして、廿七にて討たれにけり。不便なりしこと
 どもなり。これ然しながら、富士の裾野の猪の咎なりとて、舌を巻かぬは無かりけり。これや靈神怒
 る時は、災害岐に満つなるも、今こそ思ひ知られたれ。

一一一 船の始りの事

さても御察は、何時の暮より、御狩の興に入り、四方の海山をぞ眺めさせたまひける。をりふし沖
 つ島の木の間より、漕ぎ浮べたる漁小舟、同じ風に行き違ふ。げに不思議なる舟のあやつりかな、
 誰人か仕初めつらんと仰せられけり。千葉の介が申しけるは、船の始は、むかし黄帝の御時、しうと
 云ふ逆匠ありて、おうこうと言ふ海を隔て、攻むべきやうなかりけり。こゝにくわてきと言ふ臣下
 あり、折節秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の、一葉の上に乗れりつゝ、次第々々に小蟹の、いとばかな

くも柳の葉の、汀に寄りし秋霧の、立ち来るくものふるまひ、げにもと思ひそめしより、たくみて船をつくらせ、おうこうを安く渡り、しうを平げ、御代を治めたまふこと、一萬八千歳となり。しかるに船の船の字を、君に進むと書きたり。又天子の御駕を龍駕と名づけ奉り、又船を一葉といふことも、此の時よりぞはじまりける。又君の御座船を、龍頭騎首とまうすも、この御代よりぞ起りけると申しければ、さて極樂の弘誓の船はいかにや。それは菩薩聖衆の御法にて、凡夫の及ぶところに候はずとぞ申されける。同じく、富士の高嶺を遙々と見上げさせたまひて、昔竹取の翁、鶯の卵を養じて、赫哉姫となりしゆくへ、又風になびく富士の烟の空に消えて、ゆくへも知らぬ我が思かなと詠ぜし四行法師がしたごころまで、思し召しただしけり。

一一三 祐經を射んとせし事

梶原源太左衛門景季は、いまだ鹿に逢はずして、落ち来る鹿を待ちかけつゝ、駈け並べよつびいて放つ。されども、上をはるかに射越して通しけり。景季取り敢へずかくこそまうしけり。

夏草の繁みがしたを行く鹿のそでの横矢は射にくかりけり

君きこしめして、神妙なりとて、これも富士の裾野にて、百餘町をぞ賜りける。人々これを聞いて、鹿射はづし、歌よみてだに恩賞にあづかる、まして好く留めたらん輩は、如何にとぞまうしける。御寮、左衛門の尉祐經を召して、不審なることあり、用心せよと仰せ下されければ、畏り存じ候ふ山をまうしける。こゝに梶原源太景季、侍のしよしにて、總奉行第一の者なれば、上の御説をうけたまはり、曾我の人々をちかづけて申しけるは、神妙に御供まうされて候ふ、奉公はいづれも同じこと、御宿に大事の御物具あり、留守の御宿直まうされよ、いかさま今度鎌倉へいらせましまして、御免蒙りたまふべし、奉公心に入れられよとまうしければ、祐成是非に及ばずして、畏り入りさうらふ、よきやうに御申し候へ、頼み奉るとぞ返事しける。源太重ねまうす様、御宮仕によつて、本領仔細あらじと存じ候ふといひてこそ歸りにけれ。時致これを聞きて、あはれ源太、我々をすかさんと思ひたる氣色の、さしあらはれたる奴かな、蛇ば一寸をいだして其の大小を知り、人は一言をもつて其の賢愚を知る、狐の子は小狐より、父が孫を繼ぎて、この冠者が頬の白さよ、いつの奉公によりてか、御氣色もよかるべき、さだめて御寮のおほせには、其の冠者原は誰がゆるして、狩場へは出でけるぞ、よくくすかし置きて、首を斬れとの御説か、流罪せよとの仰にてぞあるらん、げにや古きことばを案

ずるに、國は賢を以つて興し、諛を以つて衰ふ、君は忠をもつて安じ、僞をもつて危し、人け巧にし
 て僞らんよりも、拙うして誠あるには若かず。此の者のふるまひは、世の煩ともなりぬべし、そのう
 へ奉公まうすべきためならず、あはれ身に思だになかりせば、この冠者が頼一太刀斬つて、思まんず
 るものなとぞ申しける。さて兄弟は、見えがくれに逃れつ離れつ、心をつくし狙ひけるこそ無慙なれ。
 十郎が其の日の装束には、萌黄匂の裏打ちたる竹笠、村千鳥の直垂に、夏毛の行膝深くひつこうで、
 鷹うすべうの鹿矢、管高にとつてつけ、重藤の弓の真中取り、茸毛なる馬に貝鞍置きてぞ乗つたりけ
 る。五郎が其の日の装束には、薄紅にて裏打つたる、ひやうもん竹笠真深に著て、からさいみに蝶
 を二つ三つ所々に附けたる直垂に、紺の袴、秋毛の行膝、たぶやかにはき下し、鶴の元白の征矢、管
 高に負ひなし、二所藤の弓の真中取り、鹿毛なる馬に、蒔繪の鞍置きて乗つたり。遙にとほき敵を見
 つけて十郎に告げ、下にて祐經を見つけて五郎に告げ、たがひに心を通しけり。人はみな、鹿に心を
 入れ、いかにもして、上の見參に入らんと、嶺にのぼり谷にくんだり、野を分け里を尋ねけれども、よ
 そめ如何と思ひしに、勢子を破りて鹿こそ三頭出て来りけれ。是はいかにと見るところに、彼の祐經
 こそ追つすがひて落しけれ。其の日の装束はなやかなり。深線綾の直垂に、大斑の行膝に、切符の矢

負ひ、吹寄藤の弓の真中取り、金砂にて裏打ちたる浮紋の竹笠、嵐に吹き靡かせ、黒き馬の太くたく
 ましきに、白覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。馬も聞ゆる名馬なり、主も屈強の乗手なり、三つある
 鹿に目を懸けてこそおつすこうたれ。三つある鹿にはへだたりぬ、馬の駈場もよかりけり。十郎これ
 を見て、此の鹿は埒の外に勢子を破りて落ち来るにや、追つ返したてまつらんとて、十三束の大の中
 差取つて番ひ、矢所多しといへども、奥野の狩場の歸りさまに、父の射られけん鞍の山形のはづれ、
 行膝の引合、報の知らする恨の矢、餘のところをば射べからず、いかなる金山鐵鼠なりとも、志のな
 どかは通らざらんと、左手になしてぞ下りける。五郎も同じく、中差取つてさし番ひ、左衛門の尉が
 首の骨に目をかけて、大磐石を重ねたりといふとも、なか斬つて捨てざらんと、鞭に鐙をもみそへ
 て、右手に相付け馳せならべ、三つある鹿と左衛門を真中に取り込め、矢先を左衛門に指し當て、引
 かんとするところに、祐經がしばしの遅や残りけん、祐成が乗つたる馬を、思はぬ伏木に乗りかけて、
 尻倒にころびけり。あやまたず弓のものを越して、馬の頭に下り立つたり。五郎は、これを知らずして、
 矢筈を取り立ち上りけるが、兄のありさまを一目見て、目もくれ心も消えにけり。この隙に、敵はは
 るかに馳せ延びぬ。鹿をも人に射られけり。五郎むなしく引き返し、いそぎ馬より下り立つて、兄を

介錯しける、心のうちこそ悲しけれ。あはれ實に我等程、敵に縁なき者あらじ、只今はさりととも、そ思ひしに、馬つよかりせば、かやうにはなりゆかじ、これも貧より起ることなり、人を恨むべきにもあらず、かなはぬ命ながらへてものを物はんよりも、自害して悪靈にもなりて、心意を遂げんとぞ悲しみける。十郎これを聞きて、しばらく待ちたまへ、それたいさんの絶はいはほみ穿ち、雷は石をうがつ、たんこの釣瓶の細は井桁をきる、水は石の墜にあらず、細は木の鋸にあらず、せんひの然らしむるところなり。たゞ心をのべて功を積みたまへとて、馬引き寄せうち乗りけり。

一一四 畠山歌にてとぶらはれし事

その後は、人々いかに見るらんとて、十郎馳くれば五郎ひかへ、五郎行けば十郎とどまり、よそめをも包みければ、時移り事延びゆきければ、其の口もすでに暮れなんとす。畠山殿は程近くましませば、兄弟の有様をつくくと御覽じて、今まで本意を遂げざるぞや、あはれ平家の御代とおもはば、などか矢一つとぶらはざらん、當君の御代には、かやうの事もかなはず、重忠も若き子供を持ちぬれば、人のうへとも思はずして、まことに無慙におぼえたり。梶原觸状には、明日鎌倉へ入らせ給ふべ

きなれば、今宵討たてはかなふまじ、この山知らせんと思ひたまへども、人々あまたありければ、歌にてぞ訪ひたまひける。

まだしきに色づく山の紅葉かなこの夕暮を待ちて見よかし

と詠めたまひて、涙ぐみたまひけり。折節梶原源太左衛門が、近う控へたりしが、なにごとによ、會がの殿原に、まだしきに色づくと詠じたまふは心得ず。重忠聞いて、夏山に夕日影のさしのころ風情、はつともみぢに似ずや、このゆふべこそ猶も移りゆかば、まこと秋にやなり行かん。源太なほも言葉あり顔なりしを、君より急ぎ召されしかば、駈け通るとて、重忠の御歌の不寐残りてといひながら、馳せすぎければ、人々聞きて、今にはじめぬ梶原がわんざんとはいひながら、ことにかゝり見えぬるをやとまうし合ひける。重忠おほせけるは、命を養ふものは、病のさきに薬を求め、世を治むる者は、亂れぬさきに劍を習ふと、三部論に見えたり。それまでこそ無くとも、かやうのえせ者を近く召し使ひて、末の世いかゞとぞ仰せける。其のより會我の人々を近づけて、こよひ重忠が所へまします、歌の物語をまうさんと宣へば、畏り存じさうらふ由返事して、十郎弟に言ひけるは、畠山殿は情をもつて、はや此の事を知りたまひけるぞや、耳の信じて目を疑ふ者は、耳のつねの弊なり、遠をたつとみ

て近づくをいやしむ者は、人の常の情、抱朴子に見えたり。されども歌のこゝろは如何にと問へば、知らずといふ。十郎はよろづに情深くして、歌の心を待たり、思ふことあらば今宵かぎりと告げたまふぞや、君は明日伊豆の郷、明後日鎌倉へ入らせましますよし、其のきこえあり、思ひ定めたまふべしといふ。珍しくも思ひさだめ候ふべきか、申すにや及ぶとぞまうしける。元來剛なる時致が、重忠には諫められ、いよく今宵をかぎりとぞ定めける。かれてより思ひ定めしことなれども、さし當りての心細さ、思ひ遣られて無慙なり。日暮れ、君井出の館へ入り給ひしかば、國々の大名小名、御供してぞ歸りける。曾我兄弟も人なみくに柴の庵へぞ歸りける。

一一五 館廻りの事

道にて十郎まうすやう、和殿は館へかへりたまふべし、二人連れては人もあやしく思ひなん、祐成ばかり行きて、館の案内見て歸らんとて、太刀ばかり持たせ、館々をめぐりけり。思ひくゝの幕の紋、心々の館の次第、なか／＼ことばも及ばれず。こゝに二つ木瓜の幕打たる館あり。誰が幕やらん、これは我等が家の紋なり、御敵となりほろびぬ、伊東と名乗る者なければ、此の幕打つべき者なし、

誰なるらんと不思議にて立ち寄り、幕の物見より見入れければ、敵左衛門が館なり。これは如何に、彼等は一つ木瓜の幕をこそ打つべきに、こゝろえぬ者かな、まことや人々にあらず、鹿をもつて人とし、家々にあらず、いづくをもつてか家とす、繼ぐべきをば繼がで、すずろなる曾我の某と呼ばれぬるうへは、家の紋いるべからず。祐成はまことやらん、われ／＼が先祖の知行せし所領をしるによつて、かやうになり行くものをや、あはれ昔は斯様に無かりしものと、見入れてとほりけり。

一一六 祐成が館へ行きし事

斯くて祐成が嫡子犬房、祐成を見つけて、只今十郎通りさうらふ。左衛門開きて、玉の井の十郎か横山の十郎かと問ふ。曾我の十郎殿といふ。これは祐成が館にて候ふ、立ち寄りたまへと言はせければ、祐成すこしも憚らず、館の内へ入り見たまへば、手越の少將は、左衛門の尉が君と見えたり。木瀬川の龜鶴は、備前の國吉備津宮の往藤内が君と見えて、嫡子犬房に酌取らせ、酒盛しけるをりふしなり。いくほどの榮華なるべき、今宵の夜半に、ひきかへんことの無慙さよと思ひながら、座敷にぞ直りける。祐成、敷皮を去りて、これへといふ。十郎、斯くて候はんとて、押し退け居たり。祐成が

初對面しよたいめんのことばぞこはかりける。まことや殿原は祐經すけのねを敵かたきとのたまふなる、ゆめく用もちぬたまふべからず、人の讒言ざんげんとおぼえたり、さし當る道理にまかせて、人のまうすも理ことわりなり、伊東は嫡ちやくなる間、祐經すけのねこそ持つべきところなるを、面々の祖父伊東殿いとうのとの横領わりりやうし、一所をも分けられざりしかば、一旦は恨うらむべかりしを、第一養父やうふなり、第二叔父しやくふなり、第三烏帽子親みぼしおやなり、第四に舅しやくとなり、第五に一族の中の長者ちやうぢやなり、一方ひつかたならざるによつて、こらへて過ぎしに、これは只高ただたかきに望みのほらされ、賤しやくしきを謗そしりわらはざれといふ本文ほんぶんを捨て、我等をぬぐわいに思ひたまふ故なり、面々の父河津殿かづのの、奥野おくのの狩場かりばの歸りに討たれたまひぬ、獵師れつし多き山なれば、をこの矢にや當りたまひけん、又は伊豆駿河いづすまがの人々多く打ち寄り、相撲取りままふてあそび給ひけるに、殿野たんのの五郎と勝負を争ひ、當座たうざに喧嘩けんわにおよびしを、御察ごさつの御成敗ごせうばいに依りしづまりぬ、さやうの宿意しゆくいにてもや討たれたまひけんを、在京さいきやうしたる祐經すけのねに、かけて申されけるなれども、更に知らず、あまつさへ祐經すけのねが郎黨らうたう共あまた失ひぬ、其の時分しじぶんやがて對決たいけつを遂げたりせば、遁のがるべかりしを、幾程なくして當御代たうみよとなりて、面々親おもしき人々皆御敵おんかたきとして、ながらへたまはぬ、只祐經一人ただすけのねひとりになりて、終に此の事さんだんせずしてやみぬ、しかれば只祐經ただすけのねがしたるになりて、年月をへさうらふ、これ不祥ふしやうといふも餘りあり、よくきゝたまへ十郎殿じうらう、祐成すけのね聞きて、

とかく言ふに及ばず、ただ謹んで居たり。是なる客人きやくじんをば知りたまふにや。今日はじめて見參けんさんに入り候へば、いかでか見知り奉るべき。あれこそ、備前びぜんの國、吉備津宮きびつみやの往藤内わうとうないとて、さる人なるが、今年七年ことしななとし君きみの御不審ごふしんを蒙り、所領しよりやう召されて有りつるを、此の三ヶ年祐經すけのねとりつぎまうしつる間、御免ごめんをかうぶり、所領しよりやうに安堵あんどうして、蒲原かほはらまで上りたまひしが、祐經すけのねに名殘なごり惜しまんとて歸りたまふ、かやうに他人だにもまうし承れば、親しくなるぞかし、まして殿原と祐經すけのねは、從兄弟いとこ甥なまこといふ者なれば、今は親おやとも思ふべし、便宜べんい然るべく候はば上様うさまへ申し入れ候ひて、奉公ほうこうをもまうし、一所いっしょをも賜りて、馬うまの草飼所くさかひどころをばしたまへ、殿原たのへらは祐經すけのねが思ひたてまつる様には、思ひ給はじ、北條きたじやうへは、常に越えて遊あそび給へども、なにを恨うらみてか、更に伊豆いづへは見え給はず、しもたてぬ賢人けんじん顔かほせんよりも、我等われらに睦なごみて、若き者共に背そむかずしてまします、面々の馬うまの様を見るに、馬うまに肉しもなし、伊東いとうに馬うまども數多あまたさうらへば、乗り付けて乗り給へ、惣なまじひに人の言ふことについて、祐經すけのね討たんと思ひたまはんこと、今生ことしやうにてはかなふまじ、會我殿原くわいだんげんと、廣言くわうげんしけるが、いかゞ思ひけん、言葉ことばをかへて言ひけるは、醉狂すいきやうのあまり、言失ことしつかまつると覺えたり、今よりはじめて、たがひの遺恨いこんをやめて、親子おやこの契ちぎたるべしとて、盃取さかづり寄せ客人きやくじんなればとて、往藤内わうとうないにはじめさせ、其の盃珍さかづしきとて、十郎じうらうにさす。その盃少將さかづしやう

にさす。其の盃を祐經にさす。其の盃龜鶴にさす。其の盃を十郎にさす。酒を八分にうけて思ひけるは、憎きかたきの廣言かな、身不肖なり、何事かあるべきと思ひこなし、初對面に、さんぐに言ひつるこそ奇怪なれ、此の君共がみよこそ、東八ヶ國の侍の聞くところ、口頃は親の敵、只今は日の敵、袂に衣を重ねればのがすべきにあらず、受けたる盃、敵の面にうちかけて、一刀刺し、いかにもならばやと、千渡百度進めども、一心をかへて思ふやう、待て暫し、兄弟といひながら、祐成と時致は、父の敵に志深くして、一所にてともかくにもと契りしに、心はやりのまゝに、祐成如何にもなるならば、五郎むなしく搦め捕られ、恨みん事こそ不便なれ、こゝは堪ふる所と思ひしづめて止りしは、情ふかくぞ覺えける。左衛門の尉は、神ならぬ身の悲しさは、我に心をかかるとは、夢にも知らずして、十郎殿、盃はいかにほしたまはぬ、御前達あたまましませば、肴待ちたまふと覺えたり、今様をうたひ給へと言ひければ、二人の君、扇拍子を打ちながら、蓬萊山には千年経る、千秋萬歳かさなれり、松のえだには、鶴集くひ、殿のうへには龜あそぶといふ一聲をかへし、二廻までこそ踏ひけれ。其の時盃取り上げて、三度までこそ乾したりけれ。其の土器、祐經乞うて、方々は何か思ひたまふらん知られども、今日よりして、親子の契約あるべし、あの小童奴を弟と思し召され、汝も兄と思ひたて

まつれ、他人のあしからんは恨にあらず、したしきなかの疎きをば、神明も憎みたまふ事なれば、今より後互に憚りあるべからず、この盃賜りて祝ひ候はん、ただし所望さうらふぞや、十郎殿は扇拍子の上手と聞けどもいまだ見ず、一番舞ひたまへ、一つは客人のため、一つは祐經が祝のあるやにていかがあるべき、御前達面白く候ふべし、早々と責めければ、犬房はやしぞ立てたりける。祐成、仔細に及ばずして、持ちたる扇さつと開きて、君が住む、龜尾が山の瀧つ瀬はといふ、一聲を揚げてしげし舞ひけるが、ちぢに心を通して、とやせんかくやせましと、思ひみだるる舞の手に、夜更けば入るべき道つたひ、饅はづさん長舞に、此處より入り彼處より廻らん、彼處はつまり此處は通路、忍びて入らば音は立たじ、入るとも知らじ、さす腕、袖の返しに目をつかひ、半時ばかりぞ舞うたりける。座敷につらなる人々は、見知る印のなきまゝに、腕を備すばかりなり。君どもを始めとして、唯すもおぼえぬ風情なり。斯くて十郎舞ひ入りければ、祐經盃思ひがへしとて、十郎にさしたりければ、十郎取り上げ、三度乾して扇取り直し、畏つてまうしけるは、今宵はこれに御宿直申したく候へども、北條殿にまうし合はする仔細候ふ、なにさま明日参りて、常々宿直まうすべしと、暇乞うて出でける。祐成案者第一の男子にて、敵何とかいふらんと思ひ、小柴垣に立ち隠れ、聞くことは知らず、往

藤内、此の殿原の父をば、誠に討ちたまひけるかと問ふ。左衛門の尉聞きて、今は彼等が聞かばこそ、以前具にまうしつる様に、我等嫡孫にて持つべき所領を、彼等が祖父に横領せられぬ、それがしが在京ながら、田舎の耶麻共に申し付けて、彼等が父河津の三郎といひし者を討たせしなり、人もやさぞ知りて候ふらん、此の者共の子孫は、皆謀叛の者、君に失はれたてまつり、今祐經一人に罷りなる、然れども君不便の者に思し召され、先祖の所領拜領の上は、祐經にせばめられ、思ひながらぞ候ふらん、彼が此の頃の分限にて、祐經に思ひかゝらんは、蜘蛛が斧を取つて龍車に向ひ、蜘蛛が網をばりて、鳳凰を待つ風情なり、あはれなるとぞ申しける。往藤内聞きて、それこそ僻事よ、世にある人は所領財寶に心がとまり、思ふことは滞るなり、されば寸の金にて尺の木をば切れども、尺の木にて寸の金を切ることなし、貧なる侍と鐵とは侮らぬものをや、何とやらんあしき様に仰せつる時には、殿には頻りに目をかけたてまつり、刀の柄に手を掛け、片膝押し立てつるとき、事出で來ぬと見えしが、されども色には出さず、よき武士かなとぞ譽めたりける。左衛門の尉これを聞きて、何程のことか仕るべき、龍はれよりて本體をあらはさず、人酔ひて本心を現はす、思ふ事こそいはれ候へ、恒河砂はつき、螢の火にて須彌は焼くるとも、討たるゝ事あるべからず、南無阿彌陀佛とぞまうしける。

後に思ひ合はすれば、これや最後の念佛と、あはれにぞ覺えし。十郎かくいふを立ち聞きて、即ち館の内へ走り入り、如何にもならばやと思ひしが、五郎に憂き身の惜しまれて、たゞ空しく歸りける、心の中こそ無慙なれ。そもく只今の言葉どもよく思へば、唯往藤内がいはすることばなり、今宵は落ちば落さんと思ひつれども、今のことばの奇怪なれば、一の太刀には左衛門、二の太刀には往藤内と思ひさだめて、館よりこそ歸りけれ。

一一七 屋形の次第五郎に語る事

五郎兄を待ちかゝれて、心もとなくして佇みけるところへ、十郎來りて、如何に待遠なるか。五郎聞きて、さらぬだに人を待つは悲しきに、おろかに思し召すものかな。祐成もさ存ずるを、敵左衛門が屋形へ呼び入れられ、酒をこそ飲みつれ。さて如何に便宜あしく候ひけるか。いふにや及ぶ、亂舞の折節、あはれと思ひしかども、御分一所にこそと存じて、堪へつるころざしおし置りたまへ。五郎も聞きて、おんふちはさる事にて候へども、是程よりつかずして心をつくす、便宜よく候はどおんふち候ふべきものを、さりながら一太刀づつ、ともく斬りたく候ふぞかし、その屋形の様御勢候

ひけるにや。其の爲案内はよく見おき候ひぬ、但し屋形の敷多くして、見知りたる人は、所々にこそ候ひつれ、扇開きてこそはかぞへけれ。まづ君の御屋形に並べてうちたりしは、北條の四郎時政、御一門には、一條・板垣・逸見・武田・小笠原・南部・下山・山名・里見の人々、石山・山形・梶原、屋形をならべて候ふなり。東には、和田・畠山・黒津・姉崎・本田・榛澤・池延・兒玉・小澤・山口・丹の横山・紀清の兩黨・岡部・榛澤・金子・村山・村岡・なかさや・折原・比企・中條・みたむろの人々、屋形を並べて候ふ。常陸の國には、佐竹・山内・志田・とうち・鹿島・行方・小久江・六月・森山・ちくはの殿原、下總の國には、千葉介常胤・相馬次郎諸實・けしの三郎種盛。こくほの五郎實道・たうの六郎種兼・葛西三郎清重・あふ・猿島・大原・小原。屋形をならべ候ふなり。上野の國には、伊北・伊南・隼北・隼南・因藤・金岡・小寺・深須・山上・大越・大室、上總の國には、安西・金丸・東條、信濃の國には、内藤・片桐・黒田・諏訪黨・齋藤・村上・井上・高梨・海軍。望月、屋形を並べ候ふなり。下野の國には、小山・宇都宮・結城・長沼・氏家・鹽谷・木村・皆川・足柄。まのだの人々、屋形をならべ候ひぬ。相模の國には、座島・本間・土屋・愛甲・土肥の次郎・ふし。越後屋の藤五・澁谷・佐藤・秦野の右馬丞・岡崎・三浦の人々、伊豆の國には、入江・粟科・木津川・船

越・大森・桂山、遠江の國には、石濱・清水、參河の國には、設樂・中條、尾張の國には、大道寺・宮の四郎・關の太郎、美濃の國には、山本・柏木・たつぬ・錦織・佐々木黨、屋形を並べさうらふなり。當番の人々には、結城の七郎・川越・高坂・大胡・おしむろ。難波の太郎。上總介父子、屋形を並べしなり。坂東八ヶ國、海道七ヶ國のみにあらず、三年の大番、訴訟人といふほどの者の屋形、雲霞のごとなり。さて君の御座所をば真中に、四角四面にるりを延べ、五十九間に飾られたり。面々おもひくの屋形造、いろくの幕の紋、金銀をちりばめてこそ飾られけれ。凡そ屋形の敷二萬五千三百八十餘軒なり。總じて上下の屋形のかず、十萬八千軒のきをならべて小埒をやり、藪を並べて打ちたりけり。東に添ったるは梶原平三景時、西のはづれば左衛門の尉祐經が屋形なり。幾程とこそ思ひけん。五郎聞きて、客人はいづくの國の如何なる人にて候ひける。備前の國の住人、吉無津宮の往藤内・手越の少将・木瀬川の龜鶴を並べ置きて、酒盛なかばなりしに呼び入れ、祐成も舞をまふほどの事なりつるに、面にあて、廣言どもしつるむれんさよ、一刀さしいかにもと思ひけれども、和殿に命がなしまれて、手に掘りたる敵をのがしつるこそ無念なれ。五郎聞きて、これや實の山に入り、手を空しくする風情なり、嬉しくもおんこらへ候ふものかな、あまし候ふべきにもさうらはず、南無阿

一一八 和田の館へ行きし事

彌陀佛とぞまうしける。

來つて暫時もとどまらざるは、有爲轉變のさとり、去りて再歸らざるは、冥土黃泉のわかれなり。愛傷戀慕のかなしみ、今にはじめぬことなれども、日本國に我等程、もの思ふものあらじと案ずるに劣らず歎をする者のあるべきこそ不便なれ。五郎聞きて、たれやの者か我等にまさりて候ふべき、さればこそよ、備前の往藤内が、七年御不審かうぶり、此の度安堵の下文を賜はりし使先に下り、斯くといはゞ、國にとどまる親類、集り悦びあはんとするに、又人くだりて、討たれぬといふならば、さこそ歎かんずらんと、深きことばを案ずるに、人として能あるものは、天の加護により、人として財あるものは、歎によると見えたり。されば往藤内助けばやとは思へども、雜言あまりに奇怪なれば、祐成においては餘す可からず、御分も漏すなとまうしければ、承るとぞ申しける。斯くて夜のふけん程待たんも遙なり、いざや和田殿の館へ行き、最後の對面せん、しかるべしとて、二人打ち連れ、職盛の館へぞ行きける。やがて職盛出で合ひて、いかに殿原遠、はるかにこそ存すれ、狩くらの體これ

が初にてぞましますらん、何とか思ひたまひけん、まことに見物には上やあるべき。十郎扇笏にとりなほし畏つて、さん候ふ、かやうのことは珍らしき見物、末代の物語に、あの冠者に見せさうらはんため、二三日の用意にて罷り出で候ふが、あまりの面白さに、斧の柄の朽つるを忘れ、曾我へ人をして候ふ、その程と存じ参りて候ふと言ひければ、和田聞きて、何條其の儀あるべき、口比の本意を遂げんとするが、一家のみはてに、職盛に今一度對面せんとてぞ來りぬらんと、あはれに思ひければ、さぞ思すらん、數多度見て候ふだにも面白く候ふ、まして若き人々の、初めて見給はんにさぞ思し召すらん、嬉しくも來りたまふものかな、かれてより知り奉りなば、初より申すべかりつるものをとて、酒取り出し勸めけり。盃二三度めぐりてのち、和田のたまひけるは、相かまへてせばよくしたまへ、爲損じなば一家の恥辱なるべし、後楯にはなり申すべし、頼もしく思ひたまへとて、盃さしれけり。折節梶原源太館の前を通りけるが、斯くいふを聞き、何事ぞや和田殿、曾我の人々にせばよくせよと、仰せられつる不審なり、御耳にや入れ候ふべきといふ。和田殿聞きて、こは如何に、曲者通りけるよ、さりながら陳じて見んと思ひければ、自然の物語何と聞きて、御分御耳にいらんとは宜ふぞ、此の面々我に親しきこと、上にもしろし召されたり、それにつきては御狩と承り、必ず召しはなけれども、

末代まつだいの見物けんぶつに、忍びしのびて御供ごんぐつかまつり候ふ、若き者のならひ、木瀬川きせがわにて女共にょどもと遊び候ひしが、若相わかしやう澤さわの御所ごしよに御入ごいりの由承り、いそぎ参り候ひしあひだ、引手物ひきてものをさす候ふ、何なにに何なににても取らせんと申し候ふ間、道の者は恥しきぞ、引手物ひきてものせばよくせよ、爲損しせんじなば一家の恥ぞとまうしつるが、此の事ことならでは何申したりとも覺えず、急ぎおんまうしありて、義盛よしもり失ひたまへと高聲たかこゑなりければ、景季かげきも、一興いっけいにこそまうし候へ、何とて和田殿わだどのは某たれに逢ひ給へば、よしなき事にも角かどを立てよのたまふらん、これは苦しからぬとて、空笑そらわらして通りけり。なほもわさんの者にて、何とかいふと暫し待たむ。これをば知らで、和田殿わだどの宣のたまふは、水みづをよく泳およぐ者はむもれ、馬うまによく乗る者は落ち、日は晝ひる中ちゆうに移うつる。月は刻下こくかに傾かたむく、昊天かてんに颯せきれ厚地こうちに踏ふせよとあるをや、このものは十分に過ぎて如何ぞとおぼゆる。五郎ごろうこれを聞き、ごちんぼうを用もちわす通とほるものならば、しや細首ほこくぢぢきつて、捨て候ふべきを申しければ、梶原かぢはら立ち聞きて、まことや此の者は、朝比奈あそひなにみぎはまさりの大力たからちから、をこの者と聞きたり、此處こゝにて事ことしいだし勝負しやうぶせんより、上様うへさまへ申しあげ、我が力ちからもいらで失うはんこと、易やすかるべしと思ひさだめて、聞かざる由よしにて通りけり。和田わだ宣のたまひけるは、今暫いましばらくくも候まちひて細こかに物語ものがたり申まをしたけれども、源太げんたいとまうす曲者まがものが御前ごんまへに参りつるが、いかやうにか申し上げ候はんずらん、あひかまへて爲損しせんじ給たまふな

といひ置きて、和田わだは御前ごんまへへぞ出でられける。この人々は館たてに歸り、夜の更よくるを待ちけるが、やゝありて十郎じちろうまうしけるは、くだんの梶原かぢはらが御分ごぶんのいひつる事を立ち聞きけるが、いかさま大勢おほせにて寄せぬと覺ゆる、館たてを替かへんといひければ、五郎ごろう聞きて、源太げんたい程ほどの奴やつ何十人も候へ、一々に斬せり伏ふせなんとまうす。十郎じちろう聞き、身に大事だいじさへなくば、言ことふに及およばず、但し某たれに任せ候へとぞ申しける。

一一九 兄弟館をかへし事

斯かくて兄弟けいだいの人々は、柴しばの庵いほりをひき拂はらひ、思おもはぬところへより居ゐつゝ、時ときを待つこそ哀あはれなれ。是こゝをば知らで、源太げんたい百餘ひゃくじゆ人の兵つはものを引き連れて、人々の魚うまへぞ押し寄せたる。されども人なかりければ、日本にっぽん一の不覺ふかくはん人ひと、斯か様さまにあるべしと思ひしに違ちがはず、人にてはなかりけりと、高言たかげんして歸りしは、なごがましくぞ見えし。これや鼠ねずみふかく穴あなを堀ほりて、群禽ぐんきんの害がいをのがれ、鳥とり高く飛んで、さうめいの害がいをとほざけるとは、かやうのことなり、あやふかりし事どもなり。

一二〇 會我への文書さし事

儲も兄弟の人々は、更けゆく夜半を待ちかねて、十郎言ひけるは、いざやこの隙に、幼少より思ひしことをくばしく文に書きて、曾我へまゐらせん、然るべしとて、おのゝ文をぞ書さける。我等五つや三つの年より、父の討たれにしこと忘るゝ隙なくて、七つ九つと申せしに、月の夜に出て、雲井の雁金を見て父を戀ひ、明くれば小弓に小矢を取り添へて、障子を射とほし、敵の命になぞらへ、彼を討たんことを願ひなげしを、母の制したまひしこと、また父のこひしき時は、一間所にて、二人は語りてなぐさめども、人々には言はざりしなり。祐成は十三にて元服し、五郎は十一より箱根のぼり學問せしに、十二月の末つかたに、里々より衣裳音物、取り添へく世の稚子達には送れども、箱王が里よりは贈物もなし、まして父の文もなし、明孝父を戀しく思ひて、權現へまゐり、敵を見んと祈りしに、程なく御前にて、祐經を見そめしこと不思議ありとて、法師になるべかりしを、此の事によりて、只一人夜に紛れて、曾我へ逃げくだりしなり。男になりて、母の勘當蒙りしこと、又打ち出でし時、たがひの形見、たまはり參らせ置きていでし事、信濃の御狩に徒にて下りねらひし事、虎に契をこめしこと、鞠子川湯坂の峠、箱根寺大崩までのありさま、矢立の杉のことども、今のやうに覺えたり。おもふ事どもくばしく書き、命をば父に回向まうし、讚誦の御經は母に手向け奉る。親は

一世の契とまうせども、これを形見にて來世にたまゐりあはんと、おなじ心に書き止めければ、大なる巻物一つつぞ書きたりける。十郎が曾葉の末五郎にかはりたるは、大磯の澁が事なり。五郎が曾葉の十郎にかはりたるは、箱根の別當の事なり。さていづれもおなじ文章なり。あはれはこそ覺えけれ。

一一一 鬼王道三郎曾我へ歸りし事

さて鬼王道三郎を呼びて、汝はいそぎ曾我へ歸るべし、小袖をば上へまゐらせよ、馬鞍は曾我殿にたてまつれ、自然の時は御先途に代りまゐらせ候ふべき山、随分心にかけてしを、父の敵に志深くして、先立ちまうすこと無念に存じさうらへども、恐れながら二人の子供の形見に御覽候へ、五つ三つよりして、左右の御膝にて、育てられ參らせし御恩、忘れがたくこそ存じ候へ、肌守と鬘の髪をば、弟共のかたみに御覽じ候へとて、二宮殿にまゐらせよ、弓と矢は汝等に取らすぞ、亡後の形見に見候へ、頼と弓懸をば二人の乳母が方へやるべし、奉行膝は守り育てし二人が守に取らせよ、夜もこそ聞くれれば、これを持つて落ち候へとありければ、二人の者共忍の形見を受け取りてまうしけるは、我等

相模を出でしより、自然のこと候はゞ、君より先に命を捨て、死出三途の御供とこそ存じさうらふに、下耶をば命をしむ者と申し召し、か様に承り候ふか、只召し具せられ候へ、由々しき御用にこそ立ちまうさずとも、志ばかりの御供と申しければ、十郎聞きて、各が思ひ寄るところ誠に神妙なり、かやうなる者共を、世になければ恩をもせて離れんことを無念なれ、憂き世の中何事も思ふやうにならば、いかでかなはぬ事あらん、師君は三世の縁あり、來世にて此の恩をば報ずべし、唯この形見どもを、ことごとく會我へ届けたらんば、最後の供にまさりなん、狩場かりばに事出で來ぬと聞えなば、物思ふ子持ちたまへる母の、我が子供やらんと歎き給はんに、急ぎ参りて此の山斯くとまうすべし、今少しも疾く急げやとありければ、道三郎承つて、歸り候ふまじ、聞し召せ、君をばちの中より某こそ取り上げ奉りてはさうらへ、されば九夏三伏の暑き日は、扇の風を招き、玄冬げんとう紫雪の寒き夜は、衣をかさねて肌を温めまぬらせ、膽心たまごころもつくし育て、月とも星とも明け暮れば、見上げ見下し頼みたてまつり、御世に出でさせたまひ候はゞ、誰たれやの者にか劣るべきと、頼もしくもいとほしくも思ひ奉り、今まで、影形の如く附き添ひ参らせたるしに、情なくも落ちよと承る、たとひ罷り歸りて候ふとも、千年萬年を保ち候ふべきか、只御供に召し具せられ候へとて、稚き子の親のあとを慕ふ如くに、聲をし

まず泣き居たり。兄弟の人々も、心弱くぞ見えける。如何にもして歸すべきものをと聲が高くして、いかに未練なり、君臣の禮もだしがたけれども、心に従ふをもつて孝行とせり、そのうへ終に添ひ果つまじき身なれば、名残なごりなしき事盡くべきにあらず、いそぎ出で候へとて、荒らかにこそ宜ひけれ。鬼玉居直り、畏つてまうしけるは、某も母の胎内を出で、竹馬に鞭むちを當てしより、君につきそひ申し、成人の今にいたるまで、片時も離れたてまつる事なし、そのしるしにや落ちよとの仰こそ、誠に御怨めしくは候へ、捨てられまぬらせて後、なんに懸りて片時のながらへもあるべき、憂き身の果こそ悲しけれと、さめぐと泣きぬたり。まことに志深く、なじみの久しければ、たがひに語りたまへば、憂につけても、夜や明け日や暮らん、既に明方ちかくなるものを、急げや汝等、早くも行けど、かさね／＼責めければ、二人の者共言ひかれて、御供まうすべき命何處も同じことよ、住みはつべき終のすみか、おくれさきだつ道芝の、かはらぬ露の濡衣、はらひて御供申さんとて、二人が袖をひきちがへ、既に刀を抜かんとす。時致はやくも座敷を立ち、二人が間に押し入つて、涙とともに言ひけるは、賊に汝等が志は切なり、しかりとは雖も、我々これほど様をかへ制するを聞かずして、狼藉を致すものならば、淺間大菩薩も御照覽さうらへ、未來永劫不興すべし、我等に命を捨つるといふとも、故郷

へ形見かたみをとけずば、ながく志に受くべからず、この上は制するに及ばずと、荒あらいらかにこそ叱ちかりけれ。あかぬは君のおほせなり、次第の形見をたまはつて、會我へとてこそ歸りけれ。互の心のうちこそは悲しからめと、思ひやられて哀れなり。

一一三二 悉達太子の事

かくて鬼王道三郎は、次第の形見をたまはり、泣くく會我へぞかへりける。これや悉達太子しつたたいしの十九にて、菩提ぼだいのころざしを起し、檀特山だんとざんに入り給ひしに、舍しゃ匿とく舍人なり健けん肥ひ駒こを賜り、王宮へ歸りし思今更思ひ知られたり。鞍くらの上むなしき駒の口をひき、故郷へとは急げども、心はあとにぞ止まりける。五月さみだの雲間も知らぬ夕暮ゆふぐれに、いづくを其所とも知られども、そなたばかりを願ねがひて、涙と共にあゆみけり。心の中ぞ無む慚ざんなる。

一一三三 兄弟出立の事

さて此の人々は、郎黨らうたう共は、しらへかへしぬ、今は思ひおく事なし、いざや最後の出立いでだちせん、然

るべしとて、十郎がその夜の山立には、白き帷子かたびらの腋深く搔きたるに、群千鳥の直垂ひたれの袖を結びて肩に懸け、一寸斑すんぱんの烏帽子かぶとがけを強くかけ、黒鞘くろさや卷まき赤銅造やくどうぞうの太刀をぞ持ちたる。おなじく五郎が装束しょうぞくには、袷あはせの小袖の腋深く搔きたるを、狩場かりばの用意にやしたりけん、からさゆみの直垂ひたれに、蝶ちょうを二つ三つ所々に畫きたるに、紺地こんちの袴はかまの括くわゆるらかに寄せさせ、袖をば結びて肩に懸け、豹紋へうもんの烏帽子かぶとがけを強くかけ、赤木あかぎの柄つかの刀をさし、源氏重代げんじぢゆうだいの友斬ともざり肩かたに打ち懸け、まことに進める姿ふきうが昔ともいひつべし、たのもしとも餘りあり。十郎松助たいまつ振り上げて、此方こなたへ向きさうらへや時致、あかぬ顔見かほみんといふ。五郎聞きて、敵に逢ひ刹那せつなの隙ひまもあるまじければ、これこそ最後の見参けんさんのためなるべし、まことに祐成すけなりを兄と見奉らんも、今ばかりと思ひければ、兄が顔をつくくと守まもりけり。十郎も又弟を見んも是を限かぎと思ひければ、松明たいまつ差し上げつくく見、涙ぐみけり。互の心のうち推し量はかられておはれなり。今は是まで候ふ御急おんいそぎ候へとて、五郎先まに進みけるを、十郎袖をひかへて、女あまたあるべきぞ、太刀の振廻ふりまわしころえ候へ、罪作つみづくりに手ばし懸くるな、後日の沙汰さたも憚おそりありと言ひければ、左さ右みぎにやおよび給ふとて、足早あしはやにこそいそぎけれ。

二四 館々の前にてとがめられし事

此處に座間と本間と館數十軒向ひ合ひてぞ打ちたりける。彼の兩人が郎等箒をあまたところに焚かせ、木戸を結ひかさね辻を固め、通るべき様なかりけり。いかせんとやすらふを見て、何者ぞ是程に夜深けて通るは、ことに其の體ことがましく出立ちたり、怪しやとほすまじとぞ咎めける。苦しからぬ者なり、これも川心の態人をこそとがむべけれ。いや誰にでもまませ、五つ打ちて後かなふべからずとの御掟なり、通すまじきとぞさへける。十郎打ち向ひて、御咎めあるまじき者なり、これは土屋殿より愛甲殿への御使なり、通したまへと言ひければ、さらば通せと許しけり。此處をば過ぎぬれど、いまだいくつの木戸いくへの關警護をか通るべき、事むづかしき折節かなと、足早に行きけるに、千葉の介が縮の前をぞ通りける。こゝにも木戸をきぶく立て、番装束の警護の者數十人、これも箒をたきてぞ固めける。何者なればこれほど夜更けてとほるらん、遣るまじきとぞ咎めける。五郎打ち寄りて、御内方の者なり、苦しからずとて打ち寄り、木戸を押し開く。おさへて通るは様あり、我等が知らぬ人あるまじ、御内方とは誰なるらん、苗字を名乗れとぞ咎めける。我等は苗字もなきも

のなり、通し給へと言ひければ、御内方へとは虚言なり、やはかとほると廣言して、木戸を荒くぞ押し立てたる。五郎は木戸をたてられて、大きに怒つて言ひけるは、苦しかられば通るなり、苦しき者の振舞をみよ、これこそさる所へ強盗に入る者よ、止めんと思はん奴原は組み留めよ、手には懸けまじきものなと言ひければ、番の者これを聞き夜半のひやうしは何の川ぞや、かやうの狼藉静めんためなり、打ち止めよと追つ駈けたり。五郎も心得たりや、事々し、懸かりて見よといふまゝに、太刀取り直し待ちかけたり。十郎少しも騒がず、靜々と立ち歸り、是は更に苦しからぬ者にて候ふ、廳南殿より廳北殿へ大事の御物具の候ふを、取りに參りさうらふが、夜深に候ふ間人を連れてさうらへば、わかき者にて酒に酔ひて雜言まうし候ふ、只某に御免候へと、うち笑ひてぞ言ひたりける。御免と言ふに勝に乗り、さればこそとよ不審なり、其の儀ならば事易し、廳南殿へ尋ねまうすべし、その程待ち給へとぞ怒りける。十郎聞きて、かゝる笑止こそなけれ、さりながらも陳じて見んと思ひければ、此の者共怒りける其の中へ、ながくと立ち交り、御分達我々をば見知りたまはずや、廳南殿のみにち、彌源次・彌源太とて、兄弟の厮の者なり、いつぞや宇都の宮殿北山へ御山の時見參に入りたりしをば、忘れたまひ候ふやといふ。其の中におとなしき雑色あゆみ出で、十郎が顔をつつくくと守り

けり。祐成彼奴はこぼしと思へば、松明すこし側へまはし、眼を少し眇めて居たりけり。此の者共よくくまぼりて、誠に思ひ出したり、片瀬より關戸へ御歸りに、参りあひたる様に覺ゆるぞや。十郎事こそよけれと思ひければ、さぞと殿原、その時の酒盛には、座敷の一の狂人ぞかし、忘れたまふかと言ひければ、げに其の人にてましましけり、殿は人をば宣へども、二王舞をばしたまはぬか。傍なりける男が、是程の知音にてましますや、御使なるに急ぎ通したまへと言ふ。あはれ濁酒一桶あらば、いかなる御使なりとも、得手の二王舞を所望まうさぬか、一番見たしといひければ、十郎聞きて、同じ心にて候ふ、さりながら後日にまゐり逢はんとして、側目にかけてぞ通りける。此の者共打ち寄りて、誤りけん、通りたまへや人々とて、木戸を開きて押いだす。兄弟の人々は、鯛の口のがれたる心地して、十郎言ひけるは、かやうの處にては、何如にも降を乞ふべきに、御分の雜言こゝろえず、孔子のことばをげ聞き給はずや、事を見ては勇むこと勿れ、大事の前に小事なしとこそ見え候へ、身ながらも善くこそ陳じぬれ、これや富樓那の辯舌にて、波斯匿王の憤をやめけるも、いまに知られたりとぞまうし合ひける。

一二五 波斯匿王の事

そも富樓那の辯舌にて匿王のいかりをやめける由來を尋ねるに、むかし釋尊靈山にて法を説きたまひしに、波斯匿王問法結縁のために参らせられたり。富樓那尊者とまうすは、辯舌第一の佛弟子にてましましけり。然れども匿王の臣下の子なり。教法に心を染めて、匿王の方をだに見遣りたまはざりけり。匿王怒りをなしてはいはく、さても尊者はみづから佛前にありつるを、終にそれとだにも見られざりつる奇怪さよ、此の度参らん時は、その色見すべしとて、高臣數相具し、怨敵をふくみて参られけるとき、富樓那尊者は路中にて行き逢ひたまひ、いかに尊者、いづくへと宣ふ。尊者聞きたまひて、ことのほかに恭敬して、過ぎにし佛の御說法の時、君参りたまひしかども、法文歡喜のみぎり、身を忘れ他を知らざりしことなれば、其の禮更に無かりしなり、匿王はいまだしんぞく残り、是非にたづさはり給ひき、それまた道理なきにあらず、御憤もだし難し、王宮よりのおんたくみさぞと知られて急ぎ参りたり、誠に此の道理わきまへたまふにや、眞如禪定の時は、無二亦無三とよかれてこそ候へ、さるにおきて自らなく他もなく、法界平等なり、何者かありて、邪とも又正とも隔てん、萬法

一如にして、阿字本不生の願をなしたまへと示し給ひければ、匿王なほしも邪に入つて、みづからが言葉いたづらになりて、不禮にひとしく候ふべきにや、いよく怒を高くして、尊者の理に受け候はず、これ一重に驕慢瞋恚の外道、とあさましくおほえけれ。其の時當櫻那、にやくいしきたんかいをんしむしやうか、かやうの人は、まさに邪道を行じて、如來を見ること叶ふべからずとこそ説かれて候へ、色に耽り言葉に尋ねんは、むじやうしはくかんくくと見えたるをや。匿王なほ承つて、其の名は誰かいたしける。その心に歸りて尋ねたまへど、外には無しと宣ひけるところに、匿王一理を受けて、恭敬禮拜して、佛果に生じ給ふ。すなはち尊者引き其し、靈山に參りたまふ。げにや本文に、私の志を忘れ、誠の苦行によつて、法斯匿王もはうへんの教化によれり、かへすく私なしとこそ示されてこそ候へ、但し梶原といふ曲者の館の前いかとすべき、我等を見知りたる者なり、されども歸るべき道にもあらず、浮沈こゝにきはまれり、運にまかせよとて通、案の如く辻固のつはもの、數十人長道具立て並べ、まことに厳しく見えたり。詮方なくして、南無二所権現助けたまへと念じて、知らぬ様にて通りけり。されば神慮の御助にや、咎むる者も無かりけり。すはや好きぞとさしやきて、足早にこそ通りけれ。唯事ならずとぞ見えける。

一一六 祐經館をかへし事

既に祐經が館近くなりて、此所ぞといへば、打ち領き、既に館へ入らんとしける時、十郎弟が袖を控へ、我々敵に打ち逢ひなば、刹那の隙も有るまじ、今こそ最後のきはなれ、心静に念佛せよと言ひければ、しかるべしとて、兄弟西に向ひて手を合せ、臨命終の佛邊、親のために回向する、迎へ取りたまへと祈念して、館の中へぞ入りにける。されども往藤内がまうすやうに隨ひ、祐經思はぬ所に館をかへたりければ、唯むなく土器踏み散して、一人一人も無かりけり。これは如何にと明松振り上げ見れば、館もおなじ館、座敷も宵のところなり。人は多く伏したれども、晝の狩場に疲れ酒に酔ひ伏しければ、誰ぞとがむる者もなし。此の人々は力無く館を立ち出でて、天に仰ぎ地に伏し、悲しみけるぞ道理なる。敵に縁なき者をたづぬるに、我等には過ぎじ、今宵はさりとと思ひしに、餘しぬるこそ口惜しけれ、かやうに有るべしと知るならば、曾我へ人をば返すまじき者を、さなきだに世間に披露せられんこそ悲しけれ、自害して尖せなんとて立ちたりけり。

一二七 祐經討ちし事

さる程に兄弟の人々、敵は討ち漏しつ、あきれて立ちたるところに、秩父殿の御内なる本田の次郎親經、具足指し固め、夜廻の番なりしが、麻上に今宵も餘しけるよと、小聲に言ふ音しけり。いかさま伊豆駿河の盜賊の奴原にてあるらん、討ち留め高名せんと思ひ、太刀の鍔元二三寸透し、足早におゆみ寄りけるが、心をかへて思ふやう、一條會我の殿原の、日頃の本意を逃げんとて、夜盃附けめぐりつるが、左様の人にてもやと、障子のすきより忍びて見れば、案にもたがはず、兄弟は敵のかへたる館を知らで、あきれてこそは居たりけれ。痛はしく思ひ、左衛門の尉が伏したる館の妻戸をひそかに押し開き、何とも物をば言はずして、扇を出して招きけり。五郎此の山きつと見て、本田が我等を招くは、様こそあれと思ひ、松明わきに引き側め、唐縁につと上り、何事ぞや本田殿とさやけば、本田小聲になりて、夜陰の苗字は詮なし、波にゆらる、沖つ船、知邊の山はこなたぞと、言ひすて、こそ忍びけれ。そことも知らぬ夜の浪、風をたよりの港入り、心あるよと戯れて、館の内へぞ入りける。兄弟共に立ち添ひて、松明振り上げよく見れば、本田がをしへに違はず、敵は此所にぞ伏した

りける。二人が目と目を見合せ、あたりを見れば人もなし。左衛門の尉は、手越の少將と伏したり。往藤内は疊すこしひき退けて、龜鶴とこそ伏しにけれ。十郎敵を見付けて弟にいひけるは、和殿は往藤内を斬れ、祐經をば祐成に任せよとこそ言ひける。時致聞きて、おろかなる御詞かな、われく幼小より佛神に祈りしことは、往藤内を討たためか、此の者は逃げば逃すべし、たてあはせ斬るべし、祐經をこそ千太刀も百太刀も、心のまゝに斬るべけれ、早斬りたまへ斬らんとて、勇みかゝりて立ちたりけり。果報めでたき祐經も、無明の酒に酔ひぬれば、敵の入るをも知らずして、前後も知らずぞ伏したりける。二人の君どもをば衣に押し巻き、疊より押しおろし、おのれ壁立つなど言ひて、松明そばにさし置き、十郎枕にまはりければ、五郎は後にぞめぐりける。二人の君共はじめより知りたりけれども、餘り恐ろしさに、音もせず。兄弟の人々は、祐經を中に置きて、各目と目を見合せ、打額きて喜びけるぞあはれなる。三千年に一度花咲き寶なる、西王母が園の桃、優曇華よりもめづらしや、優曇華をば拜みて手折るといふなれば、それに譬ふるかたきなれば、拜みて斬れや斬れとて、二人が太刀を左衛門の尉に、當てしは引き引きては當て、七八度こそ當てにけれ。やゝありて時致、此の年月の思ひ唯一太刀にと思ひつる氣色あらはれたり。十郎これを見て、待て暫し、殿入りたる者を斬る

は、死人を斬るにおなじ、起さんものをとて、太刀の切先を祐經が胸もとに指し當て、いかに左衛門殿、晝見參に入りつる會我の者共參りたり、我等程の敵を持ちながら、なんとて打ち解け伏したまふぞ、起きよや左衛門殿と起されて、祐經もよかりけり、こゝろえたり、何程の事あるべきと、言ひも果てず起ささまに、枕元に立てたる太刀を取らんとする所を、やさしき敵のふるまひかな、起しは立てじといふまゝに、左手の肩より右手の脇の下、板敷までもとほれとこそは斬り付けられ。五郎も得たりやおうと罵りて、腰の上手を差し上げて、疊板敷斬り通し、下もちまでぞ打ち入りたる。道理なるかな、源氏重代友斬何者かたまるべき、當るに繼ぐところなし。我れ幼少より願ひしも是ぞかし、妄念拂へや時致、忘れよや五郎とて、心のゆくく三太刀づゝこそ斬りたりけれ。無慙なりし有様なり。

一二八 往藤内を討ちし事

かくて後に伏したる往藤内、廢惚れて、詮なき殿原の夜中の戲かな、過したまふな、人選したまふな、人人をば見知りたり、後日に争ふなとは言ひけれども、刀をだにも取らずして、高道にしてぞ逃

げたりける。十郎追つ懸けて、晝のことばに似ざるものかな、いづくまで逃ぐるぞ、餘すまじとて、左の肩より右の乳の下かけて、二つに斬つて押し退けたり。五郎走り寄り、左右の高股二つに斬りて押し退けたり。四十餘の男なりしが、時の間に四つになりてぞ失せにける。逃げは逃がすべかりしものを、かいふしては逃げずして、なまじひなることば言ひて四つになるこそ無慙なれ。五郎、往藤内が果を見て、一首取りあへず詠みたり。

馬はほえ牛はいなくさかささまに四十のをのこ四つになりけり

十郎聞きてよく仕りたり、一期詠じても、これ程こそ詠みさうらはんずれ、秀歌においては、時致集にも召されなん、思ふ本意をば送げぬ、今は憚ることなしと、高聲に言ひ散し、どつと笑ひて出でにけり。

一二九 祐經にとどめを刺す事

さても兄弟は、敵を心のまゝに討ちて、門より外に出でけるが、十郎言ひけるは、祐經にとどめを刺しけるか、とどめは敵討つての法なり、實檢の時、とどめの無きは、敵討ちたるに入らず、さらば

とどめを刺し候はんとて、五郎立ち歸り、刀を抜き取つて押へ、御邊の手より賜はつて候ふ刀ぞかし、只今返じぬぞ、たしかに受け取りたまへ、取らずと論じ給ふなとて、柄も拳も通れくと刺すほどに、餘りに繁く刺しければ、口と耳と一つになりけり。さてこそ後に人の申しけるは、宵に悪口せられしそのれたに、わざと口を裂かるゝとぞまうしける。幼少より敵を見んと箱根に祈請まうし、御前にて結經を見初むるのみならず、一腰の刀を待たり、今とどめを刺したる刀これなり。権現の御恵とて感じける。さすがに離れぬ一門の中、あはれとやおもひけん、我れ過去の宿業といひながら、一念の瞋恚により、敵味方とはへだたるなり。さんぎ懺悔の力により、六根の罪障を消滅し、因果の輪廻を只今盡し果てて、一念の菩提心あやまりたまはて、一つ蓮の縁となし給へ、阿彌陀佛と唱向して、館をこそは出でたりけれ。十郎は庭上に立ちて、五郎を待ち得て言ひけるは、我々名乗りて人々に知られん。尤もとて、大音聲にて罵けり。遠からん人は音にも聞け、近からん者は目にも見よ、伊豆の國の佳人、伊東の次郎祐親が孫、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致とて、兄弟の者共、君の館の前にて、親の敵一家の工藤左衛門の尉祐經を討ち取り罷り出づる、我と思はん人々は、討ち留め高名せよと言へども、晝の狩場かばに疲れければ音もせず。小柴垣のもとに跳り寄り、なほ聲を擧げて呼ばはりけ

れども、東西南北に音もせず。三浦の館には、兼ねてより知りたれば、わざと出づる者もなし。次の館に聞き付けて、榛澤・赤澤・梶原をはじめとして、宗徒の者共出でんとする所を、重忠聞き、あまりな騒ぎそ、一定曾我の人々が本意を遂ぐると覺えたり、いかに嬉しく思ふらん、心靜によくさせよ、さらぬだに若き者は、心騒ぎて仕損ずる事ありぬべし、靜まり候へとありければ、出づる者こそなかりけれ。兄弟の人々はしばし休らひ、敵を待てども無かりければ、十郎言ひけるは、いさや時致一先落ちて、今一度母に逢ひ奉り、思ふことを語りまうし、猶事延びば、髪を切り、いかならん野の末山の奥にも閉ぢ籠り、父の孝養をもせん、それかなはずば心靜かに念佛まうし、自害するまでといひければ、五郎聞き、あまりの憎さに音もせず。やゝありて、此の仰せこそ條々しかるべしとも覺えず候へ、弓矢取る者のならひには、かりそめにも一足も逃ぐるといふこと、口惜しきことにて候ふ、命の惜しき者こそ入道をもし山林にとぢこもり候はんずれ、幼少より思ひしことは遂ぐるなり、何事を思ひ殘して落ち候ふべき、母に對面のこと、科をかけ奉るべきためか、させる孝養報恩をこそおくらざらめ、科もなき母痛められ、子供の行方知らぬことあらじとて責め問はれ、禁獄死罪にも行はれば、我等がいたさずしてかなふまじ、惣なほに逃げかくれて、かしここより搦め出だされ、剩へ諸國の侍

共に、いくほどの命惜しみて、曾我者共が髻切りを食すと、沙汰せられんことははづかし、其の上一旦隠れ得たりといふとも、東は奥州外の濱、西は鎮西鬼界ヶ島、南は紀伊の地熊野山、北は越後の荒海までも、君の御息のおよばぬ所あるべからず、天に翔り地に入らざらん程は、一天四海のうち、鎌倉殿の御權威及ばざることなし、たゞ羅網の鳥、釣を合ひ魚のごとし、信實の仰とも強えず、時致におきては、向ふ敵あらば、太刀の目釘こらへん程は、命こそかぎりなれと申しければ、十郎聞きて、和殿が心見んとてこそ言ひたれ、祐成が心をもかれてより知りぬらん、一足も引き候ふまじきと語りひて、寄する敵を待ちかけたり。

三〇 十番斬の事

さる程に夜討の時、恐ろしさに聲も立てざりし二人の君共が、御所中に狼藉人ありて祐經も討たれたり、往藤内も討たれたると、聲々にこそ呼ばはりければ、鎧・甲・弓矢・太刀・馬・鞍よと、ひしめきあわつる程に、具足一領に二三人取り付きて、引き合ふ者もあり、繫馬に乗りながら、打ちあふる者もあり、それがしかれがしと罵る音は、たゞ六種震動にも劣らず。やゝありて武者 人出で來

て申しけるは、何者なればかゝる君の御前にて、かゝる狼藉をばいたすぞ、名乗れとぞ言ひける。十郎打ち向ひて、以前名乗りつれば定めて聞きつらん、斯くいふ者はいかなる者ぞ。これは武藏の國の住人大樂平馬之允と名乗る。祐成聞きて驚蕪は入る者を同じくせず、けう驚は翼を交へず、我等に逢ひてかやうの事は並分なり、是こそ曾我の者共よ、敵討つて出づるぞ、止めよといひて追つ駈けたり、馬之允ことばには似ずかいふつて、逃げにけるが、押付のはづれに胛骨かけてうちこまれ、太刀を杖につき引き退く。二番に是等が姉婿横山鸞愛甲の三郎と名乗つて押し寄せたり。五郎打ちむかひ言ひけるは、紫燕は柳樹の枝にたはぶれ、白鷺は蓼花のかけに遊ぶ、かやうの鳥類までも、おのれが友にこそ交はれ、御分違相手には不足なれども、人を選ぶべきにあらず、時致が伎倆の程を見よとて、紅にそまりたる友斬眞甲にさしかざし、電の如くに飛んでかゝる。叶はじと思ひけん、すこし痿むところを、進みかゝつて討ちければ、五郎が太刀を受け外し、弓手の小腕を打ち落されて引き退く。三番に駿河の國の住人、岡部の三郎、十郎に走り向ひて、左の手の中指二つ討ち落されて逃げけるが、御所の御番の内に走り入り、敵は二人ならては無く候ふ、いたくなさわぎ候ひそと言ひければ、神妙に申したり、いしくも見たりとて、高名の御意にぞ預りける。四番に遠江の國の住人、原の小次郎斬

られて引き退く。五番に御所の黒矢五と名乗りおし寄せ、十郎に追ひ立てられ、小柴斬られて引き退く。六番に伊勢の國の住人、加藤の彌太郎攻め來つて、五郎が太刀を受けはづし、二の腕斬り落されてひき退く。七番に駿河の國の住人、船越の八郎押し寄せ、十郎に高股斬られて引き退く。八番に信濃の國の住人、海野小太郎行氏と名乗りて、五郎に渡り合ひ、暫し戦ひけるが、膝を割れていぬぬに伏す。九番に伊豆の國の住人、宇田の小四郎押し寄せ、十郎に打ち合ひけるが、いかがしけん、首討ち落されて廿七歳にて失せにけり。十番に日向の國の住人、白杵の八郎押し寄せ、五郎に渡り合ひ、眞甲割られて失せにけり。此の次に、阿波の國の住人、安西の彌七郎と名乗つて、敵はいづくにあるぞやとて立ちけるが、十郎打ち向ひて、人々は優くも面も振らて討死したるは見つらん、愚人は銅をもつて鏡とす、君子は友をもつて鏡とす、引くなといひて討ち合ひけり。彌七もさる者なり、左右にや及ぶと言ひあへず飛んでかゝる。十郎足を踏み違ひ、側目にかけてちやと打つ、肩先より高紐のはづれへ、切先を打ち込まれ。引き退くとは見えしかど、それもその夜に死にけり。頃しも五月の廿八日の夜なりければ、暗さは暗し、降る雨は車軸のごとくなり。敵はいづくにあるぞやとて、走り廻るところを、小柴垣に立ち隠れて、出づるをちやうと斬りては蔭に引き籠り、向ふ者をばたと斬る。

斬られてひき退く者を、後陣に受け取りて、味方討するところもあり。二人の者共、呼ばはりけるは、武藏相模のはや者共はいかに、これも重代と思ふ太刀と刀の鐵の程をも見せよかし、敵は十人あり、二十人ありと、後日に沙汰するな、我等兄弟ばかりぞ、火を出せその明にて名乗り合はん、無下なる者共かなと呼ばはりければ、御厩の舍人、時武といふ者、傘に火を付けて投げ出す。これを見て館々より我れ劣らじと雜人の糞笠に火を付けて投げ出す。二千軒の館より、松明を出しければ、萬燈會のごとし、白晝にも似たり。彼等二人は素肌にて敵に逢はんと走りめぐる有様は、小鷹の鳥に逢ふがごとし。かゝる處に武藏の國の住人、新開の荒四郎と名乗りかけて、進み出でて申しけるは、敵は何十人もあれ、某一人にや越ゆべき、出で會へや對面せんと言ひたりける。十郎打ち向ひて、優しく閉ゆる者かな、大將に代はりてつかへる者は、必ず其の陣を破るとは、文選の詞なるをや、退くなと言ひて飛んでかゝる。言葉は主の恥を知らず、御免あれとて逃げけるを、十郎しげく追つ駈けたり。あまりに逃所なくして、小柴垣を破りて、たかばひにして逃げにけり。次に甲斐の國の住人、市川黨に、別當の次郎進み出でてまうしけるは、如何なる白痴なれば、君の御前にて斯る狼藉をば致すぞ、名のれ聞かんといふ。五郎申しけるは、事新しき男の間ひ様かな、會我の冠者原が、親の敵討ちて出づる

と幾度いふべきぞ、臆して耳が潰れたるか、親の敵は陣の口を嫌はず、さて斯様に申すは誰人ぞ聞かんと云ふ。これは甲斐の國の住人、市川黨の別當の大夫が次男、別當の次郎定光とぞ答へける。五郎聞きて、利殿は盗人よ、御坂片山つるはらに籠り居て、京鎌倉にたてまつる年貢御物のひやうじの少なきを、遺矢に射て追ひ落し、片山里の下種人のたてあはざるを夜討などにし、物取る様は知りたりとも、恥ある武士に寄り合ひ、晴のいくさせん事はいかでか知るべき、今時致に逢ひて、習へ、をしへんとて、をどり懸り打つ太刀に、高股斬られて引き退く。これらを始めとして、兄弟二人が手に懸けて五十餘人ぞ斬られける。手を負ふものは三百八十餘人なり。數々出づる松明も、一度に消えて元の闇にぞなりにける。人は多くありけれども、此の人々の氣色を見て、こゝやかしに群立つて、寄する者こそ無かりけれ。

一三一 祐成討死の事

や、しばらくありて、伊豆の國の住人に新田の四郎、十郎に打ち向ひ、いかに會我の十郎祐成か、むかひは誰ぞ。新田の四郎忠常よ。さては御分と祐成は正しき親類なり。その儀ならば互にうしるは

し見するなよ。左右にや及ぶ、今宵いまだ尋常なる敵に逢はず、いひがひなき人の郎黨の手にかゝらんと心に懸りつるに、御邊に逢ふこそ嬉しけれ、一家のしるしに同じくば、忠常が手にかけて、後日に勸賞に行はれ給はゞ、御邊の奉公と思ひたまへと言ひて打ち合ひける。十郎が太刀は少し寸延びければ、一の太刀は新田が小肘にあたり、次の太刀にて小鬚を斬られけり。されども忠常、風強の武士なれば、面もふらず、大音聲にて罵りけるは、伊豆の國の住人、新田の四郎忠常、生年廿七歳、國を出しより、命は君にたてまつり、名をば後代に止め、屍は富士の裾野にさらす、さりとも後は見すまじきぞ、御分も引くなと言ふまゝに、互に鎧をけづり合ひ、時を移して戦ひけるに、新田の四郎は新て手なり、十郎は背よりの疲武者、多くの敵にうちあひて、眩さがり力もよわり、太刀より傳ふ血のゝりに、手の内繁くまはりければ、太刀を平めて討ちければ、十郎が太刀鏢元より折れにけり。忠常勝に乗つて討つ程に、左の膝を斬られて、犬居になりて腰の刀を抜き、自害に及ばんとするところを、忠常太刀取り直し、右の肘のはづれを指し通す。忠常今はかうと思ひ、館をさして歸りけるを、十郎伏しながら、懸けたることばぞ無慙なる。や殿新田いづくへ行くぞ、情なし、同じくば首を取つて、上の見参に入れよ、親しき者の手にかゝらんは本意ぞかし、返せや殿忠常と、呼ばられて、げにもと

や思ひけん、すなはち立ち歸り、乳の間斬りておし伏せたる。祐成が最後の言葉ぞあはれなる。五郎はいづくにあるぞや、祐成こそ新田が手に懸り、空しくなるぞ、時致は未だ手負ひたるとも聞えず、いかにもして君の御前に参り、幼少よりの事ども、一々に申しひらきて死に候へ、死出の山にて待ち申すべきぞ、追つ付きたまへ南無阿彌陀佛と言ひも果てず、生年廿二歳にして、建久四年五月二十八日の夜半ばかりに、駿河の國富士の裾野の露と消えにけり。弓矢取る身の習、今に始めぬ事なれども、親のために命を軽くし、屍は路徑のちまたに捨つれども、名をば龍門の雲井にあぐる、あはれと言ふもおろかなり。五郎は兄が最後の言葉を聞きて、死骸なりとも今一目見んと思ひ、又忠常を討つべきとや思ひけん、太刀振り廻し、大勢の中を斬り分けはしり寄り、兄が死骸に轉び懸り、恨めしや時致をば誰に預け置き、いづくまで生きよとて、捨ては何處へおはするぞや、ながらへ果つべき憂き身にもあらず、連れてましませやとうち口説き、涙にむせびて伏したりけり。げにや同じ兄弟と言ひながら、たがひの深ければ、別の涙さぞ有らんと推し置られてあはれなり。こゝに又堀の藤次と名乗りて、武者一人出でて、五郎は何處へ行きたるぞや、兄の討たるを見捨て、落ちけるかや、未練なりとてたづねける。五郎此の詞を聞き、起き上り太刀取り直し、や殿藤次殿、兄の討たるを見捨

て、いづくへか落つべき、祐成は新田が手にかゝりぬ、時致をば吾殿が手にかけて首を取れ、惜しまぬ身ぞと言ひければ、藤次は五郎が太刀影を見て、かいふいて逃げにける。五郎追つ懸け、おのれはいづくまで逃ぐるぞとて追つ懸ければ、他所へにげてはかなはじと思ひけん、御前さして逃げにけり。五郎も續いて入りければ、親家幕をつかんで投げあげ、御侍所へ走り入る。五郎も幕をなげあげて、親家をつかまんくと思ひけるよそほひは、只天魔のごとく、雷の落ちかゝるかと思えける。

一三三 五郎召し捕らるゝ事

茲に五郎丸とて、御寮の召し仕るゝ童あり。もとは京の者なりしが、叡山に住して十六の年師匠の敵を討ち、在京かなはで東國に下り、一條の次郎忠頼を頼みたりしに、忠頼御敵とて討たれたまひて後、此の君にまゐりたりしが、爪強の荒馬乗の剛の者、七十五人が力を持ちけり。宵の程は、夜討といへども音もせず、御前近く祇候せしに、五郎が親家を追うて入るを見て、薄衣ひつかづき、幕のわきに立ちけり。五郎一目見たりけれども、館を出でしとき、女房に手ばしかくるなど、兄が言ひしこ

とぼありければ、太刀のむねにて通りさまに、一太刀當てゝ過ぎにける。五郎丸と知るならば、唯一太刀に失はれんと、危くこそ覺えけれ。時致も親家を手捕にせんと思ふ所を、五郎丸我が前をやり過し、續いてかゝる腕をくはへて取り、得たりやあうと抱きける。五郎は大力にいだかれながら、物ともせず、こはいかに女にては無かりけり、ものくしやといふ儘に、つゞいて内へぞ入りける。五郎丸かなはじとや思ひけん、敵をばかうこそ抱け、かやうにこそ抱けと、高聲なりければ、彼等が傍輩、相模の國の前司太郎丸走り寄り、逃すなとて取り付く。そののち御厩の小平次を始めとして、てがらの者共走り出でて、四五人取り付きけれども、五郎は物ともせず、二三人をば蹴倒し、大庭へをどり出でんとこゝろざしけるが、板敷こらへずして、五郎は足を踏みおとし、立たんとするところ、小平次起き上り、左右の足に取り付きければ、其の外の人々、餘すな漏すなとてかなぐりつく。これや文造のことばに、百足蟲は死に至れどもたはふれずとなり、心はたけく思へども多勢にかなはずして、むなしく搦め捕られけり。無慚なりし有様なり。君も此の山聞し召して、絲毛の御腹巻に御重代の紫切ぬき、出でさせたまひける所に、相模の國の佳人、大伴の左近の將監が嫡子に、一法師丸とて生年十三になりけるが、御前さらぬ者なるが、小ざかしく御察の御袖を扣へ牽り、日本國だにも

君はぬながら従へたまふに、これは僅なる事ぞかし、いかさま若き殿原の醉狂か、又は女の盃論か、宿論か、いづれにてか候はんに、御座ながら尋ね聞し召され候へと止め申しければ、實にもとや思し召しけん、止まり給ひけり。さしも出でさせ給ひて、五郎に見えさせ給ふものならば、危くぞ覺えける。後に彼の一法師いしくも申したりとて、御恩賞にぞ預りける。誠に古きことばを見るに、たいざうとうけいに遊ばず、君子はふんしに拘はらずといふ事、今こそ思ひ知られたれ。其の後小平次御前に参り、畏りてまうし上げけるは、曾我の五郎を搦め捕りて候ふ、十郎は討たれて候ふと申したりければ、神妙に申したり、五郎をば汝に預くるぞと仰せ下されける、あはれなりし次第なり。

一三三三 五郎御前へ召し出され聞し召し問はるゝ事

さても仰を承つて小平次罷り出でて、御厩の下部、總追國光五郎を預り、すでに御厩の柱に縛り付けて、其の夜は守り明しける。大將殿より尋ね聞し召さるべき事あり、曾我の五郎連れて参れとの御使ありければ、小平次繩取にて参りけるを、母方の叔父、伊豆の國の佳人、小川の三郎祐定まうしけるは、いかに小平次侍程の者に繩付けずとも、具して参れかし、山賊海賊のやからにあらざれば、逃

げ尖すべきにもあらず、事により人にこそよれ、むげに情なしと言ひければ、五郎聞きて、誰一言の
 情を残す者のなきに、御分の芳志のうれしさよ、さりながら御分、時致に親しき事皆人知れり、かや
 うの身になりて親類入るべからず、詮なき沙汰して人に聞かれ、方人したりと言はれ給ふな、人の上
 を善く言ふものは無きぞとよ、時致は盜強盜せざれば、ちすぢの繩は付くとも恥ならず、是は父のた
 めに誦み奉りし、法華經の紐よとて、事とも思はざる氣色して、御坪の内へぞ引き入れられける。其
 の上敵の爲に捕はるる者、時致一人にもかぎらず、股湯は夏臺に捕はれ、文王は菱里に捕はる、さら
 に恥辱に非ずとて、うち笑ひてぞ居たりける。あはれと言はぬ者ぞなき。五郎御前に参りければ、君
 御覽せられて、これが會我の五郎といふ者か。某が事候ふよとて立ち上り、繩取宙に引き立てければ、
 警護の者共、狼藉なりとて引き据ゑたり。その時相模の國の住人新開の荒四郎實光、伊豆の國の住人、
 鹿野の助宗持座敷を立つて、申し上ぐべきことあらば、急ぎまうし候へと言ふ。時致聞きて大眼を見
 出して、彼等をばたと睨みて、見苦しきぞ人々、御前遠くばさもありなん、近ければ直に申すべし、
 さやうなれば問はれて申す白狀に似たり、問はるるによつて申すまじき事まうすに非ず、面々骨折
 りに退き候へとて、冷笑ひてぞ居たりける。君聞し召され、神妙に申したり、おのゝ退き候へ、頼朝

直に聞くべしと仰せくだされけり。さて五郎居直り、顔振り上げて、高らかに申しけるは、兄にて候
 ふ十郎が最後に申し置きて候ふ、我等が父を補經に討たせ候ひしより以來、年月狹ひし心のうち、如
 何ばかりとか思し召されさうらふ、それにつき候ひては、ひとへせ君御上洛の時、酒匂の宿より附き
 奉り、結經が御供して候ひしを、泊々に徘徊し、便宜をうかがひ候ひしかどもかなはで京に上り、四
 條の町にて鐵よき太刀を買ひ取り、昨夕の夜半に御前にて、木意を遂げ候ひぬ、今は何をか思ひ殘し
 て、命惜しく候ふべき、御恩には今一時も、疾く頭を刎れられ候へとぞまうしける。彼は京へは上ら
 ざりしかども、箱根の別當に契約せしゆゑ、太刀の出所をも隠し、又は別當の罪科もやと思ひて、か
 やうにぞ申したりける。君聞し召され、此の太刀の出所、隠さん爲にこそ申すらん、更に別當の咎に
 あらず、先祖重代の太刀、箱根の御山に籠めし山、かれてより傳へ聞く、いかにもして取り出さばや
 と思ひしな、二神物になる間、力及ばざりつるに、只今頼朝が手に渡る事、ひとへに正八幡大菩薩のお
 んはからひと覺えたり、かやうの事無くては、如何にして、ふたゝび主になるべきとて、みづから御
 頂戴ありて、錦の袋に入れふかく納めたまふ、御重寶の其の一つなり。代々傳はりけるとかや。やゝ
 ありて君仰せられけるは、此の事會我の父母に知らせけるか。五郎承つて、日本の大將軍の仰せとも

存じ候はぬものかな、當代ならず、何れの世にか、繼子が悪事くはだてんとて、暇乞ひ候はんには、神妙なり急ぎ辭事して、我まどひ者になせとて、喜ぶ父や候ふべき、又母の慈悲は山野のけだもの、江河のうろくづまでも、子を思ふ志の深き事は、父には母すぐれたりとこそ申し候へ、いはんや人界に生を受けて、廿歳餘の子供が、命死なんとて母に知らせさうらはんに、いそぎ死にて物思はせよとて、悦び出したつる母や候ふべき、ごけいしやくとぞ申しける。さて親しき者共には如何に。身貧にして、世にある人々にかくと申し候はんには、只手を捧げて是を縛らせ、首を延べてこれを斬れとこそ申し候はんずれ、誰かは頼まれさうらふべき、愚なる御説かなとぞまうしける。君實にもとや思し召しけん、父母親類にいたる迄も仔細なし、又祐經は、伊豆より鎌倉へ繁く通ひしに、道にては、狙はざりつかか。さん候ふ、この四五ヶ年の間、足柄・箱根・湯本・國府津・酒匂・大磯・小磯・とがみが原・もろこし・相模川・懐鳥・やつまとが原・腰越・稻村・由井の濱・深澤邊に徘徊し、野路・山路・宿々泊々にてれらひしかども、敵のつるゝ時は四五十騎、連れざる時も二三十騎、我々は、連るゝ時は兄弟二人、連れざる時は只一人、思ひながらも空しく今まで延び候ひぬ。又祐經は敵なれば限りあり、何とて頼朝がそゝるなる侍共をば、多く斬りけるぞ。これこそ道理にて候へ、御所中に参りて、斯る

狼藉を仕つる程にては、千萬騎にて候ふとも、餘さじと存ずるところに、こさかしく、敵はいづくにあるぞと尋れ候ふ間、公には忠をつくし、忠には命をすつる習神妙に存じて、これにありと申す聲に驚きて、足の立處も知らず、逃げのびし間罪つくりと存じて、追うて斬り殺すに及ばず、戦ふばかりの側太刀、かたの如く當てたるまでにて候ふ、表傷はよも候はじ、只今召し出して御覽候へと申しければ、やがて御使して聞し召されけるに、申すごとく表傷は無かりけり。面目なうぞ聞えける。又往藤内を何とて討ちけるぞ。恐れ入つて候へども、年比の傍輩の討たれ候ふを、見捨てゝ逃ぐる不覺人や候ふべき、まことに健氣にふるまひ候ひつるものをや、人富みて故郷に歸らざるは、錦を著て夜行くが如しといふ、古き言葉をや知りたりけん、所領安堵の印、本國に下りしが、祐經にいとまごひとて道より歸りての討死、不便なりとぞ申しける。此の言葉により、神妙なり、これも頼朝が先途に立ちけるよとて、本領子孫において仔細なしと、重ねて御判下されけり。これも兄の十郎が館を出でし時、往藤内が妻子、さこそ勘かん、無慙なりと言ひし、ことばの末にぞまうしける。ひとへに時致がなさけによつて、所領安堵す、ありがたしとぞ感じける。やゝありて、頼朝をも、敵と思ひけるかと御尋ねありければ、五郎承つて、五郎承つて、五郎承つて、身に思の候ひし時は、木も葦もおそろしく、命も惜しく

存じ候ひしが、敵討つての後は、いかなる天覽^{てんらん}獲^{とく}なりとも存じ候ふ、まして其の外は、活きたる者とも思ひ候はず、されば千萬人の侍^{さむらい}よりも、君一人をこそ思ひ掛け奉りしかども、御果報^{ごくわう}めてたき御事にてわたらせ給へば、御連におかれて、かやうに罷りなりて候ふと申したりければ、君きこしめされて、敵討つての後、身をかろく思ふは道理^{ことわり}なり、頼朝をなにとて敵と思ひけるぞ。自業自得^{じごうじとく}果とは存じ候へども、伊東入道が謀叛^{むげん}により、我等が本領ながく絶えぬ、先祖の敵にては渡らせたまはずや、又は關策王の前にて、日本の大將軍、鎌倉殿を手に掛け奉りぬとまうさば、一の罪や赦さるべきと、随分窺ひ申しつれどもとまうす。さて五郎丸には如何にして抱れけるぞ。それは彼の童を女と見なし、何事か候はんと存じて、不慮に捕れて候ふ、斯様なるべしと存ずるものならば、只一太刀の勝負にて候はんずるものをとて、後悔益なし、これひとへに宿根の盡きぬるゆゑなり、げにや羅網の鳥は、高く飛ばざるを恨み、とんこうの魚は、飢を忍ばざるを歎くとは、ようらん^{ようらん}の言葉なるをや、今こそ思ひ知られたれ、君の御佩方の鐵のほどをも見奉り、時致が腐太刀の刃のほどをもためし候はんものをと、言葉を放ちてぞ申しける。君開し召され、猛將勇士も、運の盡きぬる上はと仰せられ、雙眼より御涙を流させ給ひて、これ開き候へ人々、日比は思はぬ事なれども、只今頼朝に捕はれて、當

座のかまへの言葉なり、かなはぬまでも通れんとこそ言ふべきに、露ほども命を惜しまぬ者かな、世にありなば思ひ止まることもありぬべし、餘の侍千萬人よりも、かやうの者をこそ一人なりとも召し使ひたけれ、無愆の者の心やな、惜しき武士かなとて、御袖を顔に當てさせ給ひければ、御前祇候の侍ども、心あるも無きも、皆涙流さぬは無かりけり。やゝありて君御涙をおさへさせたまひて、さて十郎が振舞ひを聞き召すに、いづれをわきて言ひがたし、誠に討たれたるやらんと仰せられければ、新田に御尋ね候へ、黒鞘巻に赤銅作の太刀、村千鳥の直垂ならば、誠に候ふとまうす。さらば實檢あるべしとて、新田の四郎を召されければ、黒鞘巻に赤銅作の折太刀、村千鳥の直垂に、頸を包みて童に持たせ、五郎が弓手のかたを間近く、頸を見せてぞ通りける。五郎は今まで思ふことなく高言して有りけるが、兄が頸を一目見て、魂膽を失ひ、涙に咽ふありさまは、盛りなる朝顔の、日蔭にしをるゝ如くにて、無愆といふもあまりあり。稍ありて申しけるは、羨しくも先立たまふものかな、同じ兄弟といひながら、幼少より親の敵に志深くして、一所にとこそ契りしに、祐成は昨夜夜半に討たれ給ふに、時致は心ならず、今迄ながらふる事の無念さよ、誰か此の世にながらへて候ふべき、死出の山にて待ち給へ、やがて追ひ付き奉り、三途の川を手と手を取り組みて渡り、閻魔王宮へは諸共にと

言ひも果てず、涙に咽びけり。袖にて顔をも押へたけれども、高手たてこ小手こてにいましめられければ、左手ひだりへ傾き、右手みぎへうつぶき、なほしも溢るゝ涙をば、膝ひざに顔を持たせつゝ、只さめんと泣き居たり。和田島山を始めとして、皆袖をぞ濡されける。斯るところに十郎が太刀を御侍おんざむらいに取り渡し、善きぞ悪しきぞと申し合ひける。中にも昨夜追つ立てられ、小柴垣破りて逃げたりし、新開しんかいの荒四郎實光進あらいしやう じつこう すすみみ出でて申しけるは、曾我の者共は敵討つて、高名たかみかはしたれども、太刀こそわるき太刀を持ちたれ、是程のえせ太刀えせ たいちを持ちて、君の御前おんまへにてかゝる大軍たいぐんしける不思議さよと言ひければ、時致聞きて、眼まなこを見出し荒四郎をはたと睨にらんで、和殿はいづくを見てえせ大刀とは申すぞ、只今御前おんまへにて申して無川の事なれども、男の悪き太刀持ちたるは恥はぢなる間申すなり、それこそや殿よく聞け、平家に聞えし新中納言しんちゆう なごんの太刀よ、屋島やしよの戦いくさにいかしがし給ひけん、船中せんちゆうに取り忘れたまひしを、曾我の太郎取つて、九郎判官くわん じやうはんへ参らせしを、義經よしつね、神妙しんぼうなり、さりながら、御分高名おんぶん たかみかして取りたる太刀なれば、汝に取らするとて賜はりたる太刀なり、奥州丸おくしゆう まるといふ太刀これなり、所成しよせいが元服げんぷくせし時、曾我殿のたびたるぞとよ、それに就きては思のまゝに敵かたきを討ち取りぬ、兄弟して斬り留きりどめむるもの、一二百人こそあるらん、是程こらへたる太刀を、いかでえせ太刀えせ たいちなるべき。實光じつこうなほも止まらで、既に太刀折れぬる上はと言

ひければ、五郎からくと打ち笑ひ、人の太刀悪しといふ人、定めてよき太刀は持ちぬらん、但しあ
のえせ太刀に追はれて、小柴垣破りて逃げしはいかに、御分おんぶんの善き太刀も心にくからずと言ひければ、
聞く人皆汗あせを流さぬはなかりけり。實光なまじひなる事を言ひだし、赤面してぞ立ちにける。これ
やさんし一言思慮いちごんしりよあるべきことにやとぞ申しける。

一三四 犬房が事

こゝに祐經が嫡子ちやくし犬房いぬぼうとて、九つになりける童わらわあり。御前おんまへさらぬ切者きりものにてぞ有りける。傍わらわにて父が
事をつくづく聞き、さめくと泣き居たりしが、思ひや兼ねけん走り懸り、五郎が顔を二つ三つ扇あふぎに
てぞ打ちたりける。時致打ち笑ひ、おのれは祐經が嫡子ちやくし犬房いぬぼうな、その年の程にてよくこそ思ひよりた
れ、打てや／＼打つべしく犬房よ、我々も幼少せうせうにして、汝が親に父を討たせぬ、年頃の思いか許ぞ
や、今更思ひ知られたり、まことにふりにし事を思へば、打つ身は痛まずして、よわる親の力を歎なげき
し志、五郎がいまに知れたたり、討たるゝをば痛いたまず、ぬしが心を思ひやるこそあはれなれ、珍めづしか
らぬ事なれども、果報くわんぱうほど勝劣しょうりやくあるものはなし、我々祐經を思ひかけて、此の二十餘年の春秋はるあきを送り

しに、汝はいみじき生れじやうかな、昨夕討ちたる親の敵を、只今心のまゝに討つことの羨しさよ、それにつきても前生の宿業こそつたなけれ、現在の果をもつて未來を知る事なれば、來世亦如何ならん、南無阿彌陀佛とぞ申しける。犬房はなほも打たんとよりけるを、いかにや退き候へと、細取の者共いひけれども退かさりけり。御寮御覽せられて、犬房退き候へ、なほもの問はんと仰せられければ、其の時退きにけり。是や禽鳥百を數ふると雖も一鶴に如かず、數世相連ると雖も一月に如かず、君の御言葉一つにてぞ退きにける。

一三五 五郎が斬らるゝ事

さて其の後君仰せられけるは、汝が申す所一々に聞き開きぬ、されば死罪を宥めて召し使ふべけれども、傍輩これを嫉み、自今以後狼藉絶ゆべからず、其の上祐經が親類多ければ、其の意趣のがれがたし、しかれば向後のために汝を誅すべし、怨をのこすべからず、母が事をぞ思ひおくらん、不便にあたるべし、心安く思ひ候へとて御硯召し寄せ、會我の別所二百餘町を、彼等兄弟が道善の爲に、頼朝一期母一期と、白筆に御判を下され、五郎に戴かせ、母が方へぞ送られける。げにや心のたけく情

のふかき事人に勝るゝにより、屍の上の御恩ありがたしと皆人感じける。これや文選の詞に、晉の文王は其の仇を親しみて諸侯をさとり、齊の桓公は其の仇を用ひて天下を匡すとは、今の御代に知られたり。五郎くはしく承りて、首を召されんにおいては遁るゝ所なし、暫もながらへ申さん事深きうれへと存すべし、母が事は辱く仰せ下され候へども、故郷を出てし日より一筋に思ひきり候ひぬ、御恩に一時も疾く首を召され候へ、兄が遅しと待ち候ふべし、急ぎ追ひ付き候はんとすゝみければ力なく御厩の小平次に仰せつけられ斬らるべかりしを、犬房が親の敵に候ふとて、ひらに申し受ければ渡されにけり。口惜しかりし次第なり。祐經が弟に伊豆次郎祐兼といふ者あり、五郎を請け取りて出でにけり。時致東西を見渡し、某が姿を見ん人々は、いかに烏滸がましく思ふらん、さりながら親のために乗つる命、天神地祇も納受し給ふべし、つけたる繩は孝行の善の綱ぞ、各よつて手をかけ結縁したまへと申しければ、實にもといはぬ人ぞなき。其の後五郎をばはますかにつれて、松が崎といふ處の岩間にひきすまきらんとす。時致みかへり申しけるは、構へてよく斬り候へ、人もこそ見るに、あしく斬り候はゞ、惡靈となつて七代までとるべしといひければ、祐兼聞きて、まことに斬り損じなば如何なる惡靈にもなるべしと思ひしより、膝振ひ太刀の打處も覺えざりける所に、筑紫のなかだと申

しけるは、御家人訴訟のことありて左衛門尉につきけるが、訴訟かなふべき頃祐經討たれければ、是等が所爲とや思ひけん、わざと太刀にては斬らて苦痛をさせん爲に、鈍刀にて掻音にぞしたりける。さしたる親類知音にあらざる者も、別ををしみ名残をかなしまずといふ事なし。しかるに勇士のいたつて猛きは、敵を破り利を碎き、軍の先を駈くるゆゑに、敵のために囚ると雖も、薬を感じ身を助け情をかくるは先規なり。傳へ聞く紀信が軍軍に乗りしも、武威を感じ、楚王將になさんといひしかども、自ら死を望み、はいこう軍を破り、片時も生きん事を悲しみて、戰場の石に腕を碎きて失せにき。よつて勇士敵のために命を暫くも全うせざるは、古今の例なり。しかれば五郎も背にやうせんと思ひしが、夜明けて死ぬること矢立の杉の一二の枝のいけれなり。

一三六 伊豆次郎が流されし事

さても悪事千里を走る習にて、伊豆次郎未練なりと鎌倉中に披露ありければ、秩父重忠御前にて此の事を聞き、曾我の五郎をば重忠給はつて、重代のかうひらにて誅し候ふべきを、不覚第一の伊豆次郎に下したまはつて、かはゆき次第と承り、口惜しく候ふとまうされければ、君聞し召し、さやうの

不覺人にてあるべくば、誰にても仰せ付けらるべきものをとて、伊豆次郎は御不審を被り、奥州外の濱へ流されしが、幾程なくて悪しき病をうけて、同年の九月に廿七歳にして失せにけり。これひとへに五郎が憤の報ふところによと、唇をかへさぬ者はなかりけり。時致は五月に斬られければ、祐兼は九月に失せにけり。不思議なりしためし、因果歴然とぞ見えける。

一三七 鬼王道三郎曾我へ歸りし事

茲にこの人々の郎等に、鬼王・道三郎とて二人の者あり。彼等は富士の裾野井山の館より、次第の形見を取り持ち、曾我の里へぞ急ぎける。されども惜みし名残なれば、心は後にぞ留りける。げにや幼少よりとり育てたてまつり、世にも出て給は、我々ならでは誰かはあるべきと、人も思ひ我もまた頼もしかりつるに、斯様になりゆき給ひしかば、慕ひあくがれしもかなはで、泣く／＼曾我へぞ歸りける。思のあまりに道のほとりに暫しやすらひ、富士野の方を願れば、松明多く走りめぐり、たゞ萬燈會のごとし。今こそ事いで來ぬると見えければ、我が君の御命いかゞ渡らせたまふらんと、こゝろもとなき限なし。只二人ましますれば、大勢にとり込められ、如何に隙なくましますらん、今は御身

も疲れ給ふらんと思へば、走り歸りて御最後を見奉らまほしきも、隔りぬればかなはずして、只泣くより外の事ぞなき。しばらくありて松明の數も次第にすくなく、火の光も薄くなり行けば、君の御命も斯くやと、火の光もなごり惜しく思ひければ、道の邊にたふれ伏し、聲も惜しまず泣き居たり。馬も性あるものなれば、人々の別をやをしみけん、富士野の空をかへりみて、二三度までぞ嘶えける。儲あるべきにあらざれば、遠近のたづきも知らぬ山中に、おぼつかなきは富士野なり。泣くく胸の口をひき、故郷へとは急げども、行きもやられぬ山路の、すゑも定かに見え分かず。こゝに人の使と覺しくて文持ちたる者、後より急ぎ來たる。道三郎袖をひかへて、今宵井山の筈には何事のありければ、松明の數の見えさうらひつると問ひければ、さればこそと知り給はずや、曾我の十郎五郎といふ人兄弟して、一族の工藤左衛門の尉殿を、親の敵とて討ち給ひぬ、あまつさへ御所の内まで斬り入りて、日本の侍達の斬られぬは候はず、手負死人二三百人もこそ候ふらん、されども兄の十郎は夜半に討死したまひぬ、弟の五郎殿は曉に及び生捕られたまひき、此の人々の振舞は、天覽鬼神の荒れたるにや、かゝる夥しき事こそさうらはざりつれ、かやうの事を大磯の虎御前の妹、木瀬川の龜鶴御前より、大磯へつげさせたまふ御使なりとて、走り通りけり。二人の者ども聞きて、仕損じ給ふべしと

は思はれども、一期の大事なれば、心もとなく思ひ牽りしに、何事なくて本意を遂げ給ひぬるよと、歎の中なげのよるこびにて、次第の形見かたみを面々に奉りけり。

一三八 同じく彼の者共が遁世の事

されば此の者共は、我が家にも歸らず、高野山たかのやまに尋ねのぼり、ともに誓切ちかきりりて、墨染すみぞめの衣の色に心をなし、ひとすぢにこの人々の、後世菩提ごせぼだいを弔ひけるぞありがたき。

一三九 曾我にての追善の事

さても母は、子供の返したる小袖こせを取り上げて、おのく顔に押し當てて、其の儘倒れ伏し、消え入り給ひにけり。女房達やうく介錯かいしやくし、藥など口にそそぎ、養生やうじやうしければ、わづかに目ばかり持ち上げける。せめての事に、文を開きて讀まんとすれども、目もくれ心もこゝろなられば、文字もさらに見え分かず。うらめしや妾をとばかり言ひて、胸に引き當て又打ち伏しぬ。やゝありて息のしたにて口説くはなきけるは、誠に、凡夫の身程はかなきものはなし、此の小袖を請ひて、永き世までの形見と思

ひて、折節こそあるに、二人連れて來たり、請ひけるものを知らずして、返せと言ひけん悔しさよ、五郎も限と思ひてや、このたび強く言ひけるぞや、幾程もなきものゆゑに不興して、年頃添はざりける悲しさよ、なほも心強く救さざりせば、一目も見ざらまし、久しく添はざりしに、めづらしくも頼もしくも覺えしものを、せめて三日とも打ち添はで名残をしきよ、なつかしかりつる面影を、いつの世にかはあひ見んとて、聲もなしまず泣き居たり。如何なる賤の男賤の女にいたるまで、涙を流さぬはなかりけり。二の宮の女房を始めとして、したしき人々は集りて泣き悲しむ事なのめならず。思ひのあまりに、母は十郎が居たりける所に倒れ入り、こゝにも住みしものをとばかりにて、憂かりし聞のかたはらに、書きたる筆のすさびを見れば、一切有爲法、如無限法養、如露亦如電、應作如是觀とぞ書きたりける。我が身を有りとも思はぬ口ずさび、見るに涙もといまらず。此の押板には古今萬葉を始めとして、源氏伊勢物語に至るまで、數の草紙を積み置きたれども、今より後の慰びには、誰かはこれを見るべきと、見るに思ぞまさりける。又をば二の宮の女房ぞ、泣く泣く讀み連れける。聞くにつけても、心は心ともおぼえず。人のならひ神や佛にまゐりては、命をながく福幸をこそ祈るに、此の者共は只あけくれ死に失せんとのみ申しければ、この度通れたりとも、終に添ひ果つまじきぞや、

それにつけても箱王を、年頃不興して添はざりし事のくやしきよ、それは草の蔭にても聞け、誠には不興せず、たとへば法師になさんとせしことの叶はぬに、不興と言ひしを次手なくして、何となく月日を重ねしばかりなり、小袖直垂をきせし事も、日頃に變らざりしを、二の宮の女房の著するやうにて取らせしを、誠と思ひて姿をば、つらき者にや思ひけん、よしなかくに今は歎きのたよりなり、うち添ひ馴る身なりせば、いよく名残も惜しかるべし、斯くて我が身は何かは、存へばてん憂き命、有るもあらぬためしかなと、悶えこがれける。曾我の太郎も幼き時より取り育て、わりなき事なれば、實子にも劣らず、心様またさかしかりしかば、はいきやうちくいていの思をなし、朝夕おるかならずりしかども、所領廣からざれば、一所を分くることもなし。その上御勘當の人々のすまなれば、清げならんも恐ありなどと、思ひしことも夢ぞかし、今更後悔益なしとぞなげきける。母は日の暮れ夜の明くるに従がひて、いよく思ぞ増りける。惜しからざりし憂き身なれども、彼等が行方もしやと思ふ故にこそ、つらき命も惜しかりつれ、今は淨土にて生れあひ、今一度見んとて、湯水を絶ちて伏し沈みければ、露の命も危くぞ見えし。親しき人々集りて、憂き世の習、御身ひとりの歎にあらず、さしも繁昌したまひし平家の公達も、一度に十人二十人目の前にて海中に沈み、弓箭にたづさはりた

まひし時の別ども、日数つもあり年月へだたりぬれば、さてのみこそ過ぎ候ひしか、今の世にも或は父母に後れ、或は夫妻に別れ、又は親子兄弟に離れ、歎く者のみこそ多くさうらへども、忽ち命を捨つるものなし、まことに御子のために御身を捨て給はんこと逆なる罪のふかき、いかばかりと思し召す、泣く涙は猛火となりて、子にかゝるとこそ聞きつれ、況して子の爲に、命を失ひたまはん事、罪業の程を知らず、如何にも身を全くして、後世菩提をとひたまへと、さまざまに申しければ、僅か湯水ばかりぞ聞き入れける。さてあるべきなられば、僧たちを請じ奉りて、正等正覺頓生菩提とぞ取り納めける。母の弔はるべき身の、さかさなる事に歎きかなしみける。げにや世の中の定めなき、涙の種とぞなりにける。箱根の別當も此の事を聞き、急ぎ會我に下り、諸共に歎きたまふ。箱王が出てし時の面影、愚老が涙の袖に止り、師弟親子のわかれ變るべきに非らずとて、さめんと泣きたまふ。その後は持佛堂に参り、彼の菩提を弔ひ給けり。七日々々四十九日まで怠たらず追善あり。まことに彌陀の誓願は、十悪五逆の大罪をも、一念十念の力を以つて、來迎引接したまふべき、他力の本願たのもしかりけり。此の人々は父のために、身を捨てける志なれば、罪にしてしかも罪にあらず、其の上在世の時も、仁義を亂さざりしかば、後の世までも惡道へは、ださいせられじと、頼もしくぞ覺えける。

一四〇 禪師法師が自害の事

さて此の人々の弟に、御房とて十八になる法師一人あり。故河津の三郎が、忌の中に生れたる子なり。母思のあまりに棄てんとせしを、伯父伊東の九郎養ひて、越後の國九上と云ふ山寺に登せ、伊東の禪師とぞ言ける。九郎平家へ参りて後親しきにより、源義信が子と號して、折節武藏の國に在りけるを、頼朝聞し召し、義信に仰せつけて召されければ、力無く、家の子郎黨數十人下し、こと、不便なりし次第なり。おほかた同じ兄弟とは申しながら、乳の中より他人にやしなはれ、しかも出家の身なり、これも唯普通の儀なりせば、彼等まで御尋有まじきを、兄共の世に越え、名を萬天にあげし故ぞかし。義信の使は、本坊にきたりて斯様の次第を言ふ。禪師法師聞きて、心憂や、弓矢取の子が、我が家を捨てて他の親につく事は、ゆめくあるまじき事なり、かやうの罪過は、其の源を正されけるを、おなじ死する命、兄弟三人一つ枕に討死せば、いか人が目もうれしからまし、今更後悔すれどもかなはず、佛前にまゐりて、御經ひらき讀まんすれども、文字も見えざりければ、巻きをさめ、

珠數さら／＼と押し揉み、南無平等大會、一乘妙典、願はくは、法華讀誦の功力に依り、刹那の妄執を消滅し、安樂世界に迎へ取り給へと祈請して、劍を抜き弓手の脇につきたて、右手へ引き廻さんとするところを、同宿はやく見付けて、これは如何にと取り付き押へければ、退き候へ人手にかゝらんよ、清き自害をして見せ申さん、一つは同朋達の思し召さるゝ所もあり、空しく鎌倉へ捕られんこと、寺中坊中の名折なり、放したまへと怒りけれども、大勢なれば力及ばず、其の上いよ／＼よわりはてにけり。誠に心ならず、人あまたにて働かさず、自害なかばにぞしたりける。無念といふも餘あり。御使は庭上に充満して責めければ、力及ばず、上意もだし雖くして渡されにけり。口惜しかりし次第なり。御使請け取り輿に乗せて、鎌倉へこそ上りけれ。君聞し召されて、御前に召されければ、かゝれて参りけり。君御覽せられて、吾僧は河津が子かと御尋ありければ、禪師坊前後も知らざりけるが、君の仰せを聞き、兩の手を押し動かさし、起き上らんとこゝろざしけれどもかなはて、頭を持ち上げ、さん候ふ、伊東がためには孫候ふとまうす。さて兄共が敵討ちけるをば知らせざりけるか。恐ながら將軍の仰せとも存じ候はず、一腹一生の兄共が、親の敵討ち候ふとて知らせ候はん、たとひ出家にて候ふとも、同意せぬ畜生や候ふべき、御推量も候へとぞ申し上げたりける。君聞し召し、汝が眼ざ

しを見るに、頼朝に意趣ありと見えたり、事を探ねんために召しつるに、粗忽の自害所存の外なり。粗忽とはいかでか承り候ふ、既に御使給はつて、召し捕れとの御説を承つて、其の用意仕らぬことや候ふべき、あはれ兄共が知らせてだに候はゞ、二人の者共をば祐經に押し向けて、愚僧は一人にて候ふ共、君を一太刀伺ひ奉りて、後世の訴に仕るべきものをとて、御前を覗み、ことばを放ちてぞ申しける。君聞し召して、頼朝には何の意趣かありけるぞ。我等が先祖のかたき、又は兄共の敵にては候はずや、これにつきても果報の勝劣程、憂きものは候はず、唯御威勢に押されて、かやうに罷り成つて候ふ、恐れながら身が身にて候はゞ、源平雨氏の戦に、いづれ甲乙候ふべきとまうしければ、君は暫く物をも仰せられず、やゝありて猶も心を見んと思し召しけん、其の手にも生きてんや、さも思はゞ、助くべしと仰せ下されければ、禪師承つて、から／＼と打ち笑ひ、よく／＼人とも思し召され候はずや、御助けある程ならば、いかで是迄召さるべき、若しさもとやまうさんを、聞し召されん爲か、正なや人によりてこそ、さやうの御言葉は候ふべけれ、口惜しき仰せかなとぞまうしける。御察聞し召し、此の法師も兄共には劣らざりけり、助け置きなば、又大事を起すべき者なり、よくぞ召し寄せたりけると思し召しける。禪師重ねてまうしけるは、とても助かるまじき身、刹那のながらへも

苦しく候へと、顔にまうしければ、生年十八歳にして、終に斬られにけり。無慚なりし次等なり。君此の者の氣色を御覽じて、剛なる者の孫は剛なり、あはれ彼等に世の常の恩をあたへて召し仕はじ、思ひ止まる事もありなまし、弓矢取る者は、誰劣るべきにはあらねども、かほどの勇士天下にあらじと、仰せもあへず御涙を流させたまひしかば、御前伺候の侍共も、袖を濡さぬは無かりけり。

一四一 京の小次郎が死する事

爰にこの人々に語らばれ、同意せざりし一腹の兄京の小次郎も、同じき八月に、鎌倉殿の御一門、相模の守の侍に、由良の三郎が謀叛起して出てけるを、止めんとて、由井の濱にて大事の傷を蒙り、曾我に歸り、五日を経ずして死にけり。おなじくは五月に、兄弟どもと一所に死にたらば、如何がよかるべきとぞ申し合ひける。

一四二 三浦の與一が出家の事

三浦の與一も與せざりしが、いくほどなくして御勘當を蒙り、出家してけり。人は只義と信との道

をば、正しくすべきことをや。

一四三 虎會我へ來りし事

そもく建久四年なが月上旬の頃なるに、世のうきを思ふに、つながぬ月日も移りきて、昨日今日とはおもへども、憂き夏も過ぎ、秋もやう／＼たちぬれば、彼岸をかけ、しやうりんの霜にとふ、貞女いづくにかある、くわんしよ衣をうちでいれうしん未だかへらざる所に、せんき尼一人、濃き墨染の衣に、同じ色の袈裟をかけて、蘆毛なる馬に具鞍おきて乗りし人出できたる。何者ぞと見れば、十郎が常に通ひし大磯の虎なり。彼等が母の許に行き、間近きところに立ち入り使をして言ひけるは、此の人々の百ヶ日の孝養、大磯にてもかたの如く營むべげねども、箱根の御山にてあるべしと承り候へば、此の御佛事をも聽聞申し、我が身の營をもそのついでにして、二つの諷誦をも捧げばやと思ひ、参りてさうらうと言ひければ、母聞きて、嬉しくも思ひよりおはしますもの哉、十郎ありし方へ入らせ給へ、やかて見参に入るべしと、荒れたるすみかの柵をあけて呼び入れにけり。虎は十郎が住所へ立ち入り見れば、いつしか庭の通路に草繁り、跡ふみつくる人もなし。塵のみ積る床のうへ、打ち拂

ひたる氣色も見えず、いまはのわかれの曉まで、見なれし所なれば、變る事はなけれども、其の主はなかりけり。思ひしより過ぎこしかたのゆかしく、我が身は元の身なれども、心は有りし心ならず、月やあらぬ春や昔のかこちぐさ、深き名残の盡きせれば、泣くより外のことぞなき。まるび入りたる其の儘にて、暫し起きも上らざりけり。枕も袖も浮くばかり、立ちそふ物は面影の、それとばかりの情にて、涙もさらに止らず。や、暫く有りて、母出で會ひけり。虎を一目見しより、何とも物をば言はで、袖を顔に押し當て、さめくと泣きけり。虎も母を見て、有りし容顏ののこりとゞまる心地して、うちかたぶき聲も惜しまず泣き居たり。夫のなげき子のわかれ、さこそは悲しかりけめと、推し量られてあはれなり。母涙をおさへて言ひけるは、かくあるべしと思ひなば、十郎が有りし時、恥しながら見奉るべかりしものを、身の貧なるにより、親しむべきにも疎く、かたらふべきにもさもあらで、よろづ思ふやうにも候はて、打ち過ぎしことのくやしきよ、十郎淺からず思ひたてまつりし事なれば、唯十郎に向ふ心地して、なつかしく思ふと泣くく語りければ、虎もまた身の數ならぬにより、御見參申さずとて、これも涙を流しけり。形見とて残し置かれし馬鞍、見るたびごとに目もくれ、佛の御名を唱ふる際となりさうらへば、故人の御爲もしかるべからず、此の度の御佛事の御布施に思ひ

定めて候ふと、言ひもはてず打ち傾きけり。仰せのごとく、形見はよしなき物にて、これらが狩場より、返したる小袖を見る度ごとに、心みだれ候ふぞや、是も此の度の御布施に思ひむけて候ふ、御身は十郎が事ばかりこそ歎き給へ、わらは程罪深きものは候はじ、河津殿におくれたりし時、一日片時の命もながらへ難かりしに、つれなき身のながらへ、百日のうちに數多の子におくれたり、いかばかりとか思し召す、ことに彼等二人は身をばなきて、左右の膝にすゑ育て、父の形見と思へば、愛き時も彼等にこそは慰みしか、今より後は誰を見、なにに心の慰むべき、箱玉は法師にならざりしを、かりそめに不興と言ひしそのまゝ、許せと言ふ人もなし、身の貧なるにより何となく打ち過ぎ、月日を送り、年頃添はざりしこと、今更くやしき候ふぞとよ、打ち出でし時、兄が連れて來り、限と思ひてや、許せと申せしに、さらばと言ひし言の葉を、うれし氣なりし容顏の、あらはれたりし無慚さよ、親ならず子ならずば、老いたる妾がことばの末、誰かは重く思ふべきと、頼もしく思ひて、つくくと凝視ししに、盃とりあげかたぶく程涙浮びて候ひしを、不興を許すうれしさの、涙と思ひて候へば、斯様に成るべきとて、かぎりの涙にて候ひけるを、凡夫の悲しさは、夢にも知らず、なつかしかりける容顏、何しに年月不興しけん、過ぎにし方までくやしきに、せめて三日打ち添はで、歸れとばか

りのあらましを、いかにあはれに思ひけん、いつの世にか相見て憂きを語りてましとて、又打ち伏して泣きけり。虎も涙に咽びつつ、暫しは物をも言はざりけり。互の心の内、さこそと思ひやられたり。これなる御経は、彼等が最期に、富士野よりも送りたる文の裏に、書き奉りて候ふ、この文を讀まんとすれば、文字も見えず、近く寄りて讀みたまへ、聞き候はんとして差し出す。十郎が文と聞けばなつかしくて、讀まんとすれば目もくれ、いづれをそれとも見え分かず、胸にあてゝ泣くばかりにてぞ有りける。流を立つるならひ、かほどの志あるべしとは思はざりしを、優しくも見ゆるなりけりと、思ふに涙ぞまさりける。今宵はこれに止まりて、心しづかに物語まうすべきが、箱根への用意させ候ひて、曉出て候ふべし、聞き給ひぬるや、これらが孝養せよとて、君よりは所領たまはり候ふ、世には敵討つ者こそ、多く候ふなれども、心さま人に勝るゝにより、かやうの御恩に預り候ふ、いかに言ふ甲斐なくとも、彼等が安穩ならんこそ嬉しくもとて、これや昔上東門院の御時、和泉式部が、娘小式部の内侍におかれて、悲しみけるに、君あはれと思し召して、母が心を慰めんと思し召し、御衣を下されしかば、和泉式部、

もろともに昔の下にも朽ちずして埋もれぬ名を聞くぞかなしき

かやうに詠みたりしことまで、思ひ知られて忝くおぼえ候ふぞや、それにつき候ひては、此の度の佛事心のおよぶ程督むべきにて候ふ、此の邊にはさりぬべき導師も候はれば、別當を導師に定めまゐりて候ふ、五郎が事忘れず御歎き候へば、一入懇なるべし、曉は伴ひ奉るべしとて歸りにけり。虎は母が後姿を見送り、十郎が装思ひ出でられて、是も名残は惜しかりけり。さらぬだに、秋の夕はさびしきに、獨伏屋の軒の月、涙に曇るをりからや、折知顔の鹿の聲、枕によわる蟋蟀、軒端の萩を吹く風に、古郷思ひ知られつゝ、時しもながき夜もすがら、明しかれたる思寐の、逢ふ夢だにもなければや、かたしく圍の枕におき添ふ露の重なれば、現の床も浮くばかり、あけがたの雁の、ともを語り鳴くこゝも、羨しくぞ思ひやる。よその砦を聞くからに、身にしむ風のいとしく、鐘閉く空に明けにけり。

一四四 母虎を具して箱根へ上りし事

荒れぬる宿とは思へども、枕ならべし陸語の、出てぬる後の別路は、今もうち添ふ心地して、起きもせず寝もいで物を思ひわたるところに、馬に鞍置きひつたつる。使は來たり木幡山、君を思へば心から、うはの空にやこもらん。母も立ち出でて、急ぐといへばうち出でぬ、おのづからなる道のは

とり、我が方遠くなり行けば、そのことも知らぬ毬子川、蹴上げて波や渡るらん、湯坂の峠を上るにも、別れし人も此の道を、斯くこそ通ひ馴れしと、思ひやらるし梓弓、矢立の杉を見あげつゝ、其の人々の射ける矢も、此の木の枝にあるらんと、梢の風もなつかしく、山路はるく行く程に、箱根の坊に着きにけり。やがて別當出て逢ひたまひて、さても御歎の口敷の、あはれにて候ふと仰せられければ、この人々も佛事の本意をまうされけり。別當虎を見給ひて、あれはいづくよりの客人にやと問ひければ、母ありのまゝにかたり奉る。別當ありがたき志とて、墨染の袖をぬらしたまふ。稍ありて別當、涙をとどめて仰せられけるは、法師がおもひとて、かたがたに劣りたてまつらず、さかりなる子を先に立つる親、わかうして夫におくる妻、よのつれ多しとまうせども、師に先立つ弟子はまれなり、それも先規なきにあらず、とほく震且を思へば、顔回は貫首の弟子にて、才智並ぶ人なかりしかども、廿五歳にて師にさきたら給ふ、我が朝の慈覺は、大師の御弟子なりしが、師の天臺大師に先立ち奉る、西方院の座主印賢僧正は良賢大徳におくれ給ふ、斯様のことを思ひ出せば、愚僧一人が歎にあらず、げに〜賊劫を經ても、相見ん事あるまじき別の道、歎きたまふも理なり、歎くべし〜とて、御涙をばら〜と流し給ふ。思へば誰もおとるべきにはあらねども、大磯の客人の御志こそ誠にありがた

くこそ候へ、あひ構へて、ふかく歎きたまふべからず、これを實の善知識として、他念なく菩提心を起し給へ、一念の隨喜だにも莫大にて候ふぞかし、かやうに思ひきり、誠の道に入りたまひ候はゞ、餘念なくて行し給ひ候へよ、仰も六年仙人に歸依し行じてこそ、法華をば授かりたまひし、かまへて惡念を捨てたまふべし、人々を討ちける人を、怨めしと思ひたまはゞ、瞋恚の妄執となりて、輪廻の劫盡くべからず、あながち手を下して殺し、行きて盜まざれども、思へば其の科を犯すにて候ふぞ、構へて〜殺生を心にのぞき給ふべし、されば第一の戒にて候ふぞ、女は殊に執情深きによつて、三途の業盡きざらふぞや、あひかまへて〜と、細やかにこそをしへられけれ。

一四五 鬼の子捕らるゝ事

昔天竺に、鬼子母といふ鬼あり、大阿修羅王が妻なり。五百人の子を持ち、これを養はんとて、もの命を断つこと、恒河沙のごとし。殊に親の愛する子を好みて、捕り食ふ罪つくしがたし。佛これを悲しみ思し召し、いかゞして此の殺生を止めんとて、智慧第一の迦葉尊者に告げたまふ。迦葉佛にまうさせ給ひけるは、彼が五百人持ちて候ふ子の中に、殊に寵愛の子を御隠しさうらひて、御覽せら

れ候へと御申しありければ、然るべしとて、五百人の乙子おとこをとり、御鉢みぼちの下に隠したまふ。父母の鬼おにこれを尋ねけり。神通自在じんつうざいざいのものなりければ、上は非想非々ひまうひ想天六欲きやうてんろくよくの雲の上、下は九泉きゅうせん入海にゅうかい龍宮りゆうきゆう奈落ならくの底までも、くもりなく尋ねけれどもなかりけり。鬼共力を失ひ、大地たいちに伏しまるび、泣き悲しみけるぞおろかなる。おもひの餘あまに佛ほとけにまゐり申しけるは、我れ五百人の子を持ちてさうらふ、其の中にも乙子おとここそ殊ふたに不便ふびんに候ひしを、ものに捕とられて失ひ候ひぬ、あまりに悲しく候ひて、到らぬところもなく尋ねて候へども、我等が神通じんつうにては尋ね出すべしとも覺えず候ふ、しかるべくは御慈悲おんじいをもつて救へさせたまふべしとて、黄なる涙を流しけり。其の時佛ほとけのたまはく、さて子を失ひて尋ぬるは悲しきものか。まうすにや及び候はず、これだにもいでき候はゞ、我等夫婦ふうふはいかになり候ふとも苦しからず、餘あまにかはゆく候ふと申しければ、さやうに子は悲しく無慚むざんなる者ぞとよ、汝五百人の子を養はんがために、もの命いのちを殺すこと、いかばかりとか思ふ、その殺さるゝものの中に、親もあり子もあり、兄弟あに親類しんるいいかほどの歎なげとか思ふ、思ひ知れりや、汝只今一人失ひてだにも、斯様に悲しむにや、まして多くの人いかゞと示したまひければ、鬼共頭おにどもをうなだれて、固縛かたはくして何候なにしけり。いかに汝等、なほしものゝいのちをや斷たつべき、とどまるならば、在所ところ知らせんと仰せられければ、鬼

大きに喜び、今より後は更に殺生ころしやうつかまつるまじ、失ひし子の在所ところ救へ給へとたいはう申しけり。さらば堅く殺生をとめよと約束やくそくありければ、鬼重れて申すやう、我等肉食を絶たしては、身命しんめい助かりがたし、御慈悲おんじいの方便はんべんにあづからんと申す、佛御思案おんしあんありて、さらば一切衆生いっさいしゆじやうのもちゐる飯の上を、少しさばをとり汝に與ふべし、それにて命をつぎ候へと佛勅ぶつごふありければ、鬼うけたまはり、我等は悪業あくごふ煩惱ぼんごにて身をまるめたり、たとひ佛勅のごとく、頂戴ちやうたい申すといふとも、肉食を止めては命あらじと申しければ、さらば一口の飯に、人の肉をすり塗りて與ふべしと、御約束おんやくそくありけり。さればにや、今に至りて、さばとて飯いひのうへを少し取り、掌てのひらにあてゝおく事は、此の謂いはにてぞありける。かやうに堅く誓約ちやくやくありて、御鉢みぼちの下より子鬼を取り出したまひけり。その時鬼申しけるは、我等神通じんつうを得たりと思へども、佛の方便はんべんには及びがたし、まして後世ごせこそ恐ろしけれとて、即ち御弟子おんでしとなり佛果ぶつぐわを得るとかや、あまつさへ法華守神ほつげしゆじんとなり、法華經ほつげきやうを擁護ようごせんと誓ひたまふ。そもく此の鬼子母おにこもは形世かたちよに超えければ、帝釋たいしやくこれを奪とひとり給ひぬ。阿修羅王あしゆらわう大きに怒り、嗔しんの猛火みやうかをはなち、既に須彌しゆみの半分まで攻め上り、たゞかふ事恒河沙ごうがしゃを経るとも盡つくくことなし。其の時帝釋たいしやく、せんばらだうにたて籠かごり、仁王經にわうきやうを講じたまひつゝ、四しゆ五わうの印いんを結び給ふ。時に虚空こくうより磐石雨ばんせきぐのごとくに降り下

り、修羅の大敵を粉灰に打ち砕く。されども業因盡きざれば、復よみがへり、大苦を受けたりと傳へたり。しかれども、さしもは佛弟子となりしかば、苦惱をはなるゝのみならず、法華の功德あり。斯様に鬼神だにも隨喜すれば、かくの如くの佛果の縁ありとかや。

一四六 箱根にて佛事の事

斯くて別當は、彼の者共の佛事と行はんとしたまふ其の隙に、虎にいよく教化したまふは、たまく人身を受け、このたび淨土をねがはずば、また三途にかへるべし、祈成を善智識と思ひ、淨土をねがはんは何の疑か候ふべき、既にかやうの法身となりたまへば、他の爲、未來永々ありがたき御事なり、法師とて御導師になるべきにあらず、只心をもつて師とする時は、いかでか往生の素懐むなしからん、また五郎は寵愛なじみにて、御思どもに劣らねば、ひとしほ弔ひ奉るべし、誰かある、僧達を請じ申せとて、持佛堂の莊嚴せよ、客殿の塵とれと、さまざま下知したまひけり。虎は別當の教化を聴き、身ながら嬉しくぞおもひける。其の後數の僧達あつまり給ふ。御經多しといへども、殊に勝れたる一乘妙典八卷か、同音に讀誦したまふ。五十展轉の功力だにもありがたし、誦持讀誦の結

縁たのもしかりけり。御經やうく過ぎしかば、別當高座にのぼり、彼等が追善の鉦打ち鳴し、施主のこゝろざしを量りたまへば、先づ御涙にむせびつゝ、説法の御聲も出したまはず。稍あつて別當涙をおさへ、花房を捧げ、それ生死の道は異にして、音信をいづれの處にか通せん、分段さかひを隔つ、拜勸をいつの時にかけせん、二十餘年の夢、曉の月と空にかくれぬ。千萬端のうれへ、夕の嵐ひとり吟じて、雲となり雨となる、哀憐の涙かわくことなし、あしたを迎へゆふべを送りて、懷舊の勝絶えなんとす、所作いまだやまさるに、百日の忌景既に満てり、悲の至りてなほ悲しきは、老いて子に後れ、恨のことにうらめしきは、盛にして夫におくる程の愁なし、老少不定を知ると雖も、なほ前後の相違に迷ふこと、歎けどもかなはず、惜しめどもしるしなし、されば佛も愛別離苦と説きたまふ、一生は夢のごとし、誰か百年の齡をたもたん、萬事は皆むなし、いづれか常住の思をなさん、命は水の上の泡のごとし、魂は籠の中の鳥、開くを待ちて去るにおなじ、消ゆるものはふたゝび見えず、去るものは重ねて來らず、恨めしきかなや、釋迦大師のおんごんの教化を忘れ、かなしきかなや、闍闍法王の呵責のごとばを聴けば、名利は身を助くと雖も、未だ北邙の屍を養はず、恩愛の心をなやませども、誰か黄泉の責をまぬかれん、これに因つて馳走す、所得いくばくの利ぞや、これが爲に追隨す、

所作しよさくたさいなり、しばらく目を塞ふさぎて往時むかしを思ふに、舊友きゆうゆう皆空し、指を折りて、こうしんをかぞふれば、親疎しんそおほく隠れぬ、時移り事去りて、今何ぞ渺茫べうぼうたらんや、人止りて我れ逝いき、誰かまた残りやせん、三果さんか無庵むあん猶如火宅にやうわたくと見れば、王宮わうきゆうもこれ夢なり、天子てんしといふもしくの身なり、いはんや下劣げらつせん貧賤ひんけんのともがら、などか其の罪輕つみかろかるべき、しにくるしみをまし、業ごにしたがつて悲を添そふべし、思ひさたらぬぞおろかなる、まさに今無客こんかく塵ちんふかくして、竹間ちくかんいくばくの干卷かんまきぞ、昔瀧たに巖いわしづかにして、松風しょうふうたゞ一聲いっせい、苑中えんちゆう花月かげつ相傳さうでんふるにあるじを失ふ、七月半しちがつはんの盂蘭盆うらんぼんの尊靈そんりやう誰にかあらんと、泣くく當座たうざにぞ書きける。まことに理ことわりきはまりけり。されば親の子を思ふ志のふかき事は、父の恩を須彌しゆみにたとへ、母の恩を大海たいかいにおなじといへり。我れ一切いっせつの間ま既すでくとも、父母の恩盡じんくることなしと見えたり。胎内たいないにやどり、身を苦しめ心をつくし、月を重ね日を送り、生るゝ時は、桑はの弓ゆみ蓬よもぎの矢をもつて、天地四方を射、身體しんたい髮膚はつぷを父母にうけ、あへて毀こひ破やぶらざるを孝のはじめとす、襁褓ひょうほうの囊ふくろに包まれしより今に至るまで、晝夜ちゆうやにやすきことなし、人の親のならひ、我が身の衰へるをば知らずして、子の成人せいじんを願ねがひしぞかし、此の恩を捨て、いまだ盛さかりにも満ちずして、母に先立ちぬ、されば孝經けうきやうにいはいく、君は尊そんくして親しんしからず、母は親しんしくして尊そんからず、尊親そんしんともに是を兼ねたるは、父ひとりなりと雖も、

四の恩の中には二しんなれば、母の歎なげも切せつなれども、あたるところの恥、父の敵に身を捨て、おのれの命を失ふ、人の親の子をおもふ闇やみにまよふ道、思なる子もいとほしく、片輪かたわなるも悲しきに、此の人々は弓馬きゆうばの家に生れ、武略ぶりやくともにかしこし、後代ごたいにとどむ事、遠きも近きも知らぬ人なし、同じ兄弟ていだいといへども、仲なの悪わるしきもあるぞかし、此の殿原とのんは幼少ちゆうせう竹馬ちくばの昔より、馴れむつぶること類たぐひなし、淨藏じやうざう淨眼じやうげんのいにしへにも恥ぢず、早離はやり速離そくりの昔にも似たり、遂に富士の裾野すそにして、おなじ草葉くさばの露つゆと消えたまへり、彼の一條の攝政しやうてい、謙徳けんとく公こうの二人の御子ごし、前の少將せうしやう後の少將せうしやうとておはしける、あしたゆふべに亡なせたまへり。かゝるためしもあるれば、生死しやうじ無常むじやうのことわり、はじめて驚おどくべきにあらず、今開眼かいげん供養くやうの御經ごきやう、人々の手跡てのあとのうらなり、かやうに書き置きしを、餘所よそにて見るだにも悲しきに、まして御身ごみにあて、御心のうちさぞ思し召めすらめ、それは親子の別わかれのこと、兄弟ていだいの契ちぎりのわりなきを一言述べて候ふ、又夫またに別わかるゝ歎なげ、今ひとしほ色深いろこき事なり、虚弓こ止まりて圍こに寄せ立つ、上弦じやうげんの月空げつくうにかくれぬ、三年のなじみたちまち盡じんき、こしん床ゆかに上りて、庾氏いしが古ふるにあらねども、數行すかうの涙袂なみだをうるほすらん、芝蘭しせんのほひ、空薫そらたとぞなりにける。よひあかつきの鐘かねの聲こゑ、枕まくらを並べし程ほどには似にず、起居きよに見れば、なれこし人はよもそはじ。山の端は出づる月影げつえいを、心苦しく待ちえても、見し面影おもかげには

異ならず、是ぞ慰みたまふ事あらじ。まこと夫婦の別しのびがたけれども、昔も今も力におよばざる道なれば、思ひなぐさみ給ふべし。彼の唐の玄宗の楊貴妃も、わづかに副を蓬萊宮の浪に傳ふらん。穆公の弄玉を重んぜしも、いたづらに鳳凰臺の月によす。彼を思ひ是を思ふにつけても、昔を今になぞらへて、一佛淨土の縁を結び、願はくは九品往生ののぞみを遂げて、七世の父母、六親眷屬成佛と、廻向の鉦打ち鳴し、別當高座を下りたまふとて、

さだめなき憂き世といと思ひしにとはるべき身のとふにつけても

と詠じ給ひければ、聽聞の貴賤あはれを催し、袖を絞らぬはなかりけり。供養もやう／＼過ぎしかば僧達も皆歸りたまひ、や／＼暫くありて、急ぎ下りたくさうらへども、たま／＼のぼりて候へば、五郎が幼くて、住みたまひしかたを、見候はんとまうされければ、別當のたまひけるは、男になりて後、其の形見と思へば人を置かず、わざと破をも修理せず、昔に少しも違はず候ふ、いざさせたまへ、墓所をも築きて候へば、御覽せよとて連れて行き、立ち寄り見給へば、墓の上に草生ひけるを、別當見給ひて、君見ずや北邸のゆふべの雨、疊々たる青塚の色を、また見ずや、東郊の秋の風、歴々たる白楊のこゑをといへる、ふるき詩を思ひ出でたまふ。是はもとの住家と宣へば、軒の忍はもみちして、

おもひの色をあらはせり。歎はいづれも盡きせれば、しげるかひなき忘草、其の名ばかりはよしぞなき。なが月上旬のことなれば、四方の紅葉の色は、袖の涙を染むるかと思え、よにふる里は苦しきに、やすくも過ぐる初時雨、うらやましくぞ覺えける。壁に書きたる筆のすさみを見れば、

出でていなば心輕しといひやせん身のありさまを人の知らねば

といふ古き歌のはしを、箱玉丸とぞ書きたりける。師匠に暇をも乞はず、人にゆきがたをも知らせず、只一人いづること、思ひよりて語り、幼かりしおもかげ、只今の心地して、よしなき所へ來りけるとたえこがれければ、胸をこがす煙は感陽宮の夕の烟にことならず、袂に落つる涙は、龍門原上の草葉を染むる、おもてに落つるちりのうみ、かこちよれいとも言ひつべし。さてしも有るべきにあらざれば、泣く／＼母は會我にくだりしが、虎は大磯に歸らんとす。別當も五郎にわかれしこちして、御名殘惜しうこそ候へ、さて此の度の御佛事ありがたく候ふ、過去幽靈定めて正覺なりたまふべし、また大磯の客人の御志こそ、世にすぐれては候へ、構へて／＼怠らず申ひたまへと仰せられければ、虎も涙を抑へて、佛事を承りしこと、穢身發願の儀なりければ、あかぬ別の道、いつかは怠り候はんともうしければ、別當かされて申されけるは、あまたの寶を積まむよりは、誠の心には如かずとこそ

は宜ひける。

一四七 貧女が一燈の事

さる程に、虎が志の深きをもつて、昔を思ふに、天竺に阿闍世王といふ大王あり。常に佛を請じ、數の寶を捧げたまふ。或る時佛の御歸り夜に入りければ、王宮より祇園精舎まで、十萬石の油をもつて、萬燈をともしたまひけり。こゝに貧なる女あり。如何にもして此の燈明のかずに入らばやと思ひけれども、朝夕のいとなみだにも堪へがたき貧女なれば、一燈の力もなし。涙を流し、如何にと方便すれどもかなはで、東西に馳走し、みづから髪を切り、錢二文にぞ賣りたりける。これにてもやと思ひければ、油を彼の錢にて買ひ、やうやう一燈灯してどきけるは、我れ前業いかなりければ、百千燈をだにとす人のあるに、一燈をだに灯しかれたる、憂き身のほどの恨めしさよとて、彼の燈明の下に泣き伏しけり。この志を現はさんためにや、折節山風あらく吹きて、數の燈明を一度に吹き消しけり。されば貧女が一燈ばかりは消えずありけり。目連不思議に思し召し、袈裟にてあふがせ給ひけれども、消えざりけり。その時目連佛に問ひたまふ。多くの燈明の消ゆる中に、如何なれば一燈消え

ざるとまうさせ給へば、佛のたまはく、阿闍世王の萬燈のひかり、おろかにはあらねども、貧女が志の深きことを現さんがために、萬燈は消えて、一燈は残ると示したまふ。さればにや此の貧女成佛して、須彌燈光如來とまうすは、この貧女の事なり。長者の萬燈よりは貧女の一燈とまうし傳へたるは此の事なり、御志を上げまし候へ、かへすくと仰せられければ、虎も母も諸共に、深く追善の心あり。諸佛憐たまふらんと嬉しくて、おのゝ暇申して歸りにけり。母虎に申しけるは、今より後は常に來り姿を見たまへ、自らもまた十郎が名残に見奉りなん、しばらく會我にましくて、慰みたまへなどと語りて行きけるが、虎まうしけるは、嬉しくは承り候へども、此の人々の御爲に、毎日法華經六部づつ六人して、第三年まで志し候ふ、妾なくては無沙汰あるべし、くはしく申しつけて參るべしとまうしければ、母はまことの御志ありがたくこそ候へ、相構へて絶えず訪ひ訪はれまぬらすべしとて、泣く泣く打ち別れにけり。げにや有爲轉變の習、花は根に歸り、鳥は古巢に入り、日月天にかたぶき、松柏の青き色も、つひには衰の時あり、芙蓉の仇なるかたちは、松風に破るゝためし、歎きてもあまりあり、悲しみてもたへず、只ひとすぢに佛道を願ふ時は、草木國土悉皆成佛とぞ見えける。さても大將殿御出により、富士の裾野の御館、張ならべ軒をつゞけ、數ありしかども、御狩過

ぎしかば、一字も残らずもとの野原になりけり。されども残るものとは、兄弟の嗔恚執心、或る時は十郎祐成となりのり、或る時は五郎時致と呼ばはり、晝夜働ふ音絶えず、思はず通りあはする者、このよそほひを聞き、忽に死ぬる者もあり、やうく生きたる者は、狂人となりて、兄弟のことばをうつし、苦痛離れがたしと歎くのみなり。君聞し召されて、不便なりとて、遊行上人といふめでなき法師を請じ、弔はるべきよし細やかにこそ仰せけれ。

一四八 菅丞相の御事

さても彼の者共が亡鐘荒れければ、遊行上人 頼朝に申されけるは、昔もさるためしこそ多くさうらへ、かたじけなくも菅丞相の昔、謔言によつて筑紫へ流され、遂に歸京もなくして、むなしくなり給ひし其の嗔恚残り、雷と成りたまひて、都を傾け給はんとしたまひしか、天台の座主、一字千金の力をもつて、やうく和め奉り、神といはひたてまつるに、威光あらたにまします、今の天満大自在天神これなり。そのほか怒をなして、神と崇められたまふ御事、承平の將門、弘仁の仲成よりこのかた其の數多し。いかさまにも此の兄弟の人々をも、神におんいはひあるべきにやとぞ申されける。

一四九 兄弟神にいはるゝ事

さる程に頼朝、つくづく思し召しけるは、此の者共の振舞世に超えしことなり、神にいはひても益あるべしとて、せうめいくわうじんぐうと崇め、富士の裾野に社を立て、松風といふところを、なかく御寄進ありけり。すなはち彼の遊行上人を開山として、寺僧をすゑ、禰宜神主を定めて、五月廿八日には、殊に讀經神樂、いろくの奉幣を捧ぐることに絶えず。それよりして彼の處の斷絶えて、佛果を證するよし、神人の夢に見えけり。尊しともいふばかりなし。されば此の神にまゐり、敵討たせて給へと祈りければ、必ず叶ひけるとかや。今も遠國近國のともがら、歩をはこび仰がぬ者はなかりけり。

一五〇 虎箱根にて行き別れし事

さるほどに、大磯の虎は、十郎祐成討死して後、いかなる洲川にも入らばやと思ひけれども、亡入の菩提のためにもなるまじければ、ひとへに憂き世を背き、彼の人の後世を弔はんと思ひ立ち、袈裟

衣ころもなど調へて、箱根山に上り、百ヶ日の佛事ぶつじのをりふしに、泣くくひすぶ翡翠ひすぶのかざりを刺りおろし、五戒ごかいを保ちけり。さしも美しかりつる花の袂たもとをひきかへて、墨の衣にやつれはてけり。こゝろざしの程こそ類たぐひすくなきなきけなれ。母はこれを見て、我もおなじ墨の袂たもとになりて、彼等が菩提ぼだいをもとぶらふべし、今此のつくも髪をつけても何にかはせんとぞ、歎きかなしまれければ、別當べつたう様々に教訓けうくんしてとゞめられけり。母御前おんごぜん力なく、五郎が遺跡いせきなれば、名残なごりをしくは思へども、此處にて目を送るべきことなれば、別當べつたうに暇いとまを乞ひかへるとて、虎御箭とらごせんに申されけるは、曾我へ誘ひ、十郎が形見かたみに見参らせ候はんと言はれければ、虎もつとも御供おんぐも申し、たがひの形見に見え参らせたく候へども、大磯にての追善ついでん、又は善光寺への志さうらふ、下向げかうにこそ参り候はめとて行き別れけり。

一五一 井出の館の跡見し事

かくて虎思ひけるは、此の序ついでに十郎のむなしくなりし富士の裾、井出いでの館やかたの跡をこゝろざして、箱根うしほを後うしろになして行くほどに、其の日もやう／＼暮れぬれば、三島みしまの拜殿つやに通夜つやまうし、明くれば三島みしまか出でて、車くるまがへしに立ち休らひ、千本せんぼんの松原まつはらこゝろぼそくあゆみ過ぎ、浮島うきしまが原はらにも出でぬ。南は

若海わかうみ漫々まんまんとして、田子のうらなみ滔々たうたうなり。北は松山かう／＼として、裾野すののあらし嵐々あらしなり。未だ旅たびなれぬことなれば、彼處かたじをいづくいづくと知られども、志をしるべにて、やう／＼歩み行くほどに、井出いでの里さとに近づきぬ。虎は里の翁おきなに逢ひて問ひけるは。過ぎにし夏の頃、鎌倉殿かまくらどのの御狩みかりの時、敵討かたうちつて同じく討たれし曾我の人々の、跡あとや知らせたまひて候はゞ、をしへさせ給へと言ひければ、此の翁おきな心ある者にて、虎が顔をつく／＼と見て、若し御縁おんゆかりにても渡らせ給ひ候ふか、痛はしき御有様おんありさまかな、人も連れさせたまはず、只一人是まで御尋ね候ふこと、なほざりの御志ともおぼえず、若し十郎殿に御志深くわたらせ給ひし、大磯おおいその虎御前とらごぜんにてましますか、ありのまゝに承り候はゞ、教へまぬらせんと言ひければ、虎はこれを聞き、わかれの涙乾かぬに、又うちそへて、賤しづの男おとこが情なさけのことばに、うれへの色あらはれて、問ふにつらさの涙、忍びもあへぬ氣色けしきを見て、翁おきなさればこそと思ひて、ともに袖そでをぞしほりける。さらば誘ひ申さんとて、北へ六七町遙はるかに野を分け行けば、亡人なまひとの果てにけす草葉くさばの露かとなつかしく、洲しづの夜の雨あめ他郷たじやうの涙なみだ、岸柳がしりやうの秋の風かぜ遠塞とんさいの情なさけとかやも、思ひ出でられて、いづくともなく行く程に、日も夕暮ゆふぐれの峰の嵐、心細くぞきこえける。翁おきなあるかたをつまざして、あれこそ井出いでの館やかたの跡にてさうらへ、あの邊こそ工藤左衛門殿くどうざゑもんどのの討たれさせ候ふ處にて候へ、又彼處は十郎殿の

討たれさせたまひ候ふ處、此處は五郎殿の御生害の處、さて又あれに見え候ふ松のもところ、二人の死骸を隠しまぬらせたる處さうらふよと、懇にをしへければ、虎涙をおさへ、かつうはうれしく、かつうはかなしくて、只泣くより外のことぞなき。一村松のもとに立ち寄り見れば、げにも埋れておぼえ候ふ土の、すこし高く見えけれども、過ぎにし五月のすまの事なれば、花薄葎生ひしげり、其の跡だにも見えざりけれども、亡人のゆかりと聞くからに、なつかしく覚えて、塚のほとりにふし轉び、我も同じ昔の下にうづもれなば、今更かゝる思ひはせざらまし、黄泉いかなるすみかなれば、逝きてふたしび歸らざると、伏し沈みけり。あはれなりし有様、たとへん方こそなかりけれ。まことに翁も心ある者なれば、ともに涙を流しけり。諸共に斯くてはかなはじとや思ひけん、翁まうしけるは、如何に御歎き候ふとも、其の甲斐あるまじく候ふ、夜になれば、此の處には狼と申すもの、道ゆく人になやまし候ふ、御留り候ひてはかなふまじく候ふ、これより御留り候うて、こよひは賤がふせやになりとも御泊り候ひて、一夜を明かさせたまひ候へ、旅はなにか苦しく候ふべきと申しければ、嬉しくも宜ふものかな、このあたり懇にをしへ給ふに、宿まで思ひよりたまふ事のうれしさよ、さやうに怖しきもの、候ひて、身を捨てしも何にかはすべきとて、塚のほとりにて念佛申し、過去無量成佛得脱

と廻向すれば、十郎の尊靈もいかばかり嬉しくおぼすらんと、思ひやられてあはれなり。虎涙のひまより斯くぞつらねける。

露とのみきえにし跡を來て見ればをばながすみに秋風ぞ吹く

憂き世ぞと思ひそめにし墨ころも今また露のなにとおくらん

かくて井田の邊をゆきわかれ、其の夜は翁のところを留まり、明けぬれば野原の露しをれつゝ、足にまかせて行く程に、富士の烟を見るからに、つらき思ひにたぐへつゝ、其處とも知らぬ道のべの、叢ごとの蟲までも、啼く音を添へてあはれなり。げにただだにも秋のおもひは悲しきに、やつれ果てぬる旅衣、いとどつらさを重ねつゝ、たどるくも行くほどに、手越の宿にぞ著きにける。

一五二 手越の少將に遇ひし事

借も虎は、或る小家に立ち寄りて、主の女をかたらひて、少將御前を呼び出して、旅人のこれにてそと申すべきことの候ふと、申したまへと言ひければ、易きこととて呼び出しけり。少將は、虎がかはれる姿を見て、言ひ出すべき言葉もなくて、たゞ涙をぞ流しける。やゝありて虎、泣くく申しけ

るは、かの祐成に相馴れて、すでに三年になり候ふ、宿縁ふかきゆゑにや、また餘の人を見んと思はざりつるなり、此の人うせたまひぬと聞きし時は、おなじ昔の下に埋ればやと思ひしかども、つれなき命ながらへて候ふぞや、されば世をわたる遊者のならひは、心にまかせぬことも候ふべしと思ひて、百ヶ日の佛事のついでに、箱根にて髪をおろして、只一人まよひ出で、富士の裾野のほとりにて、其の人の跡ばかりなりとも見て、愛かりし心をも慰み、ついでに此の邊近くおはしますなれば、見參に入りものがたりをも申し、此の姿をも見えまゐらせんと思ひて、これまで來りて候ふと語りければ、少將も涙をおさへて、げに／＼いばかり御歎きと思ひやられてこそ候へとて、泣くより外のことぞなき。かされて少將いひけるは、過ぎにし夏のころ、工藤左衛門に呼ばれて酒を飲みし時、十郎殿をも呼び入れまゐらせしかば、はじめて見參に入りしなり。工藤左衛門悪口に、此の殿の思ひきりたまへる色現はれて、只今事いできぬべしと、座敷もすさまじく候ひしに、何とか思はれけん、酒飲みおししづめて立たれし事、只今のこゝちして哀にさうらふぞや、我々立ち出で、斯くとも知らせまうしたく候ひしかども、御身と親しきこと、人に知られんも憚りしかば、さてのみ過ぎしなり、その夜前經の毀居のこと、めとの童にて妻戸のかきがねはづさせし事、不思議にこそおぼさめ、たとひ一

夜の妻なりとも、たがひの情を思ふべきに、いかなる事にや、如何にもして討たせまゐらせんと思ひし事、只ひとへに御身ゆゑぞかしと語りければ、虎は此の事をはじめて聞き、十郎殿最期の時、かゝる教をいかばかり嬉しく思ひたまひけん、此の告なかりせば、いかてか本意を遂げさせ給ふべきにやと、おろかなる身は思はれて、いよく涙にむせびけり。

一五三 少將出家の事

斯くて少將は、虎がかはれる姿を見て、まことにうらやましくなれる姿かな、道理かな、理かな、さらぬだに愛き世のあだなるを思ふに、千年の松もつひには朽ち、樞の露のいのちぞかし、ましてや女は五障三従の罪深しとまうすなり、たま／＼人身を受けながら、殊にわれらは罪ふかき身なり、その故はたゞ一生の間、人を誰さんとばかりなれば、心を往來の人にかへ、身を上下の輩にまかせ、日も西山にかたぶけば、夢の中のかりの姿をかざり、月東嶺に出でぬれば、誰とも知らぬ人を待ち、夜毎にかはるうつりがの、身にとゞまりて心を惜し、朝な朝なの手枕の、露になごりを惜しみつゝ、胸をのみこがす事、かへすくも口惜しき愛き身なり、此の世はつひのすみかにあらず、水にやどれる

月よりも、はかなしと思ふ折節、この人々のことを聞き、また御身の變れるすがたを見て、いよく憂き世に心も留らず、昨日は曾我の里に花やかなりしがた、今日は富士野の露と消ゆ、朝に紅顔あつて世路にほこれども、夕には白骨となつて、郊原に朽ちぬといふもことわりなり、さればにや萬事は無二亦無三なり、御身は十郎殿を善智識として、うき世をそむき給ふ、我はまた御身のすがたを善智識として、ころもを墨に染めんと思ひ候ふとて、やがて翡翠の髪を剃りおとし、花の袂を脱ぎかへて、こき染染にあらためつゝ、年廿七とまうすに、駿河の國手越の宿を立ち出でけり。世を捨つる身と言ひながら、心づよくも住みなれし、我が故郷を立ちはなれにし心中、實にやさしくあはれなりとかや。

一五四 虎と少將と法然に逢ひ奉りし事

さる程に、二人は打ち連れだち、麻のころも紙のふすまを肩にかけて、諸國を修行し、信濃國善光寺に、一兩年のほど、他念をまじへずして念佛申し、過去聖燈頓生菩提と祈り、また都に上り、法然上人に逢ひたてまつり、念佛の法談をくはしく聽聞し、いやましに念佛修行すゝみけるこそありがた

けれ。

一五五 虎大磯に閉ぢ籠りし事

斯くて虎は、山々寺々拜みめぐりけるが、遠に故里やこひしかりけん、または十郎の在りしほとりやなつかしく思ひけん、大磯に歸り、高麗寺の山の奥にたづねいり、柴の庵にとごもり、一向千壽の經を誦し、九品往生の望おこたらず、二人の尼もるとともに、一つ庵に床をしめ、行ひすましてぞおはしける。

一五六 母と二宮の姉大磯へ尋ね行きし事

さても曾我の母御前は、一日片時も世にながらふべき心地はなけれども、力およばぬ憂き世のならひとて、思はずに年月をぞおくりける。人の子のおなじ齡なるを見ても、二人が面影身にそひてかなしく、人のやまひにて死ねるをも、彼等がせめて斯くあらば、とりあつかひし物をともしふべきに、かりそめに立ち出でて、ふたゝび歸らぬわかれこそ、神ならぬ身のつらさなれ。あまりの戀しさの折

折は、つねに二宮の姉を呼び、愛き事どもを語りあひて、泣くより外のことはなし。さてもつながらぬ月日なれば、第三年もなり、七年にあたる時に、姉を呼びて言ひけるは、今日はこの者共が、七年忌に當りさうらへば、追善を營み弔ひはべるなり、さても十郎がちぎり深かりし大磯の虎、百ヶ日の佛事のついでに、箱根にて尼になり、御山より行きわかれしが、善光寺に一兩年籠りて、その後諸國を修行して、今程は大磯にかへり、高麗寺の山の奥に、行ひすまして候ふよし聞きおよびしに、いざや虎が住家見ると言ひければ、妾もさこそと思ひさうらふに、御供申さんとて、二人會我の里を立ち出て、中村を通り山彦山を打ち越えて、高麗寺の奥にたづね入り、夏草の繁みが末を分け行く程に、袖は涙裾は露にしをれつゝ、彼のあたりなる里の翁に問ひけるは、虎御前とまうせし人の、尼になりて住みたまふ所は、何處にて候ふやらんと思ひければ、あれに見えさうらふ山の奥に、森の候ふところこそ、彼の人の草庵にて候へとをしへければ、うれしくもわけ入り見れば、まことに幽なる住居にて、垣には葛藟類はひかゝり、軒には垣衣まじりの忘草、露ふかくして、ものおもふ袖にことならず、庭には蓬おひしげり、鹿の臥處かとぞ見えし。飄箆しばく空しくして、草顔淵がちまたに満ち、藜藿深くとざして、雨原憲が柵をうるほすとも見えたり。まことに心細くて、人のすみかとも見えざりけり。

一五七 虎出で逢ひて呼びいれし事

さても母や二宮の姉は、やゝ久しくかなたに立ち廻り見ければ、中にかすかなる聲にて、日中の禱參の勤もはてぬとおぼしくて、念佛忍びく心に心細くまうしけるを聞きて、尊くおぼえ、柴の編戸をほとくとたゞき、ものまうさんと云へば、虎誰ぞと答ふるを見れば、未だ三十にもならざる者が、ことのほかに疥せおとるへ、いつしか老のすがたに打ち見えて、濃きすみぞめの衣に同じ色の袈裟を掛け、菩提樹の珠敷花の帽子とり具して、香のけぶりに染みかへり、かしこくも行ひ入りたる其の姿、竹林の七賢、商山に入りし四皓も、是にはいかで勝るべきと、うらやましくぞ覺えける。此の人々を只一目見て、夢のこゝちして、あらめづらしの御渡候ふや、さらに現ともおぼえず候ふ、まづ内へ入らせたまへとて、二間なるところを打ち拂ひ、これへと請じ入れつゝ、亡人の母や姉ぞと見るよりも、ながるゝ涙をおさへがたし。母も姉もなく、庵室の體を見まはせば、三間に造りたるを、二間をば持佛堂にしらへ、阿彌陀の三尊を東向にかけ奉り、淨土の三部經、往生要集の八軸の一乗

妙典も、机の上におかれたり。又かたはらに古今・萬葉・伊勢物語・狂言繪語の草子ども取り散らされたり。佛の御前に六時の花香鮮かにそなへ、二人の位牌の前にも花香同じく供へたり。二宮の姉言ひけるは、あらありがたの御志のほどや、是を忘るまじき事と思ひたまひて、二人の位牌をたて申ひたまふことよ、借老の契淺からずとまうすも、今こそ思ひ知られて候へ、但し十郎殿ばかりをこそ申ひたまふべきに、五郎殿まで申ひたまふ事のありがたきよ、妾は現在の兄弟にて候へども、これほどまでは思ひ寄らず、いづれも前世の宿執にて、善智識と成りたまひぬと、言ひも果てず涙をながしければ、母も少將も聲立つるばかりにぞ悲しみける。稍ありて母言ひけるは、十郎がこと忘るゝ間も候はれば、常にも参り見たてまつりたく候ひしかども、心にまかせぬ女の身なれば、人の心をはゞかるなどとせし程に、今まで斯る御住居をも見まぬらせず候ふ、彼の者共が七年の追善、會我にて取り營み、また御有様をも見まぬらせたく候うて、これなる女房を誘ひきたりて候ふぞや、また親子恩愛のいたつて切なる事、人のまうしならはすをも、我が身の上かと思はれ候ふ。年月やうく過ぐれども、忘るゝことも候はず、されば様を變へんと思ふも、なさあひ者ども棄てがたくて、思ひも切らず候ふ、是とまうすも、志のいたつて切ならざるかと、わが身ながらもうたてく覺え候ふ、御身もさして久し

き契にてもまします、そのうへ所領持ちて便ある事ならねば、思出がましきこともなし、只ひとへに前世の宿執にひかれて、たがひに善智識になりたまひぬと、餘にたふとくあはれに覺えて、妾までも一つ蓮の縁をむすばばやとおもひ候ふなり。およそ人間の八苦、天上の五衰は、今に始めぬことにて候へども、前業のつたなき身なれば、無常の理にもおどろかず、つれなく憂き世にながらへ候ふ、我が身ながらもあましく候ふ、然るに五障三従の身ながらも、さいはひに佛法流布の世にむまれて、川離生死の道をもとむべく候へども、女人のおるかさはそれもかなはず候ふ、面々は此の程思ひとり給ふことなれば、後生の助かるべき事をも知らせたまひて候ふらん、あはれ語らせたまへかし、かなはぬまでも心にかけて見候はんと言ひければ、虎涙を止めてまうしけるは、まことに是までの御入夢のこゝちして、御志ありがたく思ひ候ふ、斯る身となりはてぬるも、しかしながら、十郎殿ゆゑと思ひたてまつれば、時のまも忘るゝ事もはんべらず、此の世は不定の境なれば、哀別難苦のかなしみを離へして、菩提の彼岸にいたる事もやと、聖經の要文どもあらくたづね求め、しかるべき善智識にも逢ひたてまつるか、諸國を修行し、都に上り、法然上人に逢ひたてまつり、念佛一行なうけ、ひとすちに淨土を願ひさうらふなり、あの尼御前は、我が姉にてましまし候ふ、みづからを羨みて、同

じくともに様をかへ、一つ庵にとごもり行ひ候ふなり、今思ひさうらへば、此の人は發心のたよりなりけりと嬉しくおぼえ候ふ、其の上妻不思議に、釋尊の遺弟につらなりて、比丘尼の名をけがし、かたじけなくも本願の稱名を頼み、三時に六根を清め、一心に生死を離れんことを願ひ候ふ、本願いかでかあやまりまたふべきと、疑の心もさうらはず、五郎殿もおなじ煙と消えたまひしかば、二人とも成佛得脱ととぶらひ奉らんために、二人の位牌を安置して候ふなり、諸法悉縁機とて、何事も縁にひかれ候ふなれば、二人共に順縁逆縁に、得道の縁とならんこと疑あるべからず、およそ分段輪廻の里に生まれ、必ず自滅のうらみを得、妄想如幻の家に来ては、つひに別離のかなしみあり、出づる息の入る息を待たぬ世の中にもまれ、あまつさへ遇ひがたき佛教に遇ひながら、このたび空しく過ぐるごと、寶の山に入り手をむなしくするなるべし、相構へて佛道に御心をかけ、淨土へまゐらんと、思し召すべきなりと申しければ、母も二宮の姉も湯仰肝に銘じて、隨喜の涙を流してまうしけるは、世路に交はる習、世の中のいとなみに心を懸け、ふたたび三途の故郷に歸り、如何なる苦患を受け候はんずらんと、かれて悲しく候ふ、さればたつとき人にも逢ひたてまつり、女人の得道すべき法門開かまほしく候へども、しかるべき縁なれば、とかく過ぎゆき候ふところに、今の念佛まうす

とて、人なみくに唱へまうせども、何と心を持ち、如何やうなる趣にて往生すべく候ふや、かつて思ひ分けたることも候はず、同じくばついでに委しく承りさうらはし、いかばかり嬉しく候ひなんとぞ言はれける。これ偏に彼の者共の死したりける縁によつて、佛道にこゝろざしけり。まことにかの者共死して親に思ひを懸けゝるとは雖も、佛道にも入りなば、一つの孝行にもなりなんとぞ思はれける。ありがたくこそ覺えけれ。

一五八 少將法問の事

斯くて母も二宮も、佛道の趣委しく聞かまほしくこそ候へと申しければ、虎は少將の方を見やり、すこしうち笑ひ、姉御は念佛の法問ども知らせたまひて候へ、申して聞かせまぬらせ給へとまうしければ、妾もくはしき事は知りまぬらせず候ふ、一年都にて、法然上人仰せられしは、そもく生死の根源をたづね候へば、只一念の妄執にひかされて、よしなく法性のみやこを迷ひ出でて、三界六道にむまれ、衆生とはなれり。されば地獄の八寒八熱のくるしみ、餓鬼の饑饉のうれへ、畜生三界のおもひ、そのほか天上の五衰、人間の八苦、一として受けずといふことなく、上は有頂天をかぎり、下は

泥梨（にり）をきはみとして、出づる事はなきがゆゑに、流轉（りてん）の衆生とはまうすなり、しかりと雖も、宿善（しゆくぜん）や儲しけん、今人間に生れぬ。内に本有（ほんゆう）の佛性（ぶつじやう）あり、外に諸佛（しよぶつ）の悲願（ひがん）あり、人木石にあらざ、發心（はつしん）せば、などか成佛（じやうぶつ）得（とく）脱（だつ）なからん、それにつきて修行（しゆぎやう）まち／＼なりと雖も、我等（われら）ごときの衆生（しゆじやう）は、諸經（しよきやう）の徳にかなひ難し、まづ法然（ほふぜん）房（ぼう）が如くは、七千餘卷の經藏（きやうざう）に入りて、つらく／＼出離（しゆつり）の要機（ようき）を案ずるに、顯（けん）につけ密（みつ）につけ、開悟（かいぶ）やすやらず、事といひ理といひ、修行（しゆぎやう）成就（じやうじゆ）し難し、一實（いちじつ）圓融（えんじゆう）の窓の前には、即（そく）是（ぜ）の妙觀（めうくわん）に疲れ、三密（さんみつ）道諦（だうたい）の床の上には、また現世（げんぜ）のせうにう現（げん）はしがたし、しかる間世（まんぜ）の業（ごふ）をはかりて、淨土（じやうど）をねがひ他力（たりに）をたのみて名號（なごう）を唱ふ、まことに淨土（じやうど）の經文（きやうもん）は、直指（ぢきし）だうぢやうのもくぞくなり、有智（うちち）無智（むち）たれの人か歸（き）せざらんや、既に正相（しやうきやう）早くくれて、戒定慧（かいぢやうゑ）の三學（さんがく）は名（な）のみ（のみ）のこりて、有（う）經（きやう）無人（むにん）、有名（うみやう）無實（むじつ）なり、殊（こと）に女人（にょにん）は五障（ごしやう）三從（さんじゆう）とて、障（しやう）ある身（み）なれば、即身（そくしん）成佛（じやうぶつ）はまづおきぬ、問法（もんぽう）結（けつ）緣（えん）のために靈佛（りやうぶつ）靈社（りやうしゃ）に詣（ま）づるさへ、踏（ふ）まざる靈地（りやうぢ）あり、拜（はい）せざる佛像（ぶつざう）あり、天台（てんたい）山（さん）は桓武（げんぶ）の御願（ごがん）、即（そく）敬（けい）の御建立（ごくわんじやう）なり、一乘（いちじやう）の峯（かみ）高（たか）うして、眞如（しんによ）の月朗（げつらう）なりと雖も、五障（ごしやう）の闇照（やみあ）することなし、高野山（たかのやま）は嵯峨（さあが）の天皇（てんかう）の御宇（ごう）、弘法（こうぼう）大師（だいし）の地（ぢ）をしめし、入葉（にふせつ）の嶺（ね）八（はち）つの谷（や）、れい／＼として水（みづ）いさぎよしと雖も、三從（さんじゆう）の垢（か）をすゝがす、そのほか金峯山（きんぷせん）の雲（ぐも）の上（のうへ）、醍醐（たいご）三井（さんせい）寺（じ）殿（でん）のそこふかし、白山（しろやま）書寫（しよゐ）の寺（じ）、かやうの

所々（ところどころ）には女人（にょにん）近（ぢ）づく（く）こともなし、されば或る經の文には、三世（さんぜ）の諸佛（しよぶつ）の眼（まなこ）は大地（だいち）に落（お）ちてくつるとも、女人（にょにん）成佛（じやうぶつ）することなしといへり。又或る經の文には、女人（にょにん）は地獄（ぢごく）の使（つか）なり、よく佛（ぶつ）の種（たね）を斷（た）つ、外（そと）の面（おもて）は菩薩（ぼさつ）に似たれども、内の心（こゝろ）は夜叉（やしや）のごとしといへり。されば内典（ないでん）外典（げいでん）に嫉（ねた）はれたるところに、彌陀（みだ）如來（にょらい）こそ、極重（ごくじゆう）惡人（あくにん）無他（むた）方便（ぼうべん）と誓（ちか）ひて、別にまた女人（にょにん）成佛（じやうぶつ）の願（ねが）を起（おこ）したまふ、かほどに懇（ねん）にあはれみ給（たま）ふ事を、信（しん）ぜず行（ぎやう）ぜずして、又三途（さんず）に歸（かへ）らんこと、たとへば耆婆（しよば）が萬病（まんびやう）をいやす藥（くすり）に、もろ／＼の藥（くすり）をなんりやうあはせりとは知らざれども、服（くすり）すればすなはち癒（な）ゆ、病（やまひ）きはめて重（おも）き者の、藥（くすり）ばかりにてはと疑（うたが）ひて服（くすり）せずは、耆婆（しよば）が醫術（いじゆつ）も扁鵲（へんじやく）が醫方（いほう）も益（えき）あるべからず、その如く、煩惱（ぼんぷ）惡業（あくごふ）は極（ごく）めて重（おも）し、此（こゝろ）の名號（なごう）にてはいかゞと疑（うたが）ひて、信（しん）ぜず行（ぎやう）ぜざらんは、彌陀（みだ）の本願（ほんがん）も釋迦（しやくか）の說法（しふぽう）もむなしかるべし。そも／＼藥（くすり）を得（え）て服（くすり）せずして死（し）せんこと、崑崙山（こんろんざん）に行（い）きて、玉（たま）を取（と）らずして歸（かへ）り、梅檀（ばいだん）の林（りん）に入りて、栴（せん）を攀（か）ぢ（ぢ）ずして出（で）てなげ、後悔（こうかい）するともよしなし。そのうへ五劫（ごこつ）思惟（しゆい）、兆載（てうざい）永劫（えいこつ）の萬善（まんぜん）萬行（まんぎやう）、諸婆（しよば）羅衛（らゑ）の功德（くどく）を、三字（さんじ）にわさめ給（たま）へり。されば阿字（あじ）十方（じふじやう）三世（さんぜ）佛（ぶつ）、彌字（みじ）一切（いちじやく）諸菩薩（しよぼさつ）、陀字（たじ）八萬（はちまん）諸（しよ）聖經（せいきやう）といふ時は、八萬（はちまん）經法（きやうぽう）諸佛（しよぶつ）菩薩（ぼさつ）も、名號（なごう）は廣大（くわんだい）の功德（くどく）となれり、されば天台（てんたい）には法報（ほふぽう）應（おう）の三身（さんしん）、一（いち）空假（くうげ）中の三諦（さんたい）なりと釋（しやく）しまし／＼候（まう）ふ、森羅（しんら）萬象（まんざう）せんがだいち、彌陀（みだ）に漏（も）れたることなし。これによ

つて只もつばら彌陀をもつて法門の主とすと釋したまへり。じやうみの行には威徳たり、だいにりそくせんしやう功德と説き、ほふるの行には、一萬三千佛を、高さ十丈に、黄金をもつて十度作り供養せんよりも、一遍の名號はすぐれたりといへり。善智識の教をふかく信じて、南無阿彌陀佛くと、唱ふれば、三祇百大劫の修行をも超え、塵沙無明の惑をも断ぜず、致使凡夫念即生、不斷煩惱得涅槃とて、終焉の時は一さんの心を變化して、觀音勢至むしゆの聖衆、化佛菩薩踴躍歡喜して、須臾のあひだに無爲の報土へまゐりなば、無邊の菩薩を同學とし、正覺の如來を師とし、寶地に遊び樹下に往きて、鸚鵡・舍利・迦陵頻伽の聲を聞き、空無常無我の四徳波羅密のさとりを開きたまひなば、過去のなんしよしやうくの父母、妻子眷屬有縁の衆生をみちびかん爲に、とうねん猛火のほのほに交りたまひ、紅蓮大紅蓮の水に入りたまふとも、解脫の袂は安樂として、濟度利生したまふべし、但し往生の成不成は、信心の有無によるべし、ゆめく疑ふことなかれと宣ふを、我々は聽聞まうして候ふと申しければ、母感涙をおさへて言ひけるは、今の法門聽聞まうし候へば、信心肝に銘じてあり難く候ふ、今より後は、方々の御弟子にて候ふべしとて、三度伏し拜まれけり。有り難かりしこといもた

一五九 母と二宮行き別れし事

さるほどに、日もやうく傾きて、高麗寺の入相もきこゆれば、なごり盡きせず思へども、おのゝ立ち出でて、二宮の里へとこそ歸りけれ。虎少將は門送して、後のかくるゝ程見おくり、涙とともに麻室に歸り、初夜の禮讃はじめて、念佛こゝろばそくぞ申しける。その後人々のゆくへを聞けば、おのゝ宿所に歸り、閉きつる法問の如く、造次頓沛一心不亂に念佛す。昔は夫婦偕老のわかれを慕ひ、今は兄弟の斯くなりゆく事の思や積りけん、老病といひ歎といひ、六十の暮方に念佛まうして、遂に往生しけるとぞきこえける。さて二人の尼御前、或る夜の夢に、十郎五郎打ち連れ來り、頭には玉の冠を著、身には瓔珞を飾り、光明赫奕として、おのゝを伏し拜み申しけるは、此の間念佛まうし經を讀み、れんごろに帋ひ給ふゆゑに、兜率の内院にまゐる、これしかしながら、夫婦偕老のちぎり深きによつて、無爲眞實の解脫の因となる、其の恩徳は億萬劫にも報じがたしとて、虚空へ飛び去りぬ。虎夢さめて、只うつゝの心地して思ひけるは、五従の間晴れ、三明の月朗にまします、大聖釋尊さへ、耶輸陀羅女の別をおぼしめす、いはんや我等此の年月戀しと思ふところに、まのあたりに兄

弟を夢に見て、昔こひしくなりぬ、されば夜の猿は傾く月に叫び、秋の蟲は枯れゆく草に悲しむとかや、鳥獸までも哀別離苦をかなしむと見えたり。しかれば此の道は、迷ひなば、ともに惡道の輪廻斷ち去りがたし、悟りなば、皆正等菩提の因縁となりぬべし、偕老同穴の契誠にあらはれ、九品蓮臺の上にては、もとの契をうしなはず一蓮に座をならべ、解脱の袂をしぼるべしとて、少將も、共になみだをぞ流しける。さて彼の二人の尼、こゝろざし淺からずして、虎が嶺に上りて花をつめば、少將は谷に下りて水をむすび、一人花を供ふれば、一人は香を焚き、ともに一佛淨土の縁を結ぶ。谷の水峯の風發心のなかだちとなり、花の色鳥の聲おのづから觀念のたよりとなる。つくづく思へば萬物轉變のことわり、四相遷流のならひ、上界より下界にいたるまで、一つとしてのがるべきやうなし、日月天にめぐりて、有爲を且暮にあらはし、寒暑時をたがへず、無常を晝夜に告ぐ。されば漢の高祖の三尺の劍も、遂に他の寶となり、秦の始皇のはりの都も、自ら荆棘の野邊となる。かれをおもひこれを見るにも、唯ひとへに浮世を遁れ、まことの道に入るべきものをや。かゝりし程に二人の尼、行業積り、七旬の齡たけ、五月のすゑつかた少病少惱にして、西にむかひ肩をならべ膝をくみ、端座合掌して、念佛を唱へて、一心不亂にして、音樂雲に聞え、異香薫じて、聖衆來迎したまひて、眠るが如

く往生の素懷を遂げにけり。たかきもいやしきも、老少不定の世の慣、誰か無常をのがるべき。とみもたからも、遂には夢のうちのたのしみなり。殊に女人は罪ふかきことなれば、念佛に過ぎたることあるべからず。斯様のものがたり見聞かん人々は、狂言綺語の縁により、あらしき心を離へし、まことの道におもむき、菩提を求むるたよりとなすべし。其の心も無からん人は、斯る事を聞きても何にかはせん。よくく耳に留め心に染めて、ながき世のくるしみを遁れ、西方淨土に生るべきものなり。

新會
會我物語終

明治四十四年八月二十五日印刷
明治四十四年九月一日發行

學生文庫第 五編



會我物語
定價金拾錢

校訂者 大町桂月

發行者 加島虎吉

印刷者 佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

東京市日本橋區
本石町三丁目
電話 浪花五八四九番
振替貯金口座東京一七四四番

至誠堂書店
至誠堂小賣部

發兌

新譯漢文叢書第三編 濱野知三郎先生註解

全四冊縮刷全壹冊

○新譯孟子 (附索引)

袖珍天金箱入特製 紙數八百頁 正價金九拾錢 郵稅金八錢

○讀賣新聞評、孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知るときは直に其全文を求め得るの便に供したり：其和譯の正當なる註釋の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇抜なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一位に置くべきもの青年子弟の讀物として最も現代に適切のもの：此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりも愉快とせざるを得ず

新譯漢文叢書第四編 大町桂月先生譯評

全壹冊

○新日本樂府

袖珍天金箱入特製 紙數三百五十頁 正價金五拾錢 郵稅金六錢

當代に異彩を放てる大町桂月先生稱きに日本外史を譯せられ今又頼山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず之を評せらる徹底の見老熟の筆明快を極めて渾然として桂月一流の名文となり朗誦すべく尊王の詩人又愛國の詩人として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむり以て日本歴史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起たん。

新譯漢文叢書第五編 大町桂月先生譯評

全十六冊縮刷全壹冊

○新日本政記

袖珍天金箱入特製 紙數六百廿餘頁 正價金八十錢 郵稅金八錢

頼山陽前に日本外史を著して武門の興廢を説き、後に日本政記を著して朝廷施政の大綱を明にせり。先頃喧嘩を極めたる南北朝問題の如きも、翁が八十年前政記に於て既に解決したる所に於て、兼ねて維新の大動力となりたる所なり。殊に政記は翁が死に至る迄も手刪して止まざりしものにして、翁が尊王愛國の精神の形見なり。識見正大、文章雄健、光銚陸離として、實に史界の一大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は文章雄健、光銚陸離として、を付し、大町桂月先生之を翻譯せられ、一々精密に誤謬を正し、難解の語に解釋を施し、振假名を相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目茲に一新す。日本國民必す一本を備へざるべからず。

新譯漢文叢書第六編 久保天隨先生譯評

全七冊縮刷全壹冊

○新十八史略

袖珍天金箱入特製 紙數七百頁 正價金八十錢 郵稅金八錢

上下五千年、興亡八十餘朝、支那歴史の殆んど全體は、十八史略の一書に因りて、その大綱を領知すべし。加ふるに、この書は、譯者が特に意を用ひしものにして、妥當穩健、復た一字一句も苟もせず。卷中に挿入せし數百條の評語は奇警峭拔、その史實と相待つて覺えず、案を拍つて快哉を叫ばしむ、加之、篇首には、精細なる解題を載せ、卷末には便利なる新式の索引を添ふ。

新譯漢文叢書第七編 友田宜剛先生評解

○新譯續文章軌範

續文章軌範は正文文章軌範と相待つて古今作文書の變遷古人が心血を凝らしたる千古の名文陸離として光彩を放つてり文に志す者は必ず之を座右に致して日夕に誦とし友とすべし作文教授の泰斗友田宜剛先生は刻苦研鑽多年の登雪を積んで之を完全なる明治の作文模範化せられたり今其特長を一言せんか從來漢文讀方の通弊たる文法の誤りに深く注意し本文は新式ゴシック活字振假名付にして難解の字には解辭を施し各文の始めに作者略傳を付し篇末には文法と總評と相待つて和漢の文典東西の修辭法より切實に作文法を教へ上欄に原文を掲げて對讀に便す要するに文章界は本書を得て更に五百燭光の明燈を掲げたり正續彼此相待つて日月を並べ懸けたるが如し歟はくば江湖の諸彦一書を座右に備へ給へ

全七册縮刷全壹册

袖珍天金箱入特製 紙數壹千頁 定價金壹圓 郵稅金八錢

新譯漢文叢書第八編 大町桂月先生譯評

○新譯國史略

萬世一系の天皇を載ける神州に生れながら神州の尊き所以を知らず三千年金甌無缺の歴史の實質を知らず人心輕佻となり浮華となり尊き愛國の精神失せて士氣銷磨せむとするは今の世の大患なり世の歴史教科書は唯歴史の骨組のみありて肉なく血なし歴史教育の宜しきを得ざること其大原因ならずんば大町桂月先生は古來の諸國の粹を抜き要を取り日本外史日本政記日本樂府を譯され又國史略を譯さる國史略は古來の諸國の粹を抜き要を取り日本外史日本政記日本樂府を譯され今に定評あり筆を開闢に創めて篇を聚樂第行幸に結びたるにても作者の精神を諒とするに足る然るに此名著も漢學教育衰へて空しく閑却されんとす現代の文豪大町先生今之を譯し之を解し適切なる批評を加へて有益なる貴重なる國史略茲に復活す國史を知らんとする者は一本を備へよ

全五册縮刷全壹册

袖珍天金箱入特製 近刊印刷中

